

靈界物語 第二五卷 海洋萬里 子の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二五卷』愛善世界社

1998(平成10)年04月05日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 相縁奇縁 あひえんきえん

第一章 水禽の音 すゐきん おと〔七四七〕

第二章 與太理縮 よたりすく〔七四八〕

第三章 鴉いすかの戀こい〔七四九〕

第四章 望のぞみの縁えん〔七五〇〕

第二篇 自由活動じいうくわつどう

第五章 酒くしの瀧壺たきつぼ〔七五一〕

第六章 三腰岩みこしいは〔七五二〕

第七章 大蛇をろち解脫げだつ〔七五三〕

第八章 奇くしびの巖窟がんくつ〔七五四〕

第三篇 龍たつの宮居みやゐ

第九章 信仰しんかうの實み〔七五五〕

第一〇章 開悟かいごの花はな〔七五六〕

第一章 風聲鶴唳〔七五七〕

第二章 不意の客〔七五八〕

第四篇 神花靈寶

第三章 握手の涙〔七五九〕

第四章 園遊會〔七六〇〕

第五章 改心の實〔七六一〕

第六章 眞如の玉〔七六二〕

第五篇 千里彷徨

第七章 森の囁〔七六三〕

第八章 玉の所在〔七六四〕

第一九章 竹生島（七六五）

序文

此卷はバラモン教の豪傑蜈蚣姫母子を初め、小絲姫を誘拐したる友彦や清公、
其他の人々が心の底より信仰の法悦に浴し、執着心を拂拭し、龍宮の寶玉を授か
り、地の高天原に勇ましく凱旋したる改心物語であります。一片の創作物として
讀むも、修身治心の軌範となる事を深く信じます。

惟神道の光に照らされて

地獄だましひも天國に進めり

大正十一年七月十二日 於龍宮館

梧桐一葉落ちて天下の秋を傳ふ。春風一陣水を過りて萬波揺ぐ。成因成果悉く
 皆物の教とならぬはない。山野の樹草は風に吹かれて自然の舞蹈を演じ、河水は
 獨り音楽を奏し、鳥歌ひ蝶舞ひ花笑ふ至美至樂の天地、一として神の御聲ならざ
 るは無く、神の御姿ならざるはない。空に輝く日月も、星晨も、皆是神の表現、
 天地は吾々の大師であり經典である。善惡美醜一として神の御姿ならざるはない。
 あゝ三界の物語、述ぶる處は一切の神業のみである。瑞月が走らす口車も又神の
 一端の御用たる事を疑ひませぬ。

大正十一年七月十二日（舊閏五月十八日）

於龍宮館

第一篇 相縁奇縁

第一章 水禽の音〔七四七〕

時間空間超越し

現幽神の三界を

過去と未来と現在に

通観したる物語

伊都の教祖が良の

神の御言を蒙りて

現はれ給ひし瑞祥の

明治は二十五年

それに因みし巻の數

須彌仙山に腰を掛け

三千世界を守ります

神に習ひて掛巻くも

畏き神の現れませる

高天原の大宇宙

その外側に身を置きて

ここに六合隈もなく

見渡し給ひし瑞御靈

神素盞鳴の御心を

汲み取り給ふ大八洲彦

神の命は月照の

瑞の御靈と現はれて

綾の聖地に身を潜め

五十路の坂を二つまで

越えた赤子の口を借り

大海原に漂へる

名さへ芽出度き龍宮の

一つ島なるオセアニヤ

黄金の砂を敷き詰めし

地恩の郷に三五の

神の教を開きたる

五十子の姫や梅子姫

鬼熊別の珍の子と

生れ出でたる小糸姫

仁慈無限の天地の

元津御神の御心を

覺りて道に盡したる

古き神代の語り草

松竹梅の大本の

龍宮館を立出でて

流れも清き小雲川

竝木の老松ふくの神

風に誘はれ吹き立てる

法螺貝喇叭にあらねども

夢か現か誠か嘘か

嘘うそぢやあるまいまこと誠まことぢやなかる さても解わからぬ物語ものがたり

心こころ【眞澄ますみ】の【松村まつむら】が 口くちと鉛筆えんぴつ尖とがらして

吾わが口述こうじゆつを書かきとめる 松雲閣しょううんかくの中なかの間にま

【無盡意むじんい菩薩ぼさつ】を始はじめとし 【五み六ろく七しち太夫たいふ】や加藤かとう女史ぢよし

やがては急いそぎ【北村きたむら】の 【隆りゅう】々りゅう【光ひか】る神界しんかいの

御稜威みいづを畏かしこみ村肝むらぎもの 心清こころぎよめて書かきとむる

所謂いはゆる三界物語さんかいものがたり 迂すべり出いでたる蓄音器ちくおんき

取手とりてを握にぎりクルクルと 螺旋仕掛ぜんまひじかけのレコードが

茲ここに廻轉くわいてん始はじめける あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはひましませよ。

地恩城ちおんじやうの役員控室やくあんひかへしつには、スマートボールスマートボール（敏郎司みんろうし）、チヤンキーチヤンキー（英吉えいきち）、モ
ンキーモンキー（米吉まいきち）其他その他二三人にさんにん、赤裸まつばだかの儘まま、芭蕉ばせうの實みを喰くひ乍ながら雑談ざつだんに耽ふけつて居ゐる。

スマートボール「皆の御連中、人間も良い加減なものだなア。俺達も蜈蚣姫様に
朝夕眞心を盡し、随分忠勤を擢でて、危険区域に往來出沒し、種々雑多の艱難辛
苦を嘗めて來た者だが、海洋萬里の龍宮島までお供をして來乍ら、吾々は平役人
の一部に加へられ、清公さまの願使に甘んじて居らねばならぬのだから、暗君に
仕へるのは實に不利益此上なしだ。此頃は蜈蚣姫さまも女王様に會うた嬉しさに、
俺達の殊勳を念頭から遺失してしま、今迄は寢ても起きても「スマート、スマー
ト」とお聲がかかったが、此頃は何處の「スマート」に居るかとも言つて下さら
ぬ。本當に良い加減なものだよ。俺ア……モウ同伴者が有つたら波斯の國へでも
歸りたくなつて來たワイ」
チヤンキー「お前が蜈蚣姫さまに夫丈盡したにも關はず、拔擢されないのは、
みんな身魂の因縁だ。前生からの罪の借金濟しを指して下さるのだから、それで
大變な御恵に預つて居るのだよ。俺だとして肝腎の黃龍姫様を、シロの島から生命
から送つて來て、途中で難船をした殊勳者だから、何とか御言葉が懸りさう
なものだけけれど、ヤツパリ平役人の仲間だ。モンキーだとして其通り、そこが神様

の依怙鼻屑のない處だ……なア、モンキー、貴様もさうだらう」

モンキー「吾々小身者の分際として、チヤンキー　モンキー言つて見た所で、齒節は立たぬよ。マアどうなりと生命さへ助けて貰へば、結構だなア」

スマートボール「それだと云つて、清公の奴、高山彦の後釜に坐り、宰相面をし

て俺達に何事も指揮命令する特権を與へられたのは、チツと合點がゆかぬぢやな

いか。何程身魂の因縁性來かは知らぬが、吾々の見る所では、何一つ是れと云ふ

手柄をした様にもなし、半泥的の友彦宣傳使のお供をして來た平信者の分際とし

て、出世すると云つてもあんまりぢやないか。レコード破りと言はうか、破天荒

と言はうか、譬方の無い黃龍姫のやり口、人も有らうに、清公の様な若輩に、あ

れ丈の重任を御負はし遊ばしたのは、如何考へても合點の蟲が承認して呉れない

よ。それ程賢い人間でもなし、どつちかと云へば、チツと許り落して來た様な代

物ぢやないか」

チヤンキー「さうだからお筆先に……阿呆になりて居りて下されよ。神の道は惻

巧を出すと失敗るぞよ。他人が出世を致したと云うて嫉むでないぞよ。身魂の因

縁丈の御用がさせてあるのだから……とお示しになつてゐるぢやないか」

スマートボール「それに……まだまだ業の沸く事がある……と云ふのは噂にチラツと聞けば、天下無雙のネース宇豆姫さまを女房に貰ひ、夫婦がブランジー（國主）、クロンバー（國妃）の後釜になると云ふ事だが、それが實際とすれば、俺達ア馬鹿らしくして、ジツとして居る事が出来なくなつて了ふ。其時にや貴様達は如何考へるか」

チャンキー「アハ、ハ、ハ、又人の疝氣を頭痛に病んで居よるな。實際の事を言へば、貴様宇豆姫に大變な執着心を懸けて居るのだらう。チツと妬けとると見えて、酢につけ味噌につけ因縁を附けるのだなア。……何時やら月の輝く夜の事、宇豆姫さまが庭園を天女の様なお姿で、スラリスラリと木蔭を逍遙ひ遊ばした時、貴様は差足、拔足後の方から近寄つて、電話姫の様に……モシモシと吐いた處、宇豆姫様にエツパツパを喰はされ……サーチャイス、ユーリンスユーリンスと謝罪つて逃げ出したと云ふ専らの評判だよ。其時のエツパツパの肱鐵を根に持つて居るのだらう」

スマートボールは顔赭らめ、俯むいて黙つて居る。

モンキー「アハ、ハ、ハ、ヤツパリ……さうすると、火の無い所に煙は立たぬ。何時も……女なんか汚らはしい……と云ふ様な面付をして、「スマー」して御座るスマートボールさんも、ヤツパリ氣があるのかなア。戀に上下の隔てないとはよく言つたものだ」

スマートボール「馬鹿を云ふな。それや俺の事ぢやない。鶴公の事だ。……鶴公がなア、性懲りもなく宇豆姫さまのお臀を嗅ぎ廻り、幾回となくエツパツパエツパツパを喰ひ、悲觀の極、失戀病に罹り、柿の木で人知れず首を「ツル」公とやりかけた處、此様子を物蔭より見すまして居たスマートボール……ヘン此方が矢庭に其場に驅出で、プリンプリンの最中をギユツと下から抱きあげ、……如何に鶴さまだとして、首をツルと云ふ事が有るかい、マア待て、死は一旦にして易く、生は難しだ。キツと俺がお前の願望を叶へ指してやるから……と云つて慰め、漸くボールス（自殺）を中止させたのだ。其責任上俺は如何しても清公の縁談に水を注し、鶴公の女房に宇豆姫さまをせなくては、一旦男の口から吐いた唾を呑み

込む譯にはゆかぬ。それ故晝夜肺肝を碎き、何とかして鶴公の戀を叶へさせてや
りたいと、宇豆姫さまの間近く寄つて、機會ある毎に搔き口説いて居るのだ。そ
れを心なき没分曉漢の連中が、俺が姫さんにスートハートして居る様に誤解し
て、下らぬ根無し草の噂の花を咲かして居るのだ。諺にも……人の口に戸は閉て
られない……と云つて、一々俺がそんな辨解に廻る譯にもゆかず、千萬無量の俺
の心中を、チツとは察して【くれ】の鐘だ。鳥はカアカアと啼いて峙を定め、夫
婦睦まじく暮して居るに、鶴公の【やもを】鳥、宇豆姫の事を思つて心を【ウツ】
ウツさせ乍ら……アア夏の夜も蚤はせせり、蚊が喰つて寝られないワイ……と
歎息して居るのを思ひ出すと、俺だとしてそれが袖手傍觀出来るものか。早く鶴公
さまの戀をかなへさせて、夫婦睦まじく卵子を生み、川と云ふ字に寝さしたいのだ
がそれや將來の事として、一時も早く【リ】の字にさしてやりたい俺の一念……
…アア待つ間の長き鶴公の首、千歳の松の末永く、梢に巢籠る尉と姥との、高
砂の謠曲が早く聞きたいので盡力して居るのだよ』
と心配さうに俯むく其様子、冗談とも思はれなかつた。斯かる所へ貫州、武公の

兩人現れ來り、

貫州「ヤア御連中、何か面白いお話でも有りますかなア」

チヤンキー「今チヤンキーモンキーと、スマートボールのローマンスを遺憾なく聞かして頂き指を銜へて居た處なのだ。……貫州さま、お前此頃の清公の横柄振を何と考へて居るか」

貫州「稍仰向き氣味になり『フ、フーン』と云つた限り、力無げに笑ふ。

武公「イヤもう此頃の清公の態度と云つたら、さつぱり、ブランジー氣分になり、クロンバーを得むとして、種々と暗中飛躍を試みて居ると云ふ事だ。併し乍ら到底物にはなるまいよ。アハ、ハ、ハ」

貫州「そんな問題は如何でもよい。國家興亡に關する大問題が今別に突發して居るのだが、お前達分つて居るか」

スマートボール「分つて居らいでかい。鶴公を黃龍姫の夫に推薦すると云ふ大問題だらう。……併し其奴は駄目だから、せめて宇豆姫さまの婿にしてやりたいと思つて、晝夜肝膽を碎いて居るのだ。併し清公の奴、どうやら豫約濟の札を掛け

て居る様だから、此奴もならず、實に世の中は意の如くならないものだ。何か良
い智慧を貸して呉れないかネー」
貫州「そんな事が國家興亡の問題かい。あゝ貴様も知つて居る通り、鼻赤の友彦
の奴、ネルソン山を西へ涉り、ジャンナイ（治安内）教のテールス（照子）姫の
夫となり、大變な勢でオーストラリアの西部一帯を勢力範圍となし、今に軍備を
整へて此地恩城へ鬼の様な荒武者を引率し、やつて來ると云ふ噂があるのだ。お
前達も聞いて居る通り、黃龍姫様は元は友彦の女房だったが、地恩郷の奴等に打
ち「のめ」され、城外に擔ぎ出された其無念を晴らすべく、一擧に當城へ攻め寄
せ、否應言はさず、黃龍姫様に兜を脱がせ改めて友彦の第二夫人になるか如何だ
と、大變な威喝的態度で蹂躪すると云ふ計畫オサオサ怠りなしとのこと。吾々は
斯うしてジツとして居る譯には行かぬ。婦人問題などの氣樂な話に没頭して居る
時ぢやない。何を云つても内輪を固めなくては、外敵に當る事は不可能だ。地恩
城には清公派と鶴公派が互に鎬を削り、内争絶間なく、如何して此城が持てるも
のか。兄弟垣に鬨ぐとも、外其侮りを防ぐと云ふ事があるから。サア皆一致和合

して、今迄の態度をスツカリ改めて貰ひたいものだよ」

スマートボール「それが又神界の御都合だよ。よく考へて見よ、夜中夫婦喧嘩許りして居る家には泥棒も這入らない。互に軋轢して力比べをし、今の今迄演習をして置くのだ。力士だつてさうぢやないか。一生懸命に稽古と云つて挑み闘ひ、其間に天晴れと力が付いて晴れの場所と云ふ段取りになるのだ。友彦が門前まで押寄せ来るを待ちて、協力一致すれば良いのだよ。サアサア モットモット内亂を奨励せなくちや本當の勇士は造れないワ。アハ、ハ、ハ、ハ」と笑ひに紛らす。此處へ蜈蚣姫は稍腰を屈め、ヒヨコヒヨコやつて来て、

「お前はスマートボールに貫州、武公、チャンキー、モンキーの頭株ぢやないか。今……金、銀、鐵等三人の注進に依れば、鼻曲りの意地クネの悪い友彦が、ジャンナイ教の荒くれ男を率ゐ、當城へ攻めて來るとの急報……サア早く防戦の用意をせなくてはなりませんまい」

スマートボール「蜈蚣姫様、無抵抗主義の三五教の本城に防戦とは心得ませぬ。武器と云つては寸鐵もなく、如何したら良いのですか」

蜈蚣姫「サア其防戦は善戦善闘だ。本城へ押寄せ来らぬ間に、ネルソン山の山麓に、威儀を正して友彦の軍隊を待受け、所在款待をするのだ。さうして飽く迄忍耐と親切振を發揮する。これが第一の味方の神法鬼策、六韜三略の奥の手だ。さうだと云つて、決して權謀術數を弄するのではない。誠一つの實彈をこめて、誠を以て戦ふのだよ。分つたか」

スマートボール「ハイ、根つから……よく分りました」

蜈蚣姫「何だか齒切れのせぬ返答ぢやないか」

スマートボール「返答だか、辨當だか、「テントウ」様だか、テンと譯が分りませぬワイ。先方は吾々を殺しに来ると云ふ、此方は御馳走の辨當を拵へて歓迎せよと仰有る。「ベントウ」とか天道とかは、人を殺さぬとか……殺すとか云ふぢや

ありませんか」

蜈蚣姫「オホ、何でも良い。お前ではチツと事が分り兼ねるに依つて、貫州、武公、チャンキー、モンキー等の大將株と相談して、最善の方法を講じて下さい。妾は是れから神殿へ參つて御祈念を致すから、周章せず騒がず、靜に急い

で準備をするがよからうぞや」

スマートボール「徐かに急げとは尚々以て不得要領だ。寝て走れ、目嚙んで死ね、
鞆丸銜へて背伸びせいと云った様な御注文ですなア」

チャンキー「御チウモンも表門もあつたものかい。……モシモシ蜈蚣姫様、
ンとチャンキーが胸に御座いますれば、どうぞ御心配なくお歸り下さいませ」

蜈蚣姫「そんなら是れでお別れする。よきに取計らひなされ」

と握り拳を固め、蝦の様になつた腰を三つ四つ打ち乍ら、

蜈蚣姫「エーエ、人を使へば苦を使ふ」

と呟きつつ奥の間に姿を隠した。

スマートボール「譯も知らずにチャンキー モンキーと雀の親方見たいに、
アチャア吐すな。鶏は跣足だ。モンキー、馬は大きくてもフリマラだよ。ア

ハ、ハ、ハ」

斯かる所へ威風堂々として四邊を拂ひ、二三の従者を伴ひ、現れて来た清公、

「ヨ、スマートボール其他の役員さま、大變な事が出来致しました。蜈蚣姫様

から一應お聞きでせうが、あなた方は其準備を早くして貰はねばなりません」

スマートボール「ハイ先づ内を固めて外に向ふのが順當でせう。外部の敵は、驅逐する事は何でもありませんが、先づ内部の敵から言向け和せ、其上の事に致しませうかい」

清公「コレだけよく治まつた地恩城に内紊のあらう道理がない。それや又如何した譯でそんな事を言ふのですか」

スマートボール「只今地恩城の俄宰相清公のブランジーに對し、擧國一致的強敵

が現はれ居ますぞ」

清公「其敵と云ふのは誰ですか」

スマートボール「其敵は本能寺にあり。汝の敵は汝の心に潛む。先づ清公さまの

ブランジー氣分を撤廢し、自由自在に開放なさらなくては、内部の敵も外部の魔

軍も、如何ともする事が出来ません。先づ第一に私の方から條件を提出致します

すから、御採用になるかならぬか知りませぬが、其上で吾々は決心を定めませう。

……貫州、武公さま、サア是から君が特命全權公使だ。早く談判の口火をお切り

なさい」

貫州「清公のブランジーさまに質問があります。お前さまは謙遜と云ふ事を知つて居ますか。三五教の教理は如何御解釋になつて居りますか。言心行一致の實をお示し下さらなくては、吾々は去就を決する事が出来ませぬ。斯う言へば表だつて議案を提出せなくても、一を聞いたら十を覺る鋭敏な頭腦の持主と、黃龍姫様が御信任遊ばした貴方だから、一伍一什お分りでせう」

清公「さう突然譯の分らぬ事を言はれても返答の仕方がありません。吾々の施政方針にあなた方の御意に召さぬ缺點が有ると云ふのですか」

チャンキー「有る有る、大有りだ。大「あり」大根で胴體ばかり大きくても味もシヤシヤリも…ないじやくりだ。それだから誰も彼も清公さまには、「キヨ」う交際は出けぬと此處に居る御連中が不平して居ましたぞや。チツと重しをかけた、糠味噌の中へ突込んでやらねば、良い味は出なからうと言つて居ました。重りが重い程壓迫が強くて漬物の味がよくなると云ふ事だから、吾々が尾張大根の重り石にならうと相談をして居つた最中だ。…ナア、モンキー、間違あるまい」

モンキー「何だか知らぬが、エライ人気だ。あつちにも、こつちにも、チヤンキー
モンキーと清公さまの不信任問題が喧傳されて居る。先づ是から先へ解決を付
けて貰ひませうかい。解決と云つても、股にキネ糞を挟んで立派な禮服を着し、
座敷の正中に坐り込み、立ちもならず動きもならぬ様な、蛇の生殺しの様な解決
では、此危急存亡の場合、駄目ですよ。流れ川に尻を洗つた様に、綺麗サツパリ
と、川の流れの宇豆姫さまを思ひ切つて、鶴公さまの女房となし、お前さまは鶴
さまに代つて、裏の柿の木でブランジーとぶら下らうと、それや御自由だ。兔も
角鶴公さまが宇豆姫にエツパツパを喰はされ、柿の木でブランコをやりかけた位
だから、友人を思ふ眞心があるならば、自分の愛を犠牲として、信任深き鶴さま
にラバーを譲つてやりなさい。是が先決問題だ。グツグツして居ると、鶴さまの
戀は九寸五分式だから、「センケツ」、「リンリ」問題が突發するかも知れない。
……アアあちら立てれば此方が立たず、両方立てれば宇豆姫さまが立たず、世
の中は思ふ様に行かぬものだ。併し乍ら清公さま、大勇猛心を發揮し、一皮剥い
たら、誰しも髑髏の「みつとも」ない肉體計りだから、宇豆姫さまの事をスツカ

り思ひ切つて、國家の爲にそれ丈の決斷力を、今此場で發揮して貰ひませう』

清公、俯むいて『ムニヤムニヤムニヤ』

スマートボールは、

『危急存亡の此場合、唯一言の御返答もなきは、不承諾と見えます。それならば

其れで宜しい。吾々も共同一致的に不承諾だ。……コレ清公さま、大勢と一人に

は換へられませぬから、どうぞ早く城を明け渡し、陣引きをなされませ。其後は

鶴公さまがブランジートとなつて、地恩城を總轄し、宇豆姫をクロンバーの位置に

据ゑ、神業に参加すれば、萬代不易の基礎が建つ。サア御返答を承はりませう』

清公『宇豆姫さまは承諾せられますかなア』

と確信あるものの如く冷笑を向ける。

スマートボール『皆さま、暫く此處に待つて居て下さい。これより宇豆姫さまの

居間に参り、直接談判をやつて來ますから』

チャンキー『そんなにグツグツして居つたら、友彦が軍勢を引連れやつて來ます

ぞ。蜈蚣姫様の仰せの如く此方より無抵抗主義の先鞭を付け、友彦の進軍をネル

ソノ山麓に待受け、互に諒解を得なくてはなりません。宇豆姫さまより、清公さまの返答さへ聞けば解決の付く話だ。左様な廻りくどい事をして居る場合ではありません。……サア清公さま、あなたも立派な堂々たる七尺の男子だ。直に御返事を承はりませう。色男気分になつて、獨斷的に、私はブランジーだから、きつとクロンバーになるのは宇豆姫に定まつたりと、自惚心を起して威張つて居つても、先方の精神はまだ明瞭と分つては居りますまい。萬一最後の一段になつて、宇豆姫さまにエツパツパを喰はされ、アフォンとして男を下げるよりも、今この間に綺麗サツパリと斷念なさつた方が、何程立派だか知れますまい。是れチヤンキーが心よりの貴方に對する眞實なる忠告ですから、空吹く風と聞き流してはなりません。男は斷の一字が最も必要だ。サーチライス、ユーリンス、ユーリンスと頭を抱へて恥を掻き、蚤の様に頭ばかり突込んで尻を盛立て、恥を掻くよりも、今の間に思ひ切つたが、貴方に取つて最も賢明な行方だ。さうすれば永遠無窮に地恩城の右守司となりて、尊敬の的となり、神業に参加することが出来ませう。何程【井モリ】の神ぢやと云つても、黒焼になる所まで妬いちゃ可ませぬ

よ
』

と擲^{ちやく}揄^{ちやく}ひ半^{はん}分に忠^{ちゆう}告^{こく}する。ここへ何^{なに}氣^げなうやつて來^きた右^う守^{もり}司^{のかみ}鶴^{つる}公^{こう}、

『ヤア皆^{みな}さま、大^{たい}變^{へん}な事^{こと}が起^おこつた様^{やう}ですなア。……モシ左^さ守^{もり}司^{のかみ}の清^{きよ}公^{こう}殿^{どの}、如何^{どう}

なさいますか。御^ご所^{しよ}存^{ぞん}を承^{うけたま}はりたいたい』

スマートボール初^{はじ}め一^{いち}同^{どう}は拍^{はく}手^{しゆ}し乍^{なが}ら、

一^{いち}同^{どう} 鶴^{つる}公^{こう}さま、萬^{ばん}歳^{ざい}、ウロー ウロー』

と叫^{さけ}ぶ。

鶴^{つる}公^{こう} 『兔^とも角^{かく}、友^{とも}彦^{ひこ}の寄^よせ手^てに向^{むか}ひ、最^{さい}善^{ぜん}の方^{ほう}法^{はふ}を講^{かう}ぜねばなりませう、清^{きよ}

公^{こう}殿^{どの}、如何^いかが御^ご所^{しよ}存^{ぞん}で御^ご座^ざいますか』

清^{きよ}公^{こう} 『先^まづ右^う守^{もり}司^{のかみ}の御^ご意^い見^{けん}を承^{うけたま}はりませう』

鶴^{つる}公^{こう} 『吾^{われ}々は左^さ守^{もり}司^{のかみ}の次^{つぎ}の位^ゐ置^ちに位^{くらゐ}する者^{もの}、何^{なに}事^{こと}も貴^{あなた}方^たの指^し揮^き命^{めい}令^{れい}に從^{したが}ふのが本^{ほん}

意^いで御^ご座^ざいますから、どうぞ御^ご腹^{ふく}藏^{ざう}なく仰^{あふ}せ付^つけ下^{くだ}さいませ』

貫^{くわん}州^{しゆう} 『左^さ守^{もり}司^{のかみ}は最^{さい}前^{ぜん}より吾^{われ}々^{われ}一^{いち}同^{どう}種^{しゆ}々^{しゆ}と申^ま上^あげましたが、何^{なん}の返^{へん}答^{たふ}もなされませ

ぬ。察^{さつ}する所^{ところ}、自^{みづか}ら總^{そう}統^{とう}權^{けん}を棄^き却^{やく}された事^{こと}と察^{さつ}します。さうでなければ精^{せい}神^{しん}錯^{さく}

亂か、或は本城の危急存亡を對岸の火災視し、利己主義を立て通す體主靈從の御方と斷定するより道はありませぬ。宇豆姫様さへ手に入らば、地恩城も三五教も、清公さまの眼中には無いと云ふ事を赤裸々に表白されて居ります。吾々は如何しても斯様な御人格の方の風下に立つて活動する事は到底出来ませぬ。さうだと云つて三五教の神の教は大切なり、其教の全權をお握り遊ばす黄龍姫様を御見棄て申す譯には参りませぬ。徹頭徹尾辭職などは出来ませぬから、先づ第一に吾々の代表的犠牲となつて、左守司様から處決して頂きませう」

清公は一同に向ひ、

「これより奥殿に入りて、黄龍姫様の御意見を伺ひ、其上に處決する事に致しませう。何は免もあれ、出陣の用意がせられよ」

と言ひ棄て、此場を逃ぐるが如く姿を隠した。

「チヤンキー」猫に追はれた鼠の如く、左守司も到頭尾を捲いて奥の間へスゴスゴと隠れて了つた。何時まで待つて居たつて、出て来る氣遣ひはあるまい。吾々は鶴公様に身も魂も捧げて、如何なる指揮命令にも服従する考へであります。皆さ

まの御精神は如何で御座いますか」

と一同の顔を看守つた。スマートボールを初め竝居る面々口を揃へて、

一同「大賛成大賛成」

と叫ぶ。

鶴公「皆さまはそこまで不束な私に對し、同情を寄せて下され、實に感謝に堪へませぬ。が、併し乍ら清公さまは私の上役、左守司を差し置いて如何する事も出来ませぬ。左様な僭越の行動は神の赦し玉はざる處、先づ第一に清公様のお身の上の解決が付いた上、皆さまの思召に應じ、御用を承はりませう」

スマートボール「モシモシ右守司さま、貴方は吾々の上に立つ御方、下の者に對し御用を承はらうとは、チツと矛盾ぢやありませんか」

鶴公「イエイエ、上に立つ者は決して下を使ふ役ではありません。あなた方が吾々をお使ひなさらねばならぬのです。吾々の命令を聞いて活動をする様な事では、木偶も同然だ。何時までかかっても神業は發達致しませぬ。先練り吾々の仕事を拵へて、斯うして呉れ、ああして呉れと御注文下さらねばならぬのです。今の世

の中の人は上に立てば下の者を弟子か奴隷の様に使ふべきものだ。と誤解して居る。上に立つ者は要するに下から使はれるのだ。廣大無邊の國祖大神でさへも、吾々の願事を聞いて下さるではありませぬか。所謂吾々は……斯く申せば少しく語弊が有りますけれども……神様は要するに御使ひ申して居る様なものだ。何卒御見捨てなく御用を仰せ付け下さいませ」

と道理を分けて説き諭す。スマートフォンは默然として、時々頭を上下に振り「ウンウン」と頷いて居たが、忽ち鶴公の前に両手をつき、

「イヤ何事も諒解致しました。然らば是れから貴方を充分に酷使致しますから、其お積りで御願申しませう」

鶴公「何分宜しく御注意下さいまして、末永くお使いの程をお願い申します」

一同感歎の聲を洩らして居る。此處へ金、銀、鐵の三人現はれ來り、

金州「ヤア貴方は鶴公様、只今戶外にて承はればハツキリ譯は分りませぬが、危急存亡の今日の場合、清公様に對しストライキをなさると云ふ御相談らしい。宜しい、これから奥殿に參り、此由黃龍姫の御前に奏上致しますから、其お積りで

御決心をなさるがよからう」

と捨臺詞を残し、三人は足早に奥を目蒐けて進み入る。

(大正一一・七・七 舊閏五・一三 松村眞澄録)

第二章 與太理縮(七四八)

地恩城の奥殿には黄龍姫と蜈蚣姫の二人、侍女を遠ざけ、頭を垂れ物憂し氣に、何事か首を鳩めてヒソビソ話に耽つて居る。

蜈蚣姫「黄龍姫様、大變な事が出来ました。あの意地【くね】の悪い鼻曲りの友彦が、ネルソン山を西に涉り、獯猛なる土人をチヨ口魔化し、テールス姫と言ふ妖女を抱き込み、表面三五教を標榜し、衆を集めて此地恩郷に攻め寄せ來り、お前さまを否應なしに又元の女房にしようとの企み、今に本城へ攻め寄せ來るとの、金、銀、鐵の注進、萬一左様な事が實現して、友彦此場に攻め來る事あらば、お

前さまは如何なさる考へですか、御意中を承はりたい。』
黄龍姫 母様、左様な御心配に及びませぬ。柔よく剛を制すと言つて、如何なる頑強不靈の友彦なりとて、妾が三寸の舌剣を以て腸まで抉り出し、見事改心させて見せませう。友彦如きは物の數でもありません。あの様な者が恐ろしくて、此野蠻未開の一つ島が如何して拓けませう。取越苦勞はなさいますな、ホ、ホ、ホ、とオチヨボ口に袖を當て、手もなく笑ふ。蜈蚣姫は眞面目な心配相な顔付にて、何程伶俐だと言つても未だお前は年が若いから、さう樂觀をして居られますが、戀の意地と言ふものは又格別なもので、なかなか油断はなりません。寝ても醒ても小糸姫に馬鹿にいられたと怨んで居る友彦の事だから、一時は時ならずとして尾を捲き目を塞ぎ爪を隠して、猫の様になつて居たものの、今やジャンナの郷に於て、飛つ鳥も落す様な勢になつたのを幸ひ、日頃の鬱憤を晴すは今此時と戦備を整へ捲土重來する以上は到底なかなか一筋や二筋では納まりません。年寄の冷水、老婆心の繰言とお笑ひなさるか知りませぬが、年寄は家の寶、経験がつんで居るからチツとは母の言ふ事もお聞きなされ。後の後悔は閒にあひませぬ。』

黄龍姫わつりようひめ「あの、マア母様ははさまにも似合にあはぬ御心配ごしんぱいさう相あな顔付かほつき、母上あなたも顯恩郷けんおんきやうでは隨分ずぶん剛膽がうたんな事ことをなさいましたではありませぬか。そのみならず、自轉倒島おのころじまの鬼ヶ城おにがじやう山さんに敗やぶれ三國ヶ嶽みくにがだけに砦とりでを構かまへ、次ついでで魔谷ヶ嶽まやがだけ、國城山くにしろやまと大活動だいくわつどうをなされた時は、夜叉やしやの様なお勢いきほひで御座ござつたぢやありませんか。それに今日こんにち、母上あなたの口くちからそんな弱よわい音色ねいろがで出るとは思おもひも掛かけませぬ。此黄龍姫このわつりようひめ、假令たとへも百の友彦ともひこ、萬の友彦ともひこ來るとも、三五教あななひけうの神様かみさまの神力しんりき、吾言靈わがことたまの威力ありよくに據よつて言向ことむけ和やはし、前非ぜんびを悔くいしめ、至善至美しぜんしびの身魂みたまに研みがき上げて助たすけてやる妾わたしの所存しよぞん、決けつして決けつして御心配遊ごしんぱいあそばしますな」

と脇息けふそくに肱ひぢを乗のせ忍冬にんどうの茶ちやを一口グツと飲のんで、

「母様ははさま、何卒どうぞお寢やすみ遊あそばしませ。最早夜も更ふけかけました。いづれネルソン山ざんへは數百里すうひやくりの道程みちのり、友彦ともひこが攻せめて來ると言いつても、まだ十日とをかや半月はんつきは大丈夫だいぢやうぶです。

あまり周章あわてるには及およびませぬ」

蜈蚣姫むかでひめ「油斷大敵ゆだんたいてき、一時いちじも猶豫いうよはなりませぬ。妾わたしは先程さきほど一同いちどうの者ものに、防戰ぼうせんと出陣しゅつぢんの用意よういを命めいじて置おきました。やがて出陣しゅつぢんするでせう」

黄龍姫 「それは誰の吩咐で出陣をお命じになりましたか」

蜈蚣姫 「ハイ、妾の計らひで……」

黄龍姫 「それは又、不都合千萬、私人としては貴女は妾の母、されど神様のお道から言へば妾が教主も同然、妾の命令をも聞かずに、公私混淆、自他本末を混乱して左様な命令を出されては困るぢやありませんか。何卒早く取消しをして下さ

い」

蜈蚣姫 「何程お前様が教主だと言つて威張つた處で、矢張り親は親だ。親の言ふ

事を聞かぬ様では鬼も同様です。それでは神様のお道を守る人とは申されま

い。此蜈蚣姫も猪食た犬丈あつて、何んな經驗も持つて居る。今こそ可愛い娘の

光を出したいばかりに、目を塞ぎ爪を隠し、灰猫婆アになつて居るものの、まさ

かと言ふ時になれば忽ち虎猫になりますよ。虎も目を塞ぎ爪を隠して柔和しく見

せて居れば、何時までも厄介者だと蔑み、年寄つたの、耄碌したのと思つて居よ

うが、いつかないつかない此蜈蚣姫、國家興亡の此際、何時迄も爪を隠す譯にはゆ

かない。虎猫の本性を現はし、之から大活動を演ずる覺悟ですよ。平和の時はお

前さまを大將にして置いてもかなり勤まるが、斯んな非常の場合は生温い事で如何なりませう。アタ小面憎い友彦の首を引き抜いて、思ひ知らしてやらねばなりませぬ。エー、煩い事だ。又年寄に一苦勞さすのかいな」

黄龍姫「母様、貴方はそれだから困ります。三五教の御教をお忘れになりましたか」

蜈蚣姫「エー、融通の利かぬ娘だな。三五教の教は天下太平の御代には實に重寶な教だが、危機一髪の際、あの様な柔弱な無抵抗主義の教理は、マドロしうて聞いてゐられますものか。神様が無抵抗主義を採れと仰有るのは……爲な、せい……と言ふ謎ぢや。お前さまは何と言つても未だ年が若いから正直に聞くので困る。口の端に乳が附いて居る様な事言つて……如何して此地恩城が維持出来ますか」

と最後の言葉に力を入れて、疊を握り拳でポンと叩いて見せた。

黄龍姫「ア、情ない母様の御精神、如何したら本當の改心をして下さるであらう。……何卒神様、一時も早く眞の道が、私の一人よりない大切な母に解ります様に、

何卒心の鏡に光明を與へ、心の暗黒を照らして下さいませ。あゝ惟神靈幸倍坐世
と合掌し涙含む。

蜈蚣姫「何程人間が改心したと言つても、元から惡の素質を持つて居る吾々の身
魂、譬へて言へば、大きな鉢の中へ泥水を盛り、それが時節の力で泥は鉢の底に
沈り、表面は清水に澄み渡つて居つても、何か一つ揺ぶるものがあると、折角底
に沈つて居た泥が又もや浮き上り、元の泥水となるのは自然の道理だ。之が惟神
のお道です。體を以て體に對し、靈を以て靈に對し、力を以て力に對するは天地
の道理ぢやありませんか。アインスタインの相對性原理の説明だつて、さうぢや
ないか。お前さまの様な其んな時代遅れの事を言つて居ると、蟹の手足をもぎ取
り、鳥の翼を剥ぎ取つた様な目に遭はされますぞ。三千世界に子を思はぬ親があ
りませうか。お前が可愛いばかりに、妾はお氣に召さぬ事を言ふのだが、親の
意見と茄子の花は、千に一つも仇花はありませんぞ。良薬口に苦し、甘いものは
蛔蟲の源、何卒母が一生のお願ひだから、出陣を見合す事は思ひ止まつて下さい。
妾も之から清公の左守神を引率れ、年寄の花を咲かし、冥途の土産に一戦やつて

見よう程に、必ず必ず柔弱な精神を發揮して、折角張り詰めた母の勇猛心を挫いて下さるな。親が子に手を合して頼みます。海往かば水漬く屍、山往かば草生す屍、大神の邊にこそ死なめ、閑には死なじ顧はせじと、彌進みに進み、彌逼りに逼り、友彦が軍勢を山の尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に薙散らして服へ和し、一泡吹かして懲らしめ呉れむは案の中、必ず邪魔召さるな」と血相を變へて長押の薙刀を取るより早く、

「黄龍姫、さらば……」

と此場を立ち出でむとする。

黄龍姫「地恩城の女王、三五教の神司、今改めて蜈蚣姫に對し、三五教を除名する。有難くお受け召され」

蜈蚣姫は二足三足引返し、黄龍姫をハツタと睨み、

「久離絶つても、親子ぢやないか。親子の情は何處迄も變るものぢやない。假令蜈蚣姫、天地の神の怒りに觸れ、水火の責めに會うとて、吾子の爲めには厭ひはせぬ。三五教を除名された上は、最早其方に制縛は受けぬ、自由自在の活動を

致すは之からだ。愈清公以下の勇士を引率れ、華々しき功名手柄を現はし呉れむ。
小絲姫、さらばで御座る」

と又立ち出でむとするを、黄龍姫は言葉嚴かに、

「最早三五教を除名せし蜈蚣姫、左守神たる清公を初め、其他一同を指揮する権利はあるまい。御勝手に只一人お出で遊ばせ。飛んで火に入る夏の蟲、子の愛に溺れて眞の神の愛を忘れ給ひし不届者、天に代つて懲戒致す。……ヤアヤア金州は在らざるか、早く來つて蜈蚣姫を縛せよ」
と呼はつた。

折から金、銀、鐵の三人、スタスタと此場に現はれ來り、親子が此體を見て不審の眉を顰め乍ら、

金州「コレハコレハ、お二人様の御様子、何か深い仔細が御座いますうが、先づ先づお静まり下さいませ」

黄龍姫「仔細は申すに及ばず、地恩郷の女王黄龍姫が命令だ。蜈蚣姫を縛り上げよ」

金州「コレハコレハ、案に相違の女王様のお言葉、一向合點が參り申さぬ。如何なる事情の在しますとも、子の分際として、天にも地にも掛替へなき、山海の恩ある御母上を縛せよとは何たる不孝のお言葉、女王様は狂氣召されたかと涙を拭ふ。」

蜈蚣姫「コレハコレハ金州、お前の言ふ通りだ。父と母とは天地に譬へてある。父の恩は天より高く、母の恩は地より重しと聞く。地の恩に因みたる此地恩郷の女王となり乍ら、母の恩、所謂地恩を忘れた小絲姫、サア、もう此上は親の權利を以て小絲姫を放逐する。汝……金、銀、鐵の三人、此蜈蚣姫が命令を聞き、彦の軍勢に向つて應戦の用意を致せ。さはさり乍ら身に寸鐵を帯びよと言ふのではない。善言美辭の言靈と親切の行爲を以て、敵を悦服致さすのだ。必ず必ず誤解を致すでないぞ」

金州「理義明白なる貴女のお言葉、金州確に承知仕りました。併し乍ら今貴女がお手に持たせ給ふ薙刀は、何の爲めにお持ちで御座いますか」

蜈蚣姫「之は敵を薙ぎ拂ふ武器では無い。味方の軍勢を勵ます爲めの武器だ。愚

圖々々致して居ると、此蜈蚣姫がお前達を片端から薙ぎ拂ふも知れぬぞ。サア汝等は蜈蚣姫に續けつ。小絲姫に用は無いら。と又もや此場を慌しく立ち出でむとする。

黄龍姫「地恩郷の女王黄龍姫、蜈蚣姫を除名したる以上は、金、銀、鐵の三人の者共、彼が命を奉ずるには及ばぬぞ。心を鎮めて妾が言葉を篤と聞けよ」

此言葉に三人は平伏し、

銀州「之は又異なる事を承はるものかな。何の咎あつて蜈蚣姫様に對し除名の處分をなされましたか。一應理由を承はり度う御座います」

鐵州「此頃の暑熱の爲に精神を逆上させ、非理非道なる惡言暴語をお吐き遊ばす黄龍姫様のお言葉、天地の道理に反したる貴女の御命令には、吾々は絶対に服従

する事は出来ませぬ」

黄龍姫「今更めて銀、鐵の兩人を除名する」

銀、鐵「コレハコレハ心得ぬ貴女の御言葉、何の咎あつて除名遊ばすのか。無道の除名處分には決して服従仕らぬ。また假令除名されても蜈蚣姫様を奉じ、此の

地恩城を守護致す考へで御座れば、少しも痛痒は感じませぬ。何卒々々、今一度

お考へ直しを願ひ度う存じまする」

金州「女王様に申上げます。御立腹は御尤もなれども、何を言つても、絶つても

絶れぬ御親子の間柄、斯様な事が城外に洩れましては、第一、大神様のお道の汚

れ、餘り褒めた話では御座いませぬ。何卒親子仲よく遊ばして下さいませ」

黄龍姫「今改めて母上様に申上げます。萬々一敵軍襲來致す様な事あらば、此黄

龍姫が陣頭に立ち、華々しく神界の爲めに活動してお目に懸けませう。今迄の無

禮の言葉お赦し下さいませ。除名の事は今改めて取消しませう。又……銀、鐵の

兩人に對する除名の言靈も只今宣り直しませう」

蜈蚣姫「ア、流石は妾が血を分けた娘だけあつて偉いものだなア。さうなれば、

さうと……何故早く言つて下さらぬのだ。年寄に要らぬ氣を揉まして、親に餘り

孝行……な仕打ちやなからうに」

と笑ひ泣きに泣く。

黄龍姫「最初より此精神で妾は申上げて居ましたけれども、母様は餘り血氣に逸

り、其儘城外へ御出になれば、それこそ吾々親子を初め、地恩城一同の大恥辱に
なると思ひ、無禮な事を申し上げました。何卒お赦し下さいませ」

蜈蚣姫「心安い親子の仲、さう更まつて御挨拶には及びますまい」

と機嫌を直し薙刀を長押しに掛け、忍冬茶をグツと飲んで脇息に凭れる。

斯かる處へ足音高く入り来る鶴公は、恭しく両手をつき、

「黄龍姫様に申し上げます。只今承はりますれば、蜈蚣姫様より出陣の用意を致せ

……とのお言葉、敵無きに出陣とは心得申さぬ。之には何か深い御經綸の在する

事ならむ。一應其真相を、私に差支へ無くばお洩らし下さいませ」

蜈蚣姫は黄龍姫の言葉も待たず、二足三足膝を摺り寄せ、

蜈蚣姫「お前はそれだから間拔者と言ふのだ。友彦が獐猛なる蕃人隊を引き率れ、

本城へ復讐の爲め攻め寄せ來ると言ふ事が分らぬのか」

鶴公「はて、心得ぬ貴女のお言葉、天が下に善に敵する仇はありますまい。何を

苦んで防戦の用意とか、出陣とかを御命令になつたのですか。さうして又友彦が

果して攻め寄せ來ると言ふ、的確なる調査がついて居りますか」

蜈蚣姫「現在此處に居る金、銀、鐵の三人が、注進に來て居るのだよ」

鶴公「はて心得ぬ。金、銀、鐵の三人は一月許り此門内を出た事は御座らぬ。

如何して其んな急報が耳に入つたのだらう。……コレコレ金、銀、鐵の三人共、

其方は何人に左様な事を聞いたのか」

金州「ハイ……あの……それ……今の……何で御座います。エー、さうして……

先方が……何ですから此方も何々して置かねば……何々の間に何だと……思ひま

して一寸申上げました。これと言ふも全く清公様……オットドツコイ……【きよ

や昨日の事では御座いませぬ。誠に恐惶（清公）頓首の次第で御座います」

鶴公「其方の申す事は少しも分らない。も少し、はつきりと申さないか」

金州「オイ、銀州、貴様チツと應援して呉れ。俺ばつかりに言はずとは餘りぢや

ないか、貴様が發頭人だよ。アア發頭人に此答辨を譲つて、私は【ホーツ】と

息をつき乍ら金公……オットドツコイ……【キン】聽する事にしようかい」

銀州「ハイ、黃龍姫様、其他の方々の御前を憚り乍ら、謹み敬ひ言上仕りまする。

抑々地恩城は四面山に圍まれ、メソポタミヤの顯恩郷にも勝る樂園地で御座いま

すれば、黄龍姫様の御威勢も日に日に旭日昇天の勢、それに日頃慕はせ給ふ母様に無事に會はせ給うて、其御顔色恐悦至極、左守の清公様、右守の鶴公様の誠心籠めての日夜のお活動、其爲め地恩郷は益々隆盛に向ひ、斯んな喜ばしい事は又と世界にありませうか。然るに味良き果物には害蟲多く、美しき花には風雨の害甚しとやら、治に居て亂を忘れず、亂に居て治を忘れず、治亂興敗は天下の常と存じますれば、吾々は先見の明なくとも斯くの如きは能く御合點の某、御忠告までに申上げ奉りまする」

鶴公「益々不分明なる汝の言葉、左様な問題を尋ねたものでは無い。友彦一件は何人より聞いたのかと尋ねて居るのだ」

銀州「オイ、鐵、何とか「テツボ」をあはして呉れぬと、俺はスンデの事で「テツ」棒を喰はされる處だ。初から約束の通り、第一線危き時は第二線が防ぎ戦ひ、第二線敗る時は第三線が力戦苦闘するは、締盟當時の吾等の決心、サア手坪をあはして巧く辨解をするのだよ。此言靈戦に敗をとれば吾々は、もう駄目だよ」と耳の側に囁く。

鐵州「ハイ、……何で御座いますか。最前から金、銀の答辨を聞いて居れば徹頭
徹尾、此鐵も意味貫徹しませぬ。鐵瓶の口から湯氣を立てて居る様な二人の陳辨
の有様、側の見る目も氣の毒なりける次第なりです。斯かる事は夢の中の状態で、
五里霧中に葬り去るが安穩で御座いませう。夢は袋に、刀は鞘に、祕密は腹に包
んで置くが最も伶俐なやり方、吾々は此以上申上げる事は徹頭徹尾ありませぬ。
此問題は只今限り撤廢を願ひませう」

鶴公「三人が三人共、實に曖昧模糊として不徹底極まる答辨、……コリヤ金州、
左様な瓢鯰式の言葉を用ゐず、友彦が襲來に關し、何人より聞きしか明かに申上
げよ」

金州「ハイ是非に及ばず申上げます、實は……その……何で御座います。實に
清公さまの……エー……兔も角、マア……一つの計略ですな」

鶴公「コリヤコリヤ金州、畏くも女王様、蜈蚣姫様の御前なるぞ。眞面目に謹ん
で答辨致さぬか」

金州「ハイ、おい第二線だ……吟味が斯う嚴しうては逃げ道がない。貴様の雄辨

を以て其處はそれ……何々してやつて呉れぬかい』
と耳に口を寄せ囁く。銀州は迷惑相な顔をし乍ら頭を掻き、一寸鶴公の顔を見上げ、

「エー、何分……金州の申した通り、私が發起人で御座います。然し乍ら神の奥には奥があると同様に、發起人の奥にも奥が御座いまして……如何もハツキリと申上げ憎う御座います。奥を申上げるのは何だか臆劫な様で、奥齒に物が挟まつた様な感が致します。怯めず臆せず、記憶に存する事は臆面も無く申上ぐるが順當では御座いまするが、矢張り、エー何で御座いまする。本當の事は清公さまと宇豆姫さまの關係から起つた問題ですから、何卒神直日大直日に見直し聞直し、宣り直して下さいませ。人の非を人の前に曝す事は、神様のお戒めに背くと申すもの、之ばかりはお道の精神を守つて沈黙を致しませう』
鶴公「汝等三人は何事か申し合せ、吾々を嘲弄致すのだなア」
銀州「滅相もない。嘲弄と言へば左守司様は「長老」臭い。貴方が地恩城の「長老」に成られるが最後、吾々はお拂ひ箱になるのは定つた事、「長老」の斧を以

て龍車りゅうしゃに向ふむか如くごと一ひとたまりも御座ございますまい。それだから實じつの處ところは、友彦ともひこ襲來しゅうらいの兆てうこう候こうありと假想敵かさうてきを作りつくスマートボール其他そなたのヤンチヤ連中れんちゆうは城内じやうないより追放おつぽり出し、後あとに清公きよこうさまを純然じゆんぜんたる唯一ゆゑいつの長老ちやうらう、即ち宰相さいしやうたるの實權じつけんを握にぎらせ、言いふと濟すまぬが、エー右守神うもりのかみの何々なになにさまを排斥はいせきしようと言いふ吾々われわれの計略けいりやくで……はありませぬ。畢竟夢つまりゆめの浮世うきよの夢ゆめを見たみばかりの事こと、吾々われわれが悪あくを企たくんだのだとは夢々ゆめゆめ疑うたがうて下くださいますな」

鶴公つるこう「イヤ、もう何も聞きく必要ひつえうは無ない、人ひとの非ひを穿鑿せんさくする吾々われわれは考かんがへも無ないから、直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし宣のり直なほして置おきませう。……モーシ、黄龍姫わうりゆうひめ様、蜈蚣むかで姫ひめ様、實じつに水禽すゐきんの羽撃はばたきに恐おそれたる平家へいけの軍勢ぐんぜいの如ごとき馬鹿ばからしき此この騒さわぎ、いやもう油斷ゆだんのならぬ世よの中なかで御座ございますワイ」

蜈蚣むかで姫ひめ「金きん、銀ぎん、鐵てつの言いふ事ことを綜合そうがふすれば、どうやら左守神さもりのかみの清公きよこうが張本人ちやうほんにんと見みえる。……清公きよこうを之これへ呼よんで來きなさい。金州きんしゆう、サア早はやく」

金州きんしゆう「ハイ、お言葉ことばで御座ございまするが、叔母をばの死しんだも直休ちきやすみ、漸ちゆうく内亂ないらん鎮定ちんていの曙光しよくわうを認みめた處ところですから、少すこし休養きうやうを願ねがつてお使つかひを致いたませう」

鐵州「實際の事を申しますれば、清公さまは御存じの通り、實に立派なお方で御座います。ブランジーとして實に申分なきお方、然し乍らクロンバーが無ければ陰陽合致致さず、それが爲に宇豆姫さまをクロンバーの位置に据ゑ度いと、吾々仲間の者は内々運動を開始して居ました。處が肝腎の宇豆姫さまは察する處、鶴公さまに秋波を送り、ブランジーの清公さまに、エツパツパを喰はさむとする形勢ほの見えたれば、何とか事を構へ、右守神鶴公さまを先頭に、スマートボール、貫州、武公、チャンキー、モンキー、其他の連中を城外に放り出し、城門を固く鎖し、時を移さず無理往生にしても宇豆姫さまをクロンバーの役に就かせ、夫婦合衾の式を擧げさせ度いと鳩首凝議の結果、一寸狂言を致したに過ぎませぬ。此暑いのに何百里もあるネルソン山の彼方迄、誰が偵察に參る者がありませうぞ。全く以て眞赤な嘘言で御座いました。身の過ちは宣り直せと言ふ神様の御教を奉體遊ばす黃龍姫さま、人をお赦し遊ばす慈愛の權化、滅多にお叱り遊ばす様な、天則違反的な行爲には出られませんまいから、安心して實状を申上げました」
と流石鐵面皮の鐵州も、稍羞恥の念に驅られてか、俯向いて眞赤な顔をして居る。

蜈蚣姫「エーエー、しようもない悪企みをして此妾まで心配させ、親子喧嘩までオツ始めさせた太い奴だ。……ナア鶴公さま、油断も隙もあつたものぢや御座いませぬなア」

鶴公「お言葉の通り實に寒心致しました。然し乍ら之全く神様の吾々に對するお氣付けでせう。之に鑑み今後は、人の言ふ事を軽々しく【まる】聞きしてはなりませんまい」

蜈蚣姫「斯く事實の判明した上は何をか言はむ。今日は之にて忘れて遣はす。サア妾と共に神殿に於て、感謝祈願の祝詞を奏上致しませう」
と先に立ち、一同と共に神殿に足音静に進み入る。

(大正一一・七・七 舊閏五・一三 北村隆光録)

(昭和一〇・六・四 王仁校正)

第三章 鴉の戀〔七四九〕

宇豆姫 神素盞鳴大神の

御言畏み顯恩の

郷に現れます梅子姫

二八の春の花盛り

木の花姫の一時に

匂ひそめたる唇を

開いて宣らす三五の

神の大道に心より

麻柱ひ奉りバラモンの

神の教を振り捨てて

梅子の姫の侍女となり

貴の教の宇豆姫と

慈しまれて仕へ居る

時しもあれや太玉の

神の司の宣傳使

顯恩郷に現れまして

鬼雲彦を初めとし

鬼熊別や其外の

拗け曲れる枉人を

雲の彼方に逐ひ拂ひ

ここに太玉神司

顯恩郷に三五の

教の射場を建て給ひ

妾は各々八乙女の

神の司に従ひて

エデンの園に臨まれし

五十子の姫や梅子姫

今子の姫と諸共に

波斯の國原彼方此方と 教を傳ふ折柄に

バラモン教の宣傳使 片彦釘彦其外の

枉の司に捕へられ 棚無小舟に乗せられて

荒波猛る海原に 押流されし恐ろしさ

吾等四人は皇神の 救ひを求めて各自に

天津祝詞を宣りつれば 萬里の波濤も恙なく

音に名高き龍宮の 黄金の島に上陸し

小絲の姫と諸共に 地恩の郷に現はれて

三五教の大道に 仕へまつれる折もあれ

思ひがけなき蜈蚣姫 數多の供人引きつれて

此處に現はれましましぬ 地恩の城は日に月に

神の恵の加はりて 一度に開く兄の花の

匂ふが如く榮え行く ア、さり乍らさり乍ら

往く手に塞る戀の闇 千歳の松の鶴さまが

月照る夜半に庭の面
彷徨ひ遊ぶわが姿

認めて後より抱きつき
心の丈を繰返し

誘ひ給ふ嬉しさに
胸轟きて何となく

河瀬の鯉の一跳到
昇り詰めたる吾が戀路

水泡と消えて跡もなく
云ひ寄る術も泣くばかり

後に至りて吾心
天を仰いで悔めども

心の中の曲者に
取り挫がれて胸の火の

消ゆる術なき苦しさを
妾が心を白雪の

冷たき魔の手に捉へられ
退引ならぬ言の葉に

解くる由なき冬の雪
心の色も清公が

左守神を笠に着て
云ひ寄り給ふ苦しさを

情なく當りし戀人に
詫びる事さへ口籠り

心の悩みを大空の
月に向つて歎つ折

又もや一つの影見えて
吾手を掴み木下暗

四邊^{あたりに}憚^{はば}り聲^{こゑ}ひそめ

吾^{われ}は清公^{きよこう}ブランジ

左守^{さもり}神^{のかみ}と選^{えら}ばれし

榮^{さかえ}の身^みなれど何時^{いつまで}迄^{まで}も

一^{ひと}つ柱^{はしら}に三五^{あななひ}の

道^{みち}を支^{ささ}へむ事^{こと}難^{かた}し

汝^{なんぢ}宇豆^{うづひめ}姫^{ひめ}クロンバ

神^{かみ}の司^{つかさ}と成^なりなりて

吾^{わが}身^みと共^{とも}に地^ち恩^{おん}城^{じやう}

三五^{あななひ}教^{けう}の神^{しん}徳^{とく}を

天^{あめ}地^{つち}四^よ方に輝^{かがや}かし

開^{ひら}かば如何^{いか}にと執^{しつ}拗^{えう}に

度^{たび}重^{かさ}なりし口^{くち}説^{とぎ}ごと

斷^{ことわ}る力^{ちから}もないじやくり

神^{かみ}に任^{まか}せし身^みの上^{うへ}は

如何^{いか}なる事^{こと}の來^{きた}るとも

覺^{かく}悟^ごの前^{まへ}とは云^いひながら

心^{こころ}に添^そはぬ夫^{つま}を持^もち

長^{なが}き月^{つき}日^ひを送^{おく}るより

一^{いつ}層^{そう}氣^き樂^{らく}に獨^{ひとり}身^{もの}者^{もの}

【やもめ】となりて大神^{おほかみ}の

教^{をしへ}に仕^{つか}へまつらむと

決^{けつ}心^{しん}するはしたもの

清公^{きよこう}さまの矢^やの使^{つか}ひ

引^ひきてかやさぬ桑^{くは}の弓^{ゆみ}

撥^{はぢ}き返^{かへ}さむ由^{よし}も無^なく

如何^{いか}がはせむと煩^{わづら}ひつ

憂^{うれ}目を忍^{しの}ぶ折^{をり}もあれ

金銀鐵の三人は
【かたみ】に妾の前に出で

左守神の妻たれと
言葉盡して説き立つる

嗚呼如何にせむ今の吾
千尋の海に身を投げて

此苦しみを脱れむか
神の咎めを如何にせむ

千思萬慮も盡き果てて
今は苦しき板挟み

戀しき人に肱鐵を
喰はせて御心怒らせつ

心に合はぬ清公に
日に夜に口説き責められつ

心の暗も知らぬ火の
碎けて落つる吾涙

汲む人もなき地恩郷
あゝ惟神々々

御靈幸倍坐まして
日夜に慕ふ鶴さまに

夢になりとも吾思ひ
傳へ給へよ三五の

道を守らす須勢理姫
神の命の御前に

心を清めて願ぎまつる
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

鶴公さまに吾思ひ
通さにや置かぬ桑の弓

女の思ふ眞心は
岩をも射貫くと聞くからは

通さざらめや吾が戀路
戀し戀しと朝宵に

積る思ひの戀の淵
浮ぶ涙は瀧津瀬の

水に流してスクスクと
落ち行く末は海原

情も深き戀の海
男波女波を乗り越えて

棚無船に梶を取り
太平洋の彼方まで

互に手に手を取り交し
眞の神の御教を

開かせ給へ惟神
御靈幸倍坐ませよ

と、四邊に人無きを幸ひ、宇豆姫は述懐の歌を歌つて胸の縛れを解かむとして居る。

此處へ慌しく驅來れるスマートボールは、
スマートボール「コレハコレハ宇豆姫様、御機嫌は如何で御座います。貴女のお

顔は何處となく憂愁の色が漂うて居るやうで御座います。如何なる事が存じませぬが、スマートボールの力に及ぶ事ならば、何なりと仰せ下さいませ」
と出しぬけの言葉に、宇豆姫は心の底まで見透かされたやうな驚きと、嬉しさをもつてスマートボールに向ひ、赭らむ顔に笑を湛へ、

宇豆姫「コレハコレハ何方かと思へばスマートさまで御座いましたか。御親切によく仰有つて下さいました。餘り神様の御神徳の無限絶對なる御仁慈を思ひ出し、感謝の涙に暮れて居りました。貴方も相變らず御壯健で御神業に御奉仕遊ばされ、何よりも結構で御座います」

スマートボール「ハイ、有難う御座います。私が唯今参りましたのは他の事では御座いませぬ。貴女に折入つてお尋ね致したい事が御座いますので、失禮をも願みず唯一人、男子の身を持ち乍ら女御一人の處へ参りました。貴女に取つては嘸々御迷惑にお感じなさるでせうが、決して私は不潔な心を持つて、女一人のお居間をお訪ねしたのでは御座いませぬ。何卒惡からず思召し下さいませ」

宇豆姫「スマートさま、其お心遣ひは御無用にして下さいませ。清廉潔白にして、

信心堅固の譽高き貴方様、如何して左様な事を思ひませう。誰だつて貴方の行動を疑ふ者は有りませぬから、お氣遣ひなさいますな。人間は平生の行ひが肝腎です。貴方の如く信用のある方なれば、何時お越し下さいますても些しも苦しいは御座いませぬ」

スマートボール「ヤア、それで安心致しました。私は御存じの通りの周章者、圓滑な辭令を用ひて遠廻しに貴女の御意中を探る様な事は到底出来ませぬから、唐突乍ら、手取り早くお伺ひ致し度い事が有つて参りました」

宇豆姫「妾に對してお尋ねとは、それは何う云ふ事で御座いますか」

スマートボールは頭を掻き乍ら、

「エー、實は………」

と云ひ悪さうにモジモジして居たが、斯くてはならじと腹を据ゑ、

「宇豆姫さま………」

と改まつたやうな口調で切り出した。

宇豆姫「ハイ」

スマートボール「貴女の御存じの通り、此地恩城も三五敎の大神の御神徳にて日に月に榮え、國民は其徳に悦服し、天下泰平に治まり、其上素盞鳴大神様の御娘子、梅子姫様を初め黄龍姫様の御母上まで、黄龍姫女王の神務を内助され、地恩城の組織は稍完全に定まりましたのは、お互に大慶の至りで御座います。就きましては、今迄教務に老練なる高山彦様がブランジ一の職に就かせ給ひ、黒姫様はクロンバーのお役を遊ばし、夫婦息を合して陰陽合體の神務に従事されて來ましたが、御兩人が當城を出立遊ばしてより、清公様が左守神としてブランジ一の職を繼がせられ、大變に吾々迄が喜んで居ります。就てはクロンバーとして奥様を迎へねばなりません、一寸人々の噂を聞けば、貴女様が清公さまの妻となり、クロンバーの職をお繼ぎ下さるとの事、吾々は是を聞いて衷心より歡喜の涙に打たれました。併し乍ら人の噂は當にはなりません。それ故失禮乍ら、直接貴女様にお目にかかつて御意中を承はらむとお尋ね致した次第で御座います。何卒御腹藏なく私迄お漏らし下さいますまいか」

宇豆姫はさも迷惑さうな顔をしながら、

「左様な事、何方にお聞きなさいましたか。ほんに嫌な事で御座いますな」

「イヤ誠に恐れ入ります。失禮な事をお尋ね致しました。併し貴女として、まさか……さう……ハツキリと、左様だと云ふ事は仰有り悪いでせう。其處は人情ですから、矢張り……ヤア分りました。さうすると貴女の御精神は、クロンバーの職にお就き下さるお覺悟と拜察致します。何卒私のやうな愚者なれど、未長く可愛がつて下さいませ」

宇豆姫は周章で、

「モシモシ、スマートさま、滅相な事仰有いますな。妾は清公さまの妻にならうなぞとは夢にも思つた事は御座いませぬ。何卒誤解の無きやうにお願ひ致します」

スマートボール「さうすると貴女はモウ好い年頃、何處までも獨身生活を遊ばすお考へですか」

宇豆姫「ハイ……イ、エ」

とモガモガする。

スマートボール「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、流石は乙女心の恥かしさ、ハツキリと仰有らぬワ

イ。三月の壬生菜と同じぢやないが、「仕たし」怖しと云ふ所ぢやな」

宇豆姫「オホ、、、好い加減な當て推量は止めて下さいませ。妾はまだ外に…」

…」

スマートボール「エ、、あなたはまだ外にと仰有つたが、其次を續けて下さいませな」

せな」

宇豆姫「厭なこと、好い加減に堪忍して下さいな」

スマートボール「イエイエ、貴女の一身上の大事は申すも更なり、本城に取つて

重大な問題ですから、何卒ハツキリと私迄云つて下さいませ」

宇豆姫「妾は嫌で御座います」

スマートボール「これは迷惑、決して私は貴女に對して野心は持つて居りませぬ。

又私のやうな輕薄な人間は嫌と仰有るのは當然です」

宇豆姫「さう悪く氣を廻して貰つては困りますよ。決して決してスマートさま、

貴方を嫌ひと云つたのぢや御座いませぬ」

スマートボール「ハテ、合點のゆかぬ。さうすると權要の地位にあるブランジー

の清公様を嫌ひと仰有るのですか」

宇豆姫「ハイ、假令天地が覆るとも、絶対に嫌で御座います」

と思ひ切つたやうに、ハツキリと云うて退けた。

スマートボール「ハテナ、實際當つて見なくては分らぬものだ。人の噂と薩張り

裏表だ」

と呟く。

宇豆姫「どんな噂が立つて居りますかなア」

スマートボール「餘り貴女に對して氣の毒だから、もう云ひますまい」

宇豆姫「チツとも構ひませぬから云うて下さいませ。お願いで御座います」

スマートボール「城内の噂では、貴女はあれだけ人氣のある鶴公さまを蛇蝎の如

く忌み嫌ひ、權要の地位にある左守神の清公さまに秋波を送り、非常に御熱心だ

と云ふ噂が立つて居りますよ。蓼喰ふ蟲も好き好きとやら、何程地位が高くても、

あれだけ大勢の者が忌み嫌ひ清公さまに電波をお送り遊ばすとは、貴女の日頃の

立派なお心に照り合して、些しも合點が參らぬと思つて居りました。併し乍ら、

今仰有つたお言葉が眞實としますれば、何事も氷解致しました」

宇豆姫「ハイ、有難う御座います」

スマートボール「貴女は意中の人があれば、女房におなりなさるのでせうな、神の道は女としては夫を持つのが本當です。何卒私に包まず匿さず仰有つて下さいませ。どんな幹旋でも致しますから」

宇豆姫「ハイ、有り難う御座います。何うも不束な妾、何程此方から戀しい意中の人があつても、先方様にそれ丈けのお心が無ければ、到底末が遂げられませぬから、マア今の處、妾の夫になつて下さると云ふ人は御座いますまい。妾の好いと思ふ方は先方からエツパツパーとお出かけ遊ばすだらうし、先方様から妾をお望み下さる方に限つて妾の方から蟲が好かず、何うも思ふやうに行かないものです。何と云つても長い一生の間暮さねばならぬ夫婦の間柄、氣の合はぬお方と一生暮すのは不快で堪りませぬ。女は夫に絶対服従すべきものだと言ひますが、妾としては些しく道理に合はない様に思ひます。夫が如何なる事を云つても、妻として絶対服従を強らるるの残酷です。夫婦は互に意見を交換し、相携へて行か

ねばならぬもの、然るに世間の夫婦を見ますると、女房は殆ど夫の奴隸か、玩弄物のやうな扱ひを受け、夫が何んな不始末な事を致しても、妻としては是を云々する権利もなく、まさか違へば髻を掴んで打ち打擲をされ、不貞腐れ女、不柔順な妻と無理やりに醜名を着せられ實に無告の民も同様で御座いますから、妾は夫を持つならば、この間の消息をよく辨へた、物事のよく分つた方と夫婦になり、圓満なホームを作り、神界の御用に面白く嬉しく、潔く奉仕する事の出来る夫を持ち度う御座います。男女同権と云つて、男子も女子も同じ神の分靈、どちらも無ければなりませぬもの、然るに夫婦となれば、最早同権ではありませぬ。夫唱婦隨と云つて夫によく仕へ、何事にも服従するのが妻たるの道、併し乍ら無理解な夫に無理難題を強られ、夫の権利を振りまはされては不快で耐りませぬから、心の底より妻の境遇を憐れみ、同情心をもつて添うて下さる夫が持ち度いので御座います」

スマートボール「成る程、承はれば御尤も千萬だ。吾々は未だ妻を持つた事もない、夫婦の味は知りませぬが、女の心理状態はそんなもので御座いますかなア。

「ヤアもう承はつて人情の機微を窺ふ事が出来ました。併し貴女の最前のお言葉に、意中の人は先方から應じない……との意味を漏れ承はりましたが、意中の方と云ふのは何方で御座いますか」

宇豆姫「ハイ……」

と云つて俯いた儘、顔を匿す。

スマートボール「貴女、意中の人にエツパツパーをやられた時のお心持は、どんなにありましたかな。女の心も、男の心も同じ事、意中の女に撥かれた男は、層一層残念なものですよ。七尺の男子が女の爲に肱鐵を喰はされ、天地の神に對して合す顔が無いと云うて、庭先の松で、首を吊らうとした立派な男がありますよ。

併しその男は貴女に撥かれて……」

宇豆姫「エ、何と仰せられます。妾に撥かれて首を吊りかけたとは、それは本當の事で御座いますか」

スマートボール「白ばくれ遊ばしてはいけませぬ。現に貴女は撥いたぢやありませんか。撥かれた男は此の庭先の松で、プリンプリンと空中活動を開始して居

た。私はフト通り合せて、驚いて命を救つた哀れな男が御座います」

宇豆姫「エ、……」

と云つた限り、又俯く。

スマートボール「貴女は右守神鶴公さまを月照る夜半に、素氣なくも蜂を拂ふや

うな目に遇はせ、恥を搔かせたのでせう、其男が寝ても覺めても貴女の事を思ひ

詰め、此頃は貴女が清公さまの女房になられるとの噂を聞き、眞實に可憐さうに、

大悲觀の極に落ちて居ますよ。貴女も餘つ程罪な方ですな」

宇豆姫「エ、あの鶴公さまが、そんなに御熱心であらつしやるので御座います

か」

スマートボール「貴女のお嫌ひな鶴公さまが、そこ迄執着があるとお聞きになつ

ては、聊か御迷惑でせうな」

宇豆姫「何うして何うして御勿體ない。妾はあんなお方に、假令半時なりとも添

うて見たう御座いますワ」

と眞赤な顔をして、思ひ切つたやうに云ひ放ち、クレツと後を向き顔を匿した。

スマートボール「ヤア、それでやつと安心しました。流石は貴女お目がよう利き
ます。戀も其處迄ゆけば神聖ですよ。屹度私がお力になつて此戀を叶へさせます
から、御安心下さいませ」

宇豆姫「……………」

斯かる所へ、金、銀、鐵の三人を従へ入り來つた黄龍姫は、言葉靜に、

「宇豆姫様、……ヤア貴方はスマートボールさま、御都合の悪い所に參つたので
はありますまいかな。お話が御座いますれば、暫く彼方に控へて御遠慮致します
から、御兩人、お話を濟ませて下さい。妾は次の間に控へてお待ち申して居りま
す」

此言葉を聞いた宇豆姫は容を改め、襟を正し、座を立つて下座に坐り、
宇豆姫「コレハコレハ、女王様、よくこそ被入せられました。どうぞ此方へ御着
座下さいませ」

黄龍姫「左様なれば着座致しませう。時に宇豆姫様、貴女に折入つて申上げ度い
事が御座いますから、……スマートボール、暫く席をお外し下さい。金、銀、鐵

の三人も暫し遠慮召されや」

スマートボールは、

「ハイ、承知致しました」

と素直に此場を立ち退いた。三人も次の間に姿を隠した。暫く兩人の間には沈黙の幕が下りた。屋外には嵐の音轟々と鳴り渡り、庭園に咲き亂れたる花瓣を惜気もなく散らして居る。晃々たる太陽の光は戸の隙間より細く長く線を引き、煙のやうな塵埃がモヤモヤと飛散して居るのが、キラキラと日光に輝いて不知火の如く見えて居る。

黄龍姫「モシ宇豆姫さま、御覽遊ばせ。斯の如く咲き亂れたる百の花に向うて、日天様が晃々と輝きたまふにも關はず、雲も無きに暴風吹き荒み、落花狼藉、庭の面は一面に花蓆を敷き詰めたやうでは御座いませぬか。實に花永久に梢に止まらむとすれど嵐來つて是を散らす。樹木靜ならむとすれど風止まず、子養はむとすれども親待たずとかや、世の中は或程度迄は、吾々人間の自由には成らぬもので御座いますな。夫婦の道だとして同じ事、自分の添ひ度いと思ふ夫に添へな

つたり、自分の嫌で耐らぬ男に一生を任さねばならぬ事は、まま世界にある習ひで御座います。何事も天地の間に生れた以上は、神様の御心に任し、何う成り行くのも因縁と諦めて我を出さぬのが天地の親神様に對して、孝行と申すものは御座いますまいか」

と遠廻しに網を張つて居る。其言葉を早くも感づいた宇豆姫は、ハツと胸を躍らせ乍ら素知らぬ顔にて、

宇豆姫「女王様の仰せの通り、世の中は人間の勝手にはならぬもので御座います」と僅に應酬した。

黄龍姫「今改めて黄龍姫が、宇豆姫に申し渡す事が御座います」

と儼然として立ち上り、最も莊重な嚴格な口調にて、

黄龍姫「此地恩城は、清公を以て左守神と神定め、ブランジの職を授けたる事は、和女の既に知らるる所、就てはクロンバーとして和女を清公が妻に定めます。黄龍姫の申す事、よもや違背はありますまい。サア直様御返事を承はりませ

う

宇豆姫は胸に警鐘亂打の響き、地異天變突發せし狼狽へ方をジツと耐へ、さあらぬ態にて胸撫で下し、

宇豆姫「ハイ、有り難う御座います。不束な妾の如き者を、勿體無くもクロンバーの位置に据ゑ、畏れ多くも驍名隠れ無き清公様の妻にお定め下さいました仁慈無限の思召し、早速お受致しますのが本意では御座いますが、何卒暫く御猶豫を下さいませ。熟考した上で御返事を致しませう」

黄龍姫「黄龍姫が心を籠めた夫婦の結婚、一時も早く良き返事をして下されや」
宇豆姫「ハイ、兔も角も熟考の上御返事を致しませう」

黄龍姫は些しく言葉を強め、

黄龍姫「もはや熟考の餘地は有りますまい。神様の爲め、お道の爲め、身命を捧げた貴女、假令少々お氣に足らぬ所があつても、其處を耐へ忍ぶのが三五の道の教ゆる所、必ず必ずお取り違ひのないやうに……」

と退つぴきならぬ釘鋏、進退維谷まつた宇豆姫は、何の答も【ないじやくり】、涙を呑み込む哀れさよ。

黄龍姫わつりようひめ「ひととき一時の猶豫いうよを致いたします。其間そのあひだに良く熟考じゆくかうをなさいませ。本末ほんまつ自他じた公私こうしの大道だいたうを誤あやまらないように、呉くれ呉くれも注意ちういして置おきます」
と又一またひとつ千引ちびきの岩いはの重石おもしをかけられ、宇豆姫うづひめは、煩悶はんもん苦惱くなうの極きよくに達たつし、慄ふるい聲こゑになつて、

宇豆姫うづひめ「黄龍姫様わつりようひめさまの御親切ごしんせつ、有あり難がたう存ぞんじます。暫しばしくの御猶豫ごいうよをお願ねがひ致いたします」
と僅わずかに口くちを切きつた。黄龍姫わつりようひめは莞爾にっことしてこの場ばを悠々いういうと立たち去さる。

後あとに宇豆姫うづひめ唯ただ一人ひとり、夢ゆめか現うつか幻まぼろしか、夢ゆめならば早はやく覺さめよと、とつおいつ、思案しあんに暮くれて居ゐたりしが、

宇豆姫うづひめ「嗚呼ああ矢張やぱり夢ゆめではない。ア、何どうしようぞ。何どうして是これが耐たへられよう。神様かみさまの御爲おんため、お道の爲ためとは云いひながら、妾程わたしほど因果いんぐわなものが世よに在あらうか。何故なぜに

男をとこに生うまれて來こなかつたらう」

とワツと許ばかり、大河おほかはに濁水だくすゐ氾濫はんらんし、堤防ていぼうを崩潰ほうくわいせし如ごとく、一度いちどにどつと涙川なみだがは、身みも浮うく許ばかり泣なき叫さけぶ。廊下らうかを通とほりかかつた右守神鶴公うもりのかみつるこうは、耳敏みみさとくも此聲このこゑを聞ききつ

け、何事なにごとの變事へんじ突發とつぱつせしかと慌あわただしくドアを推開おしあけ進すすみ入り、

「モシモシ、宇豆姫様、如何なさいました。腹が痛みますか……介抱さして下さいませ」

と親切に後に廻つて横腹の邊りを抱へた。瘡を止むる男の力、戀の力と一つになつて宇豆姫は一生懸命、

「是がお手の握り納め」

と云はぬ許りに、日頃戀慕ふ右守神の手も碎けむ許りに力限り握り締め、涙の顔を振り上げて、鶴公の顔を打ち眺め、

宇豆姫「鶴公様、何卒お許し下さいませ。情無き女と御蔑み、御恨み遊ばしたで

御座いませう。妾の心は決して貴男様を忌み嫌つて居るのでは御座いませぬ。餘りの嬉しさと驚きに、御無禮の事をいつぞやの夜致しました。御無禮のお咎めも

遊ばさず御親切に御介抱下さいますお志、妾は此儘息が絶えても、最早此世に恨みは御座いませぬ」

と又もや咽び泣く其可憐らしさ。

鶴公「ア、其お心とは夢にも知らず、情無い貴女と、今の今迄恨んで居りました。

どうぞお許し下さいませ。假令貴女と偕老同穴の契は結ばずとも、其のお言葉を一言承はつた上は、私は最早何一つ恨みは御座いませぬ。ア、よく仰有つて下さいました。

と兩眼に涙を浮かべ目を【しば】叩き、聲を出して男泣きに泣く。割りなき戀路の二人の男女他の見る目も哀れなり。

(大正一一・七・七 舊閏五・一三 加藤明子録)

第四章 望の縁〔七五〇〕

あめ ちおん 地恩の城の女王なる
あめ ちち の 貴の子と
うま 生れ出でたる宇豆姫は
あななひけう 三五教の神司
こつそく 拘束されて村肝の
わつりまひめ 黄龍姫の言靈に

胸を躍らせ忍び泣き 義理と戀との恩愛の

締木に攻められ手も足も かかる隙さへ【なく】ばかり

身を震はして倒れ居る 幸か不幸か三五の

右守神と仕へたる 戀しき男の鶴公が

聲を聞き付け驅來り 情をこめし介抱に

ホツト胸をば撫で下ろし 蘇生りたる心地して

喜ぶ間もなく室外の 廊下に聞ゆる足音に

氣を取直し兩人は 容を改め襟正し

素知らぬ態を装ひて 互に顔を見合はせつ

胸に荒浪打たせ居る。

隔てのドアを荒々しく押開けて入り來れる左守の清公は、二人の姿を見て、忽ち顔色を變じ、眼を釣り上げ、鼻息強く疊ざはりも荒々しく、ドツカと二人の中に座を占め、

清公きよこう「アハ、、、、お二人様ふたりさま、シツポリとお樂たのしみの最中さいちゆうに、邪魔者じゃまものが罷り出まかて
實まことに濟すまない事を致いたしました。月つきに村雲むらくも、花はなに嵐あらしとやら、無粹ぶすゐな男をとこの左守神さもりのかみ、か
やうに御親密ごしんみつなるローマンスの、遺憾ゐかんなく發揮はつきされつつあるとは、神かみならぬ身みの
知るよしもなく、恐惶至極きようくわうしごくに……イヤハヤ……存ぞんじ奉たてまつります。右みぎに妹山左いもやまひだりに背せや
山ま、妹背いもせの仲なかを割わつて流ながる、時ときも時ときとて惡野川あしのがは、一目千本ひとめせんぼんの花はなにも擬まがふ、珍うづの
姿すがたの宇豆姫様うづひめさま、誠まことに失禮しつれいを致いたしました。どうぞシツポリと互たがひに手てに手てを取り交かし、
随分ずぶんお樂たのし皆みなさるがよからう。さても……さても、いやな男をとこが降ふつて來きたもので御ご
座ざるワイ。アハ、、、、」
と大口おほくちを開ひらき肩かたを揺ゆり、疊たたみに小地震せうぢしんを揺ゆらせる。鶴公つるこうはキツとなり、
鶴公つるこう「是これはしたり、存ぞんじも寄よらぬ左守神さもりのかみのお疑うたがひ、吾々われわれ兩人りやうにんの間あひだは水晶すゐしやうの如ごとく極きは
めて潔白けつぱく、何卒公明なにとぞこうめいなる御判断ごはんたんを願ねがひます」
清公きよこう「アハ、、、、言いうたりな言いうたりな、巧妙かうめうなる辭令じれいを以もつて、逃のがれ難がたき此場このば
の有様ありさまを、厚顔無恥こうがんむちにも葬はつむり去さり、己おのれが失態しつたいを被おほひ隠かくさむとする、右守殿うもりどのの巧妙かうめう
なる御辨舌ごべんぜつ、イヤもう吾々われわれ共ともの及およぶ所ところでは御座ござらぬ。此かくの如ごとき懸河けんがの辨舌べんぜつを振ふるひ、

巧言令色を以て、さしも道心堅固なりし宇豆姫を、掌中の玉となし、天下の色男を以て任ずる鶴公様の御腕前には、三舎を避けて感憤仕る。』
と態と叮嚀に頭を疊につけ両手をつき、意地悪く平伏して見せる。鶴公は無念の齒を噛みしめながら、身を震はせ息をはづませ、肱を張り、唇をビリビリ動かせ、顔面筋肉を緊張させながら、固くなつて四角張つて居る。
清公「アハ、ハ、ハ、人の前に固き者は、人の居らざる女の前に最も柔かし、まつた、神の前に弱き者は人の前に最も強く、人の前に強き者は神の前に出でて最も弱しとかや、イヤもう實地教育を拜聴拜觀致しました。此の如き權謀……イヤ智謀に富める右守神、我次席に扣へ居らるる地恩城は萬々歳、イヤハヤ目出度い目出度い。……是はしたり宇豆姫どの、日頃戀慕ふ男に逢ひ、且つ存分お楽しみを遊ばし、何が不足でお泣きめさる。イヤイヤ餘り嬉しさの餘り涙で御座つたか。唐變木の無血無情の某には、到底ローマンスを語る資格は絶無で御座る。有難い所を見せ付けられ、左守實に満足仕る。是より女王様に面會致し、兩人が媒介を致し、宇豆姫は鶴公様が宿の妻、末長う幾久しく偕老同穴の契を結ばれたし。イ

足を煩はしました不都合の段、御赦し下さいませ」

と慇懃に挨拶する。黄龍姫は此言葉を聞いて、軽く首を振つて居る。

清公「これはこれは黄龍姫様、よくも入らせられました。今御見懸の通り不都合

千萬にも右守の職掌を忘れ、女王様の御入來を歓迎する事を差措き、御覽の如く

箒を以て掃出し、無限の蔑辱を加へたる不届千萬なる行爲、御咎めも無く御容赦

なし下されしは、是れ全く上位に在る我等が行届かざるの御無禮……」

と圓滑に戀の仇人を陥穽せんと述べ立つる。黄龍姫は淑やかに、

「イヤ決して御心にさへられな。案内もなく参りましたのでお氣遣ひ遊ばし、鶴

公様が妾に敬意を拂うて、座敷の掃除をして下さつたのでありませう。もう暫く

御待ち申して居ればよかつたでせう。何分急いで這入りましたので、大變に心配

をかけ御心を悩ませましたは妾の誤り……」

と善意に解する黄龍姫の言葉に、鶴公はハツとばかりに有り難涙に咽返り「流石

は地恩城の女王様」と心の中にて伏し拜む。宇豆姫は女王の情籠れる温かき言葉

に、嬉し涙を浮かべ、有難さに胸も塞り俯向き居る。清公は、

「流石に御仁慈深き女王様。實を申せば我々常に尊敬の心を疎にし、大切なる女王様を軽んじて居りました。其罪が今現はれ我次席につかふる鶴公がへと大聲に言つて）……斯様な無作法な侮辱を與へましたに拘らず、神直日、大直日に見直し聞直し下さる段、何共有難く、お禮の申し様が御座いませぬ。中の胴が洞になつた竹でさへ節が御座る。如何なる不調法を致しても、其儘に見遁し給ふ時は、城内の規律全く破れ、綱紀紊亂の端緒を開く虞れあれば、此責任を私一身に負ひ、只今より辭職仕ります。何卒々々此儀御聞届け下さいますれば、有難う存じまする」

と態とに言葉を構へ、右守神を失墜せしめむとする心の中の穢さ。敏くも見て取つたる黄龍姫は、

「汝の至誠天に通じたれば、望みの如く左守の神職を今日只今より解除する。汝はこれより下屋敷に下り、わが命を待て」

と手もなく言ひ渡した。左守神の清公は案に相違し、夜食に外れし梟鳥のやうな面を下げ、嫌々乍ら、

「ハイ早速の御聞届け、あ：り：が：と：う：存じまする」

と震ひ聲になつてお受けをする。鶴公は涙を拂ひ両手をつかへ、

「女王様に申し上げます。今日の御無禮は全く左守様の預り知らざる所で御座います。全く吾々の不調法、何卒私の役目を解除し、左守様を舊の通り御信任下さる様に、御願ひ申上げ奉りまする」

黄龍姫「至善至美、至眞至實の汝の心感じ入る、然りながら、汝等は何事も大神の御心に任せ奉りし身の上ならば、自己の意思を以て此聖職を左右すべきものに非ず。汝は是よりわが命を奉じ、左守となりて神業に奉仕せよ。まつた宇豆姫は

此黄龍姫が媒人となり、鶴公が妻となりて、永遠にわが神業を補助されよ」と厳として言ひ渡した。清公は此場を去り兼ね、犬突這となり乍ら、

「鶴公殿、嘸御満足で御座いませう。宇豆姫様に元の左守清公、心の底より御祝ひ申上げますぞ」

宇豆姫は戀と義理との締木にかかり、何と言葉もなく計り身を悶へて居る。鶴公「有難き女王様のお言葉なれども、これ計りは御赦しを頂きたう御座います」

黄龍姫わつりようひめ「それや又何故またなぜ、わが命めいを御聞おききなさらぬか」

鶴公つるこう「如何いかに主命しゅめいなればとて、此計こればかりりは何卒なにとぞなにとぞ々々お赦ゆるしの程ほどを願ねがひ奉たてまつりまする」

黄龍姫わつりようひめ「汝なんぢはわが命めいを背そむく考かんがへなりや。如何いかに宇豆姫うづひめどの、和女そなたはこれより鶴公つるこう

の妻つまとなり、ブランジー、クロンバーと相竝あいにらびて神業しんげふに奉仕ほうしされよ。是これ黄龍姫わつりようひめ

の私言しげんに非あらず、三五教あななひけつの皇大神すめおほかみの御心みこころであるぞよ」

と嚴げんとして動うごかぬ氣色けしき、宇豆姫うづひめは耐たまり兼ね、

「何いづれも様さま、是これが此世このよの御暇おいとま乞ごひで御座ございます」

とドアを押開おしあけ、韋駄天みだてん走りに表おもてに驅出かけだし、後白雲あとしらくもの中なかに消きえて仕舞しまつた。

黄龍姫わつりようひめは言葉ことば嚴おそかに、

「汝等なんぢら兩人りやうにん、宇豆姫うづひめの行衛ゆくゑを探さがし求もとめ、一時いちじも早はやく我前わがまへに連つれ來きたられよ」

と言いひ渡わたし、又またもや奥殿おくでんに悠々いいうとして進すすみ入いる。清公きよこう、鶴公つるこうの兩人りやうにんは、

「コリヤ大變たいへん、かうしては居をられぬ」

と一生懸命いっしやうけんめい韋駄天みだてん走りに、宇豆姫うづひめの後あとを追おひ城門じやうもん脱ぬけ出だし、トントントンと大地だいち

を威喝あかつさせながら、驀地まつしけらに白雲しらくもの包つつむ山腹さんぶくを走はしり行ゆく。

(因に、此地恩城は高山を四方に廻らす高原の靈地である)

一天俄に掻き曇り、流石の地恩郷も陰鬱の氣に鎖されたる折柄に、俄に髪振り亂し一目散に城門を驅出し走り行く宇豆姫の姿を、チラと認めたスマートボール、チャンキー、モンキーは「オーイ オーイ」と呼ばはり乍ら、白雲籠めたる山腹を、見失つては一大事と一生懸命に追つ驅行く。千仞の斷崖絶壁より、溪間の青淵目蒐けて、身を躍らし、飛び込まむとしたる宇豆姫は、

「惟神靈幸倍坐世」

と合唱し乍ら、ザンプと許り落ち込んだ。此處迄追つ驅來りしスマートボールもチャンキー、モンキーもハタと行き詰まり稍當惑の態であつた。此時「オーイ オーイ」と白雲分けて走り來る左守、右守の二柱、

「宇豆姫を捕へよ」

と叫びつつ進み來る。スマートボールは最早是迄なりと決死の覺悟を以て、千仞の溪間の青淵目蒐けてザンプと許り飛び込んだ。チャンキー、モンキーを始め、左守、右守の二柱は「アレヨアレヨ」と叫びながら、岩上に地團太踏んで居る。

谷底へ飛込みたるスマートボールは、宇豆姫を小腋に搔い込み救ひ上げ、水を吐かせ人工呼吸を施し、種々雑多の介抱の上、漸々蘇生せしめた。

スマートボール「モシモシ宇豆姫様、貴女はどうしてこんな事をなさいましたか。此れには何か深い仔細が御座いませう。併し乍ら如何なる事が御座いませうとも、決して短氣を出してはなりませんませぬぞや」

宇豆姫は息をはづませ乍ら、

「誰方かと思へば、貴方はスマートボール様。……私には死なねばならぬ事が御座います。どうぞお見遁し下さいませ」

スマートボール「如何なる事が御座いませうとも、能く耐へ忍び天壽を全うして、能ふ限りの神業に奉仕しなくてはなりませんまい。自殺は罪惡中の罪惡で御座います。貴女の肉體は決して貴女の物ではない。身魂共に大切な神様の預かり物、左様な氣儘な事をなさいますと、末代其罪は赦されませぬぞ。如何なる事が御座いませうとも、スマートボールが力限りお力になりませう程に、自殺丈は、思ひ止まつて下さい」

と兩眼に涙を流し兩手を合せて頼み入る、其真心の麗しさ。宇豆姫は感に打たれて、

「ア、有り難う御座いました。女心の一時の感情にて義理と情に迫られて、思はぬ不覺を取りました。どうぞお許し下さいませ。もう今後は貴方の御教訓を肝に銘じ、決して斯様な無法な事は致しませぬ」

「ア、宇豆姫様、よう言つて下さいました」
と涙を拭ひ宇豆姫を背に負ひ、猿も通はぬ絶壁を、やうやうにして地恩郷の一隅に攀登り終つた。

スマートボールは宇豆姫の手を曳き乍ら、城門を潛り、宇豆姫の居間に送り届け、衣服を着替へさせ、色々と慰めの言葉を與へてゐる。宇豆姫は唯感謝の涙に暮れて一言も發し得ず、スマートボールを伏し拜む計りである。

此騒ぎに黃龍姫を始め、蜈蚣姫其他の一同此場に現はれ、宇豆姫の無事を祝し、且つスマートボールの善行を口を極めて賞讃した。今迄張り詰めし心のスマートボールは、青淵に飛び込みし際、腰をしたたかに打ちたれども、仁慈の心に引付

けられ、其痛を少しも感じなかつたが、やつと胸撫で下し安心すると共に、俄に腰部の激痛を覺えたので、擔架に乗りて我居間に送られ、發熱苦悶の床に伏す事となつた。黄龍姫は宇豆姫に向ひ、

「そなたは、命の恩人たるスマートボールの病氣、全快致すまで枕頭に侍り、親切に介抱をなされよ。御神務は梅子姫様是れに當らせ給へば、神務に心を置かず、病人の介抱に全力を盡されたし」と慈悲の籠つた言葉を殘し、奥殿に又も悠悠と進み入る。

日は西天に没し、三五の明月は東山の峰を壓して皎々と輝き、スマートボールの至誠を感賞するものの如くである。是よりスマートボールは宇豆姫の手厚き晝夜の看護に依り一ヶ月の後、やうやう舊の身體に復し、神殿に手を携へてお禮参りを目出度く濟ませた。

是よりスマートボールの徳望は益々高く、城内は言ふも更なり、龍宮島一圓に其徳喧傳され、名譽を一身に擔ふ事となつた。

一旦辭任を申出でたる左守の清公は、チャンキー、モンキーと共に平役人の列

に加へられ、一から遣り直し、修行時代に還元して仕舞つた。今日は三五の明月、月は皎々と中天に輝き、下界の悪魔を隈なく照らし給ふ時、チャンキー、モンキーを始め貫州、武公其他の連中は、城外の芝生の上に月を賞し乍ら、雑談に耽つて居る。

チャンキー「恰度先月の今日だつた。宇豆姫さまが谷底へ身を投げられた時、俺達もどうかしてお助け申したいと心はいくら燥てども、何を云うても千仞の谷間、さうしてさつぱり何處もかも白雲に包まれ、如何する事も出来ない場合、スマー
トボールさまは雲の谷間を目蒐けて飛び込み、大切な命を拾つて助けられたその日だ。奥には御神殿に於て黄龍姫様、宇豆姫、スマートボール様も全快を兼ね、お禮の御祭典が始まつて居ると云ふ事だ。それに就いても左守の清公さまはどうだ。あれだけ一生懸命に宇豆姫さまに現を抜かしながら、危急の場合お助けもよ
うせず、又鶴公さまとても同じく宇豆姫さまに魂を抜かし乍ら……あの態、實に
人間の心程當にならぬものはないぢやないか」
貫州「それだから何時も俺は清公が【ヤモリ】になつたり、鶴公が【イモリ】に

なつて威張つて居るのが氣に食はぬと言ふのだ。あんな連中が上に頑張つて居ては、俺達は浮ぶ瀬がない。仁慈無限の黄龍姫様や生神の梅子姫様の仁徳、何程日月の如く輝き給ふとも、中途に黒雲が被さつて居つては、日月の光も我々の頭に照り渡らない道理だ。幸ひ清公が左守を迂つた以上は、どうぞ立派な後繼者が欲しいものだなア」

武公「今日下馬評に上つて居るのは、スマートボールさまだ。あの方ならば我々は、雙手を擧げて賛成をするよ。さうして宇豆姫様をクロンバーの位置に据ゑ、三五教の教理を龍宮島一帯に、萬遍なく均霑せしむるのが我々の理想だよ」

モンキー「ヘン……一寸遣りくさるワイ。そんなら是から一つ吾々が連判状を作つて、スマートボール様を、左守に御任用下さる様、建白書を差出さうぢやないか」

一同「ソリヤ面白からう」

と話す處に、ニユツと現はれた清公は、

「ヤア、最前から結構なお話がはづんで居りましたな。私も皆さまのお心の中を

窺ひ知らして頂いて、誠に結構で御座いました。貴方等の仰せの通り、實に私はツマラ又者で御座いました。私が今日の境遇に陥つたのも、決して偶然では在りません。どうぞ今迄の心を根本より改良致しますから、今迄通り可愛がつて下さいませ。どんな事でも嫌とは申しませぬ。これから雪隠の掃除でも草取りでも、何でも致しますから」

「チヤンキー」流石は清公だ。さうなくては叶はぬ事、そんならお前、これから連判状を作るから、連名に加はりますかな」

清公「私の如きものでも其末尾にお加へ下さるならば、有り難う御座います」

「ヨシヨシ」

と一同は言ひ乍ら、芭蕉の葉の乾きたるに緑青を以て建白書を認め、各自署名し、夜明けを待つて書類を作り上げ、貫州之を携へ黄龍姫竝に梅子姫の御前に出願する事となつた。

地恩城の奥殿、黄龍姫の居間には、梅子姫、蜈蚣姫と額を鳩め、左守の後任に就て協議會が開かれてゐる。

黄龍姫「梅子姫様、貴女の御存じの通り、左守の清公が辭任致してより、最早一
カ月を經過致しました。宰相なくしては圓滿に神務を奉仕することは最も不便利
で御座います。就ては右守の鶴公をその後任に任じたく存じ、色々と言き付けまし
たなれど、謙讓なる彼はどうしても承諾致しませぬ。私の職權を以て無理に申し
付けると言ふ譯にも参りませぬ、如何致しませうかと心を悩めて居りました。然
るに衆人の徳望を一身に集めたスマートボール、之を左守となし、これに嫁入ら
すに貴方の侍女宇豆姫を以てせば、如何で御座いませう。どうしてもブランジー
にクロンバーの陰陽が揃はなくは圓滑に神務は運べますまい。どうぞ腹藏なく
御高見を承はりたう御座います」
梅子姫「妾も貴女様のお考へ通り、至極結構な事と存じます。蜈蚣姫様の御意見
は如何で御座いませうか。其上にて決定する事に致したう存じます」
と梅子姫は謙遜しながら蜈蚣姫を重んじ、挨拶を返した。
蜈蚣姫「何を云うても年寄の妾、どうぞ黄龍姫と御相談の上、宜しき様にお取計
らひ遊ばしませ。妾は何事も意見は御座いませぬ」

黄龍姫わつりよつひめ 然しからば愈いよいよスマートボール、宇豆姫うづひめを呼よび出し命めいを傳つたへ、神前しんぜんに於おいて結婚けっこんの式しきを擧あげさせませう。善ぜんは急いそげ、一時いちじも早はやく梅子姫うめこひめ様さま、着手ちやくしゆいた致いたす御座ございませう」

梅子姫うめこひめ 「ハイ誠まことに結構けつこうな仰あふせ、妾わたくしは喜よろこんで御贊成ごさんせい申まをし上げます」

愈いよいよ三人さんにんの協議けふぎは纏まとまり貫州くわんしゅうを招まねき、兩人りやうにんに其旨そのむねを傳つたへしめた。

兩人りやうにんは主命しゅめいもだし難がたく終つひに其命そのめいに従したがひ、目出度めでたく結婚けっこんの式しきを擧あげ、此處ここに地恩ちおんき

郷やうのブランジー、クロンバーとして神業しんげふに奉仕ほうしする事こととなりたり。

(大正一一・七・七 舊閏五・一三 谷村眞友録)

第二篇 自由活动じいろうくわつどう

第五章 酒の瀧壺くしのたきつぼ (七五一)

神かみの恵めぐみも開ひらけ行ゆく

世よは太たい平へいの洋わた中なかに

堅かき磐は常とき磐はに浮うかびたる

神かみの造つくりし冠かむり島しま

黄こが金ね花は咲なく龍りう宮ぐうの

一ひとつの島しまと名なを負おひし

日ひの出で神のかみの御おん遺あせ跡せき

醜し女こめ探さく女くめを祝は部りべの

三あな五な教ひけつの宣せんでん傳し使し

風かせ凧なぎ渡わたる波なみの上うへ

迂すべり来きたりし面つら那な藝ぎの

神かみの命みことの詣まうでたる

龍たつの宮みや居あは今いまも尚なほ

御み稜いづ威かが輝がくヒル港みなと

屋た根な無なし船ふねに身みを任まかせ

力ちから限かぎりに漕こぎ来きたる

三あな五な教ひけつの神かむつ司かさ

地ち恩おんの郷さとを後あとにして

魂たまを洗あらひし清きよ公こうが

チヤンキーモンキー引ひ連きつれて

進すすみ来きたるぞ健けんげなれ

あゝ惟かむ神な々がら々がら

御み靈たま幸さちはひましまして

心こころねぢけし清きよ公こうも

胸むねの帳とばりを引ひきあげて

輝かがき初そめし嚴いづ御み魂たま

瑞みづの御み靈たまに神かむ習ならひ

天あま津つ祝のり詞とを宣のり乍なら

御船を濱邊に繋ぎつつ 身装も軽き蓑笠の

金剛杖に送られて 山奥指して進み入る。

地恩城に一切の教權を掌握したる高山彦の後を襲ひ、左守となりすまし居たる清公は茲に地恩城のブランジ―として權威を振ひ、宇豆姫をクロンバーの位置に据ゑ、我勢力を扶植せむと種々の權謀術數を弄したるも、天は清公が邪曲に組せず、遂に左守を自ら辭し、スマートボールをしてブランジ―の職を専らにせしむるの餘儀なきに立到つたのも、全く我が利己主義の罪の致す處と自覺したる清公は、轉迷開悟の梅花の香に心の眼も清まり、如何にもして神界の御用を身魂相應に勤め、名譽を恢復せばやと、チャンキー、モンキー兩人の贊同を得て黄龍姫以下の承認の上、夕方の港を漕ぎ出でて屋根無し船に身を任せ、嘗て日の出神一行が上陸したるヒルの港に船を止め、龍宮の宮に詣でて前途の無事を祈り、飯依彦、久々神、久木神の遺跡を巡拜し進んでクシの瀧の間近まで、茴香の薫に送られ乍ら夏風そよぐ急坂を喘ぎ喘ぎ宣傳歌を歌ひ漸くにして、風景最も佳き谷川の傍に

立てる岩石の上に腰打掛け、旅の疲れを休めつつ話に耽る。

チャンキー「ア、何と良い景色だなア。谷間は斯う両方より山と山とに壓搾されて、非常に狹隘ではあるが、清き溪流が飛沫を飛ばし淙々と水音を立て、岩に噛みつき、佐久那太理に落ち行く光景は、到底地恩城附近にては見る事も出来ない絶景だ。我々も清公さまの失敗のお蔭で、天下を自由自在に宣傳する事を許され、何だか籠の鳥が宇宙に放たれた様な気分になつて来た。斯うなると人間も一度は失敗もし、慢心もやつて見なくては、本當の天地、人生の眞實味が分らないものだ。……南無清公大明神、チャンキー、モンキー兩手を合せ有難く感謝致します。アハ、ハ、ハ」

とそろそろ地金を現はし、洒落気分になつて、駄句り出した。

清公「世の中は一切萬事惟神の御經綸に左右されて居るものだ。俺が地恩城で大野心を起し、宇豆姫を得むとして終生拭ふ可らざる大恥を搔いたのも、今になつて省みれば、實に仁慈無限の大神様の御恵であつた。己に出づるものは己に歸る。悪い事をすればキット悪い酬いが来るのは當然だ。然るに何ぞや。あれ丈け體主

靈從的陰謀を組立て、其結果斯様な結構な宣傳使となり、此冠島に自由自在に開放的に宣傳せよとの許しを受けたのは、悪が自然に善の結果を齎した様なものだ。これと云ふのも全く神様が神直日大直日に見直し聞直し、活かして働かして下さる有難き思召し、逆境に立ちて初めて神の慈愛を知り、宇宙の眞善美を味はふ事を得た。左守神となつて日夜心を痛め、下らぬ野心の鬼に驅使されて居るよりも、斯う身軽になつて、何の束縛もなく、自由自在に活動し得る機會を與へられたと云ふ事は、實に我々として無上の幸福だ。ア、辱なし、勿體なし、惟神靈幸倍坐世」

と有難涙に聲を曇らす。

「チヤンキー」神も佛も鬼も蛇も悪魔も、残らず自分が招くのだ。決して外から襲來するものでない。盜賊の用意に戸締りをするよりも、心に盜賊を招かない様にするのが肝要だ。一切萬事残らず自分の心から招くものだからなア」

モンキー「清公さま、此處はその昔、日の出神様が龍宮城の從神たりし、田依彦、時彦、芳彦と云ふ玉拔かれ神を引連れ、酒飲みの副守護神を追ひ出し給うた名高

い酒の灌壺の附近ではありますまいか。龍宮様が天然に造つて置かれた酒壺が有ると云ふ事ですが、未だに相變らず其お酒は湧いて來るでせうか。一度拜見したいものですな」

清公「サア、必要があれば湧いて居るだらうが、……世の中に必要な物は一つもないのだから、今日となりては何とも分らないなア」

斯く話し合ふ中、何處ともなく二三丁許り上流の谷間より、數多の老若男女の鬨の聲が聞えて來た。

チヤンキー「ヤア、清公さま、不思議な聲がするぢやありませんか。一つ探検と出かけませうか」

清公「一寸待てよ、何事も慎重の態度を執らねば、輕々しく進んで取返しが付かぬ失敗を演じてはならないから、よくよく様子を窺つた上出かける事にしよう。

それに就いては……モンキー、お前は斥候として聲する方を探ね、そつと様子を考へ、報告をして呉れ。それまで我々兩人は此巖の上に於て時期を待つ事とするから」

モンキー「畏まりました。どんな事が突發しても、此處を一寸も動いてはなりませんぞ」

清公「ヨシ合點だ。サア木の茂みに身を隠しつつ、偵察隊の任務を盡して呉れ」

モンキー「承知致したぞよエヘン」

とモンキーは茴香の花の得も言はれぬ薫に包まれ乍ら、酒の灌壺の間近に忍び寄り、少時あつてモンキーは息をはずませ歸り來り、震ひ聲になりて、

「キ……キ……清公さま、夕……夕……大變で御座います。モウ歸りませう。斯んな所を宣傳したつて、あちらに一軒、こちらに二軒と、バラバラに家が建つて居る……モウ斯んな所で勞して效少き活動をするよりも、マ一遍ヒルの港へ引返し、少しく人家稠密な地點へ行かうぢやありませんか」

清公「そんな話はどうでもよい。お前の探檢して來た次第を逐一注進せぬかい」
モンキー「イヤ……モウ、思ひ出してもゾツとする。どうぞそればかりは御量見下さい」

チャンキー「何だか周章たモンキーの様子、日頃の臆病が突發したのだな。何時

も口癖くちくせの様にやう假令たとへ天地てんちは覆かへるとも、誠まことの力ちからは世よを救すくふ……と云いつて居をつたぢやないか。一體いつたい何ことんな事ことがあつたのか。斥候せきこうが報告ほうこくをせないと云いふ事ことがあるものか。大蛇だいじゃに狙ねらはれた蛙かへるの様にやう小さちひくなつて、何なんの態さまぢや」

モンキー「ヤイヤイ、大蛇をろちの事ことはモウ言いうて呉くれな。俺おれは體からだが縮ちぢみ上あがる様やうだ」

清公きよこう「ハ、ア、噂うはさに聞きいたクシの瀧たきの、酒吞大蛇さけのみだいじゃを見みて來きよつたな。ヨシ、其奴そいつア面白おもしろい。一ひとつ生命いのち懸かけの活動くわつどうをして、三五あななひけう教ことむに言い向むけ和やはすか。さもなくば生いけ捕とりにして、地恩城ちおんじやうへ持もつて歸かへるか。兔とも角かくそれを聞きけば、何なんだか胴どうがすわつた様やうな心持こころもちがするワイ」

チャンキー、モンキーは蒼白まつさをな顔かほして、腰こしをワナワナ慄ふるはせ乍ながら、兩人りやうにん「ワ…ワ…ワ…私わたしはド…ド…どうやら胴どうが据すわり…ませぬワイ。如何どうしませう」

清公きよこう「貴様きさまの腰こしは何なんだ。胴體どうたい無なしの尻いかのぼり、いかにも卑怯ひけふ未練みれんな腰拔野郎こしぬけやらうだな。奴腰どこしぬ拔奴けぬめ、モウ貴様きさまは免除めんぢよしてやるから、勝手かたてにヒルの港みなとへ逃にげ歸かへつたがよからうぞ」

チャン、モン二人ふたりは、

「それは有難う御座います。併し送つて頂かぬと、途に又あんな奴がやつて來たら如何する事も出來ませぬワイ」

清公「チャンキー、貴様は話を聞いた丈で震うてるぢやないか。モンキーの恐怖心に驅られた精神作用で、そんな幻覺を起したのだらう。貴様此處に待つて居れ。動いちや可けないぞ。俺が實地探檢をやつて來るから……」

兩人「ハイどうぞ、御無事に歸つて下さい。動けと仰有つても動けませぬワ。斯う足部に菟弱の幽靈が憑依しては、如何ともする事は出來ぬ」

清公「アーア勇將の下に勇卒なし。俺もヤツパリ因縁が悪いと見える。斯んな奴を連れて來なかつた方が、何程よかつたか知れやしない。まさかの時に骨を拾うてやる面倒も要らず、エー工良い穀潰しだな」

と二人を残し、木の茂みを分けて近寄つて見れば、數十人の眞黒けの男、瀧壺の前に堵列し一生懸命に何事か祈つて居る。白衣を着けた神主らしい男三人、大麻を前後左右に頻りに振廻し、片言混りの宣傳歌を歌ひ土人は其聲に従れて、汗をタラタラ流し乍ら合唱して居る。よくよく見れば、周圍一丈も有らむと思はるる

大蛇、赤い蛇腹をダンドラ幕の様に見せた儘、二三間許り鎌首を立て、頻りに毒氣を吹いて居る所であつた。

昔は此瀧に自然の清酒湧き出で、山の龍神時々來つて是れを呑みつつあつたが、日の出神が初めて此島に渡られし時より、次第々に酒の湧出量を減じ、遂には一滴も出なくなつて了つた。傍の瀧は涼々として昔に變らず流れ落ちて居る。此水上に棲息せる大蛇は、酒を呑まむと來て見れば、一滴もなきに業を煮やし、夜な夜な人間の子を呑み喰ふ事となつた。附近の郷人は此害を防がむ爲に、飯依彦神の末裔たる飯依別に神宣を請はしめた。此時、大蛇の靈、憑依して云ふ……

「汝等、愛兒の生命を取らるるを悲しと思はば、所在果物を以て酒を醸り、彼の瀧壺に満して我に獻ぜよ。さすれば汝等が愛兒を呑む事を止めむ」

と云つた。それより郷人は數多の果物を集め酒を造り、此山坂を登り來つて、此瀧壺に酒を満たす事を仕事の如くにして居た。大蛇は月に一回づつ現はれ來り、瀧壺の酒を一滴も残らず呑み干す事が例となつて居た。

一年に一回位ならば如何なつと仕様もあるが、數十石を満す此瀧壺に、毎月果

物の酒を充さねばならぬと云ふ事は、餘り多からぬ郷人に取つては、此上なき大苦痛であつた。一ヶ月にても之を怠りし時は、大蛇忽ち來りて郷の兒を呑み喰ひ、足らざる時は若き妙齡の女を片ツ端から呑んで了ふ。此慘状を如何にもして逃れむと郷人謀し合せ酒に茴香の粉末を混じ、香よき酒となし、此瀧壺に充し置き、大蛇の來り呑むを、木蔭に潜んで息をこらして待つて居た。

大蛇は二三日前より此處に現はれ、數十石の酒を悠々として呑み干し、最早半分許り三日間に呑み終り、毒が廻つて悶え苦みつつあつた。そこへ飯依別、久木別、久々別の神司は、數多の郷人と共に、大蛇を中に四方を取圍み、一時も早く毒が大蛇の全身に廻り、亡びます様と祈願をこめつつあつたのである。大蛇は一文許りの大口をパツと開いて、首をシャクリ乍ら死物狂になつて、郷人を目蒐けて噛みつかむとする。飯依別外二人は、其度毎に大蛇の比禮と稱する、大麻を打振り打振り大蛇を惱ませて居た。

されど巨大なる蛇體に茴香の毒位にては、人間が悪酔した時の様なもので、生命に關はる丈の効果はない。そこで酔が醒めたる上は、此大蛇再び來りて如何な

る復讐をなすかも知れずと、心も心ならず、數多の郷人は寄つて集つて、大蛇退治の祈願を凝らしつつあつたのである。斬れども突けども鱗堅くして鋼鐵の如く、到底人間としては如何ともする事が出来なかつた。此村の土人にしてタリヤと云ふ力強の男、大鎌を携へ大蛇にワザと呑まれ、腹中にて鎌を以て臍腑を斬り破り、大蛇を殪さむと試み、二三日以前にワザと呑まれて了つたのだが、今に其男は如何なつたか、唯大蛇は少しく目の色を變へて苦しげに狂ふ計りである。されどさう急に死にさうにもなし、人間が酒の酔に少々酩酊して首を振つてる位な態度とよりか見えないので、飯依別始め一同の心配は容易でなかつた。唯此上は神の力に依りて大蛇を退治し貰はむと祈るより外に道がなかつたのである。

清公は木蔭に潛み、稍胸を躍らせ乍ら此態を熟視して居た。何時の間にか身體の各部に麻痺を感じ、一寸も自由の利かぬ様になつて居る事に氣が付いた。大蛇は今度はノソリノソリと人垣を破つて廣く這ひ出し、尾を頻りに振つて、四邊の樹木を「しばき」倒し暴れ狂ふ。郷人は尾の先に叩かれて死する者刻々に殖えて來る。大蛇は益々暴れ狂ふ。茴香の毒が全身に廻つたのと、蛇體に最も有毒なる

鐵製鎌の惱みに依つて、流石の大蛇も死物狂ひになり、苦しみ出したのである。清公は其尾に振られて二三丁許り中空に捲上げられ、チャンキー、モンキーの腰を抜かして待つて居る岩石の傍にドサリと降つて來た。愈此處に三人の臂が揃つた譯だ。嗚呼、大蛇の身體を始め此三人の運命は如何なるであらうか。

(大正一一・七・八 舊閏五・一四 松村眞澄録)

第六章 三腰岩(七五二)

大蛇の尻尾に跳ね飛ばされた清公は、廣言を吐いたチャンキー、モンキーの二人の目の前に腰を抜かし、醜態にも顔を顰め、大腿骨を痛め、苦蟲を噛んだやうな、六ヶしい顔をして氣張つて居る可笑しさ。腰の立たぬ三人は、口ばかりは相變らず達者である。

チヤンキー「モーシモーシ清公さま お前は餘つ程偉い奴

龍宮島の地恩郷 左守神まで登りつめ

雪隠の蟲の高上り 漸う大地へ這ひ上り

カンピントンになつた上 蠅に孵化して王さまの

頭の上まで登らうと 企んだ事も水の泡

小便垂れて糞垂れて 宇豆姫さまに撥かれて

ドン底迄も顛落し いよいよ此處に改心の

實を示さうと我々を 言葉巧にちよろまかし

相も變らぬ悪い事 續けるつもりでスタスタと

夕力の港までやつて来て 誰の船かは知らねども

屋根無し船を何々し 吾物顔に悠々と

浪を渡つて夜のうち 人目を忍んでヒル港

改心したとは何の事 大事の大事の他人の船

代價も遣らずにぼつたくり 三五教を此郷に

開かうとしたのが運の盡

俺まで矢張盗人の

そのお仲間引き込んで

大將顔を提げ歩き

クシの雄瀧の手前まで

口と心のそくはない

宣傳歌をば歌ひつつ

同じ教の道の子の

我々二人を頤の先

チヤンキーモンキーと口の先

汚い言葉で扱き使ひ

主人面してやつて來た

その天罰は目のあたり

大蛇の尻尾に撥ねられて

左守神になつたやうに

一旦高く舞ひ上り

スツテンドウと土の上

忽ち變る地獄道

腰弱男が腰抜かし

お尻の骨を打ち碎き

吠面かわくは何の事

お尻の仕末のつかぬ人

そんなお方と知らずして

従いて來たのが我々の

不覺と悔んで見たところが

六日の菖蒲十日菊

改慢心の清公の

猫の眼球のお招伴

こんな約つまらぬ事ことはない
チヤンキーモンキー騒さわいでも

お腰こしが立たたねば仕方しかたない
私等わたしら二人ふたりをこんな目めに

遇あはして置いて清公きよこうさま
何どうする積つもりで御座ござるのか

餘あまりと云いへばあんまりぢや
お前まへの腰こしは何どうなるが

お尻しりの骨ほねは碎くだけやうが
私わたしは些ちつとも構かまやせぬ

お傍杖そばづゑをば喰くはされた
私等わたしら二人ふたりは此儘このままに

此處ここで死しんだら化ばけて出でて
お前まへの影身かげみに附添つきそうて

生首なまくびかかねば置おかぬぞや
あゝ惟神かむながらかむながら々々

目玉めだま飛び出でるやうな目めに
私わたしは遇あはされ耐たまらない

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
清公きよこうの奴やつは死しぬるとも

私わしにとつては大蛇「だいじや」ない
早はやく改心かいしんした上うへで

我等われら二人ふたりが壯健さうけんで
お前まへを見捨みすてて歸かへるやうに

どうぞ祈いのつて下くださんせ
此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心も廣き大直日 唯何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ 身の過ちは宣り直せ

さはさりながら我々は 清公の奴にこんな目に

遇はされ何うして此儘に 恨み返さでおかれやうか

尻尾の毛迄一本も 無い處迄抜かれたる

チャンキー、モンキーは云ふも更 肝腎要の清公は

肝を抜かれて腰を抜き 悲惨極まる爲體

お互一様に身の上は 氣の毒なりける次第なり

と自暴自棄になりて、出放題を喋り立てて居る。清公も此滑稽な擲揄半分の歌に
痛さを忘れてクツクツ笑ひ出す。

清公 『セイロン島の土籠 黒ん坊人種の成れの果

チャンキーモンキー兩人が 小絲の姫に頼まれて

可愛い妻子を後に置き

お金の欲に目が眩み

義理も人情も打ち忘れ

海洋萬里の浪の上

汗もたらたら漕ぎ廻る

時しもあれや天狗風

魔島に船は打ちあたり

木端微塵となつた時

肝腎要のお客さま

小絲の姫を顧みず

船は無けれど黒い尻

帆をかけ登る岩の上

三年三月も雨風や

天日に曝され泣き面を

乾かし蟹や貝を採り

食つて漸々惜しからぬ

命をながらへ時を待つ

高姫さまや蜈蚣姫の

船が來たのを幸ひに

玉を匿した匿さぬと

やつさもつさの押問答

轉る折しもテンカオの

島は忽ち海底に

沈んだお蔭で魔の神は

浪に吞まれて大勢が

蚊の啼くやうな情けない

聲を絞つて居たところ

玉治別の一行に

安い命を助けられ　　ニュージールランドの玉森で
エツパツパーを喰はされて　　泣く泣く龍宮の一つ島
タカの港に上陸し　　地恩の郷に登りつめ
チャンキーモンキーと呼び捨てに　　皆の奴等に馬鹿にされ
雪隠の中の掃除まで　　やつて居たるを見た俺は
可愛さうだと慈悲心を　　起してタカの港より
黙つて船を拜借し　　鳥無き郷の蝙蝠に
出世をさせようと連れて来て　　働かさうと思つたら
卑怯未練の馬鹿者が　　大蛇の姿に腰抜かし
中にもチャンキーの腰抜けは　　話を聞いて胸慄ひ
脛腰立たぬその態で　　俺に向つて屁理窟を
云ふとは些と兩人の　　見當違ひぢやあるまいか
大馬鹿者の腰抜けが　　二人揃うた岩の上
愚圖々々すると最前の　　大蛇の奴が飛んで来て

今度は深き谷底へ
尻尾の先で振り落し

身を碎かれて冥途行き
三途の川の鬼婆に

何ぢやかんぢやと虐められ
末には血の池針の山

焦熱地獄に墜落し
鬼に喰はれて仕舞ふぞよ

あゝ惟神々々
叶はぬからの神頼み

哀れなりける次第なり
アハ、ハツ八阿呆面

ウフ、フツフ呆つけ者
イヒ、ヒツヒ因果者

オホ、ホツホ大馬鹿よ
エへ、へツへエーやめて置かう

と喋り終つた途端に、清公の腰はヒヨツコリと立つた。續いてチヤンキーの腰も亦立ち上つた。

チヤンキー「ヤア、餘り清公がしようも無い事を云ふものだから、言靈の口罰が當つて、堅磐常磐に鎮座しました石座を離れ、又徐々働かねばならぬやうになつて仕舞つた。……モンキー、貴様は幸福者だ。何處迄も泰然自若として、安樂

に岩の上いは うへに暮くらせる身分みぶんだ。我等われら兩人りやうにんはそろそろ是これから活動くわつどうに這入はいるのだ。何卒どうぞ
貴様きさま、生神様いきがみさまになつて其處そこに胴どうを据すゑ、俺等おれら兩人りやうにんの幸さいはひを守まもつて呉くれ。南無なむモンキー
大明神だいみやうじん、叶かなはぬなら立ち上あがりませだ。アハ、ハ、ハ、
と二人ふたりは面白おもしろさうに足あしが立たつた嬉うれしさに妙めうな手てつきで踊をどつて居ゐる。モンキーは業ごふ
を煮にやし、立たつて見みようと焦あせ慮せれど藻搔もがけど、ビクともしない。たうとう自棄や氣け
味みになつて下くだらぬ歌うたを喋しゃべり始はじめた。

□ 清公きよこうチャンキーよつく聞きけ

俺おれは誠まことの生神いきがみぢや

岩いはに喰くひつき獅し噛がみつき

胴どうは据すわつて動うごかない

ビクとも致いたさぬ大和魂やまとたま

貴様きさまの腰こしは浮うき調子てうし

又々またまた惡魔あくまに導みちびかれ

大蛇をろちの尻尾しつぽに撥はぢかれて

再びふたたび天上てんじやうするがよい

俺おれは貴様きさまの墜落つゐらくを

空そらを仰あふいで待まつて居ゐる

雪せつちんむし隱むし蟲の高上たかあがり

名なは清公きよこうと申まをせども

心こころの色いろは泥公どろこうが

チャンキーチャンキーと偉えらさうに
口くちでは云いへど何なに一つ

チャンキーチャンキーと埒らち明あかぬ
困こまつた奴やつが唯ただ一人ひとり

此世このよの中の穀潰ごくつぶし
娑婆しやばに居をつても用ようはない

俺おれは何なんにも岩いはの神かみ
萬劫まんがふまつだい未代うご動き無なき

下津岩根したついはねに腰据こしすゑて
貴様等きさまら二人ふたりの行末ゆくすゑを

ア—イーウ—エ—オホ、
嘲笑あざわらひつつ見みて暮くらす

四よつ足身魂あしみたまに汚けがされた
碌ろくな事ことせぬ二人ふたり連れ

一日ひとひも速はやく此場このばをば
離はなれて往ゆけよお前達まへたち

愚圖ぐづぐづ々々してると其邊中そこらぢう
空氣くうきの色迄いろまで悪わるくする

あゝ惟神かむながらかむながら々々
目玉めだまの飛とび出でるやうな目めに

遇あはせて下ください三五あななひの
皇大神すめおほかみの御前おんまへに

二人ふたりの爲ために祈いのります
エへ、へツへ得體えたいの知しれぬ

オホ、ホツホ大馬鹿者奴おほばかものめ
カ、カ、カツカ空威張からゑばり

キ、キ、キツキ氣きに喰くはぬ
ク、ク、クツク糞奴くそやつこ

ケ、、ケツケ怪けしからぬ コ、、コツコ困こまり者もの
サ、、サツサ逆さかとんぼ シ、、シツシ強しぶと太やつこい奴やつこ
ス、、スツス好すかん平野郎べいやらう セ、、セツセ雪せんちむし隠し蟲むし
ソ、、ソツソそぐり立たてた タ、、タツタ高たか上あがり
チ、、チツチちんちくりん ツ、、ツツツ聾つんぼ者めくら盲人
テ、、テツテ天狗面てんぐづら ト、、トツト呆とぼけ野郎やらう
ナ、、ナツナ泣なきツ面つら ニ、、ニツニ憎にくまれ子こ
憎にくまれにくまれ世よに霸は張ばる ヌ、、ヌツヌ又しき一しきボ式しき
ネ、、ネツネ鼠ねずみの子こ ノ、、ノツノ野天狗野狐野豆狸のてんぐのぎつねまめだぬき
ハ、、ハツハ薄情者はくじやうもの ヒ、、ヒツヒ非ひじ常やう識しき
フ、、フツフ戲ぶせけた事ことをしやがつて
へ、、へツへ屁理窟へりくつばかり叩たたきよる
ホ、、ホツホほうけ野郎やらう マ、、マツマ曲津御靈まがつみたまの張本ちやうほんよ
ミ、、ミツミ蚯蚓土龍みみづむぐらの土潜つちくぐり

ム、ムツム 蜈蚣むかで姫ひめ臭くさい 婆ばさま 腰こし巾ぎんちや着やく
 メ、メツメ 盲目めくら聾つんぼ者の 腰こし拔ぬけ 野郎やらう
 モ、モツモ 耄碌まろく魂たまの 二人ふたり連づれ
 ヤ、ヤツヤ 奴野郎やつこやらうの
 イ、イツイ 意地いぢくね 悪わるい
 ユ、ユツユ 幽靈いうれい腰
 エ、エツエ えぐたら しい
 ヨ、ヨツヨ 妖魅えうみ面づら提さげて
 ワ、ワツワ 悪わるい 事こと毎まい日にち毎まい夜よ考かんがへよつて
 中ちゆう、一寸いっすん先さきは 暗やみの 夜よだ
 ウ、ウツウ 迂路うろ々ろと 其そこ邊らあ たりを 魔胡まごつき 出いだし
 エ、エツエ 偉えらさうに
 ヲ、ヲツヲ 大失策おほしくじりを 致いたしたる 大馬鹿おほばか者ものの 臆病おくびやう者もの
 ……

大腰拔けの狼野郎、お目出度い變り者だ。サア何處へなりと勝手に往け。その代りに盗んで来た船を元の所へ返して来い。さうで無ければ三五教の宣傳に歩いても亦此通りだ。脛腰が立たぬやうに致してやるぞよ。ウンウンウン
と體を揺り、そろそろ發動し初め、岩の上で餅を搗くやうに體を上げたり下げたり、十數回繰り返し、何時の間にやら抜けた腰はちゃんと元の通りに納まり、そろそろ歩き出した。

清公「ヤア、モンキー、貴様、何時の間に腰が立ったか」

モンキー「俺は初めから、決して貴様等のやうに腰は抜かしては居ないぞ。餘り

偉さうに家來扱ひに致すから、一寸芝居をしてやつたのだ。ウフ、フ、フ、」

と肩を揺る。

チャンキー「アレアレ、追々騒がしく聞えて来る老若男女の叫び聲、こりや斯う

しては居られない。いづれ三人の中一人は船を返しに歸らねばならないが、先づ

神様に御猶豫を願つて、大蛇の征服を濟す事にしようかい」

清公「それもさうだ。餘り大蛇に氣を取られて祝詞奏上を忘れて居た。其罰で腰

が立たなくなつたのだ。……ア、神様、何卒お赦し下さいませ」
と三人は一所に集まり来り、高らかに天津祝詞を奏上し、天の數歌及び宣傳歌を
歌ひクシの瀧壺を目蒐けて進みゆく。

(大正一一・七・八 舊閏五・一四 加藤明子録)

第七章 大蛇解脱(七五三)

清公、チャンキー、モンキーの三人は、酒の瀧壺の前に宣傳歌を歌ひ乍ら進み
寄り見れば、さしもの大蛇も毒酒に酔ひ、死物狂ひにノタ打廻つた揚句、大に疲
勞せしと見え、ガクリと首を曲げ口を噛み締め、殆ど半死半生の姿になつて居た。
飯依彦の末裔飯依別を始め、久々別、久木別の三人の神司は、逃げ散りたる數多
の郷人を呼び集め、各自に竹鎗を持ち、大蛇の身體を鱗と鱗の間より、力限りに
突き刺し、殺さむとする眞最中であつた。飯依別は大蛇の身體に向ひ、

「汝此郷を日夜に荒し、人民の膏血を搾り、あまつさへ我等が妻子を呑み喰ひ、郷人を惱ませし悪神の張本、天は何時迄も汝如き悪神を赦し給はず、忝なくも眞澄姫命の御神徳に依りて、汝を弱らせ退治せむとの我等が計略、よくも斃死つたなア。サア是よりは汝の肉體の命を取り、此郷の惨害を除かむ。汝も定めて天地間の生物、神の御靈を受け居るならむ。必ず吾等が今日の仕打を恨み、靈魂中有に迷ひ、再び此郷に害を加ふ如きことあらば、吾等が祈念の神力にて其靈魂を責め惱め、根底の國へ追ひ遣らむほどに。……サア大蛇、靈肉共に寂滅爲樂、必ず此世に心を残してはならぬぞ」

と大蛇に向つて誅戮の宣示をなし、久々別、久木別兩人が指揮の下に、數多の郷人は聲を揃へて竹鎗をしごき、鱗と鱗の間に、鎗の穂先を差込み「一二三」の掛聲、一時に突込まむと身構へする折しも、宣傳歌の聲と共に現はれたる清公以下の宣傳使、ツカツカと此場へ近寄り、

清公「我は地恩郷に現はれ給ふ龍宮島の女王、黃龍姫様の幕下、清公、チヤンキー、モンキーと申すもの、今木蔭に忍んで承はれば、飯依別以下二柱郷人の害

を除かむとして毒酒の計略にて、此大蛇を誅戮せむとし給ふ其志、實に尤もなれども假令大蛇と雖も天帝の分身分體なれば、易々殺すべからず。先づ第一に言葉を以て之に向ひ、如何にしても歸順せざる時は、各得物を以て、直接行動を開始すべきである。先づ先づ待たせられよ。と制止し大蛇の頭部にヒラリと飛び上り、盛んに宣傳歌を歌ひ始めた。

清公「神が表に現はれて善と悪とを立て別ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直し聞き直し

身の過ちは宣り直す 三五教の神の道

假令大蛇は死するとも 大蛇の靈魂は永久に

此世に残り種々の 悪しき曲行繰返し

恨みを晴らし世を亂し 荒び猛るは目の當り

惡逆無道の曲神も 善の道には敵し得ず

月つきごと毎日ひごと毎この此さと郷に

現あらはれ來きたり諸もろ人ひとを

惱なやまし苦くるしむ此この大を蛇ろち

元もとより惡あしき神かみならず

遠とほき神かみ世よの其その昔むかし

日ひの出で神のかみが現あらはれて

眞ます澄みの姫ひめの國くに魂たまを

大おほ宮みや柱ばしら太ふと知しりて

齋いつき祀まつらせ玉たまひつつ

飯いひ依より彦ひこの命みことをば

神かみの司つかさと定さだめられ

子し々し孫そん々そんにいたる迄まで

祭さい政せい一いつ致ちの道だを

夢ゆめにも忘わすれちやならないと

教をしへ置おかれし言ことの葉はを

郷さと人びとの殘のこらず打うち忘わすれ

利り欲よくの淵ふちに身みを沈しづめ

勝しょう利りの山やまに憧あこ憬がれて

體たい主しゅ靈れい從じゅうの行かう動どうを

益ます々ます盛さに續ぞく行かうし

天てん地ちの神かみの御み怒いかりに

觸ふれて曲まが津かつを自おのら

生うみ出いだしたる郷さとの人ひと

今いま現あらはれし此この大を蛇ろち

皆みな郷さと人びとの魂たまや

心こころの色いろの反はん映えいに

現あらはれ出いでたるものなるぞ

心こころ一ひとつの持もち方かたで

神かみと現あらはれ鬼おにとなり
大蛇をろちとなるも各自めいめいの

言心行げんしんかうの不一ふいつち致ちゆ
生うみ出いだしたるものなるぞ

これの大蛇をろちを竹鎗たけやりの
武器ぶきもて虐むごく殺ころすより

汝なれの心こころの眞底しんそこに
潜ひそめる大蛇をろちを平たひらげて

誠まこと一つの三五あななひの
教をしへの光ひかり眞澄鏡ますかがみ

照てらして見みよや曲靈まがたまの
醜しこの肉體すみかも忽たちまちに

跡形あとかたも無なく消きえ行ゆきて
鬼おにも大蛇をろちも影かげもなく

誠まことの道みちの御惠みめぐみに
靡なびき伏ふすらむ郷人さとびとよ

かかろ大蛇をろちの現あらはれし
其源そのなもとを尋たづぬれば

紛まがふ方かたなき郷人さとびとの
心こころの過あやまちある故ゆゑぞ

大蛇をろちよ大蛇をろちよ曲神まがかみよ
汝なれに誠まことの魂たまあらば

我言靈わがことたまを謹聽きんちやうし
【うまら】に【つばら】に汲くみ分わけて

怪けしき賤いやしき此姿このすがた
行衛ゆくゑも更さらに白雲しらくもの

消きえて跡あとなき天津空あまつそら
清きよく正ただしく澄すみ渡わたる

目出度き御代に逢ふならむ あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして 昔の神の傳へたる

三五教の御教を 日日毎日繰返し

思ひ出して神界の 御用に立てよ郷人よ

神の守らす世の中は いかで惡魔の蔓こらむ

惡魔は心に潛むなり 一日も早く大神の

嚴の言靈經となし 身の行ひを緯として

天と地との其中に 人と生れし功績を

誠一つに立て直し 正しき神となり變り

五六七の御代を造れかし キリストメシヤの再臨も

五六七出生の曉も 甘露臺の瑞祥も

蓮華臺上の御神樂も 神國魂其ものの

いづれ變らぬ一つ物 狭き心を振り捨てて

三五教の神の道 思ひ浮べて行へよ

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましませよみたまさちはへ

の宣り終るや、今迄長大なる姿を現はしたる大蛇も、次第々々に縮小し、遂にはすがた、あら、をろち、しだいしだい、しゆくせう、つい、は、ちひ、へびとなりて、清公が足許を嬉し氣に這ひ廻る。清公は尚も天津祝詞を奏上し此蛇に向つて鎮魂を修し、このへび、むか、ちんこん、しう、

汝再び此郷に現はれ、かかる惡逆無道を繰返す勿れ。又郷人も今迄の心を根底より立直し、日の出神の教へ置かれし三五教を信じ、眞澄姫命の神靈に拜謝せばなんぢ、このさと、あら、あくぎやくぶだう、くりかへ、なか、またさとびと、いままで、こころ、こんてい、たてなほ、ひ、でのかみ、をし、お、あななひけう、しん、ますみひめのみこと、しんれい、はいしや、なんぢら、しんちう、ひそ、おに、をろち、たちま、すがた、かく、けむり、き、う、せむ、の、をは、いひよりわけ、くきわけ、くくわけ、かむつかさ、はじめ、さとびと、いちどう、きよこう、まへ、へい、と、宣、べ、終、る、や、飯、依、別、久、木、別、久、々、別、の、神、司、を、始、め、郷、人、一、同、は、清、公、が、前、に、平、伏、し、今、迄、の、不、信、仰、の、罪、を、悔、い、再、び、大、神、の、珍、の、御、子、と、な、ら、む、こ、と、を、祈、る、清、公、は、、

地恩郷に三五教の梅子姫、黄龍姫の現はれ給ひて神徳四方に輝きあれば、此郷の害悪を洗ひ清められし謝恩の爲めに、打揃ひ参拜す可しちおんきやう、あななひけう、うめこひめ、わつりようひめ、あら、たま、しんとく、よも、かがや、このさと、の、害、悪、を、洗、ひ、清、め、ら、れ、し、謝、恩、の、爲、め、に、打、揃、ひ、参、拜、す、可、し、と、命、ず、れ、ば、飯、依、別、を、始、め、一、同、は、一、も、二、も、な、く、此、説、に、服、し、モ、ン、キ、ー、を、案、内、者

として地恩郷に參拜することとなつた。

幾十の船を海面に浮べてヒルの港を漕ぎ出した。船中は神徳の話で持切りながら、清公一同が乗り來たりし船をも從へて、夕力の港へ上陸し、參詣する事となつた。此時神命に依つて清公の乗り來りし船は、元の所に歸され、其持主を求めて色々ヒルの郷の珍しき物を與へ、厚く謝辭を述べた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・七・八 舊閏五・一四 谷村眞友録)

第八章 奇の巖窟〔七五四〕

清公はチャンキーと共にクシの瀧壺の傍に俄造りの庵を結び、日夜に天津祝詞を奏上し、側の谷川に身を淨め、一月ばかり此處に滞在する事となつた。

モンキーに導かれて地恩城に參上りたる飯依別其他の一同は、無事參拜を終へて再びヒルの郷に歸り來り、クシの瀧壺に參上りて清公に厚く感謝し、それより

國魂くにたまの宮みやの修繕しうぜんを行おこなひ、恭敬きやうけい禮拜らいはい怠おこたらず、遂つひにヒルの郷さとは黒雲こくうん妖邪えうじやの氣き、全まったく霽はれて再ふたび元もとの樂園らくえんとなり、飯いひ依より別わけは祖先そせんの業げふを大たい切せつに、心しん身しんを清きよめて晝ちう夜や懈か怠たいなく眞澄ますみの宮みやに奉仕ほうしする事こととなつた。

モンキーは郷人さとびとと共に、再ふたび此地ここに現あらは來きたり、地恩城ちおんじやうに於おけるスマートボールの傳言でんごんを清公きよこう、チヤンキーに傳つたへた。二人ふたりはスマートボールの親切しんせつに感謝かんしゃし、郷人さとの乞こひを容いれてアイルアイル（愛藏あいざう）、テーナテーナ（貞七ていしち）の二人ふたりを供人ともびととなし、セーラ山さんを攀登よぢのぼり、數多あまたの人々ひとびとを始はじめ大蛇おほくま其他そのたの惡魔あくまを神かみの道みちに言靈ことたまもて救すくはむと、炎天えんてんの山道やまみちを危きけん險けんを冒をかして、一行いつかう五人ごにん進すすみ行ゆく。

芭蕉ばせうの實みを時々ときどき採とつて飢うゑを凌しのぎ乍ながら、連日れんじつ連夜れんや、苔こけの褥しとねに岩枕いはまくら、星ほしの蒲團ふとんを被かぶりて夜よを明あかしつつ、終つひに稍平坦ややへいたんなる玉野たまのヶ原がはらと云いふ、黄金こがねの砂すなの大だい地ち一いち面めんに敷しき詰つめられたる如ごとき、氣分きぶん良よき地ち點てんに進すすむ事ことを得えた。

足あしも焼やきつく様やうな砂金しゃきんの原はらを一いつ行かう五人ごにんは木蔭こかげを求もとめ汗あせを拭ふきつつ進すすみ行ゆく。遙はるかの前ぜん方ほうより幾百いくひやくとも限かぎりなき猛獸まうじうの群むれ、百雷ひやくらいの轟とどろく如ごとき咆哮うなりを立て、此方こなたに向むかつて突進とつしんし來きたる。清公きよこうは此一隊このいつたいに向むかつて天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし言向ことむけ和やはさむと兩手もろてを組く

み、……高天……と言はむとすれど一二言發せしのみ、舌硬ばり言靈を使用する
事の不可能なるを感じ、稍不安の念につつまれてゐる。怪しき猛獸の影は、おひ
おひと近付き來り、その足音さへも耳に入る様になつた。一行五人は生きたる心
地もなく、心の裡にて一生懸命に暗祈黙禱する折しも、忽然として一柱の白狐、
五人が前に現はれ、前脚を上げて招き乍ら森林の方に進み行く。五人は其後に從
ひ、漸くにして一つの細長き岩窟に導かれ、天の與へと喜び勇み、窟内に残らず
姿を隠し、坑口に向つて兩手を合せ、神恩を感謝する折しも、以前の唸り聲は刻々
と迫り來り、猛獸の足音幾百ともなく聞えて、長き白毛を頭部と顔部に生じたる
巨大なる狒々、眞赤な顔にて穴の口を覗き唸つて居る。其聲の凄じさ、身も竦む
計りである。されど白狐出現に力を得たる清公始め五人は、茲に初めて言靈の使
用を神界より赦されたりと見え、喉元より綱を以て聲の玉を引出す如き心地して、
スラスラと涼しく潔く天津祝詞を宣り始めた。
坑口を覗き居たりし大怪物は、此聲に驚き消え去るかと思ひきや、それと反對
に坑内深く進み來る嫌らしさ。五人は祝詞を奏上し乍ら、此岩穴の終點迄逃げて

行く。異様の怪物は益々迫り来る。一方口の逃げ道なき此穴に徳利攻めに遭うた一行は、決心の臍を固めて天の數歌を汗タラタラと流し乍ら奏上して居る。怪物は清公の前に近寄り來り、毛だらけの手を差し出し清公に握手を求めた。清公は恐々ながら其手を差し出す。怪物は感謝の表情を示し、「ウーウー」と唸り乍ら、手を引いて坑口さして出でて行く。清公は半ば危み乍ら、怪物の強き手に握られるたる腕を振り放すだけの力も無く片手に四人の男を手招きし乍ら、前を向き後を顧みなどして、到頭坑外に引出されて仕舞つた。坑外に出でて見れば、猛獸に非ずして、狒々、猩々の一隊、此岩坑の前に兩手を合せ呼吸を揃へて、「ウワアウワア」と唸る聲、天地も揺ぐばかりなり。

勝れて身體長大なる全身白毛の猩猩は、奈良の大佛の坐つた如く左の手を膝に置き、右の手にて中空を指さし、ニコニコと笑を湛へ五人を睥睨して居る。清公以下五人聲を揃へて天津祝詞を一生懸命に奏上するや、祝詞につれて數百の狒々猩猩は手拍子、足拍子を揃へ、面白げに踊り狂ふ。

此中の頭目と見えし大狒々はツト座を起ち、清公の一行に向つて、口より霧を

白煙はくえんの如ごとく濛々もうもうと吹き出し全身ぜんしんを包つつむ。五人ごにんは白煙はくえんに包つつまれ稍やや不安ふあんの念ねんに驅かられ、
聲こゑを限かぎりに天あまの數歌かずうたを唱となへ出だす。大狒々だいひひの口くちよりは亦またもや猛烈まうれつなる焰ほのほを吹ふき出だし、
五人ごにんを一度いちどに焼やき盡つくさむとする其熱そのあつさ苦くるしさ。一同いちどうは撓たゆまず屈くつせず生命いのち限かぎり連續れんぞく
して奏上そうじやうする。續つづいて大狒々だいひひの口くちより冷つめたき瀧水たきみづを吐はき出だし、一同いちどうの身體からだを川溺かははま
りの如ごとく濕うるほし、五人ごにんは寒さむさに顫ふるへる迄までに水みづに浸ひたされ乍ながら聲こゑを限かぎりに神言かみごとを奏上そうじやう
し、最早息もはやいきも絶きれむと思おもふ途端とたんに天地てんちも割わるる許ばかりの音響おんきやう聞きえ、さしも熱帶ねつたいの大
樹じゆも根底ねそこより吹ふき飛とばさむ許ばかりの烈風れつふう吹ふき來きたると見みる間まに、大狒々だいひひの姿すがたは巨大きよだいな
る白玉はくぎよくとなり、其他そのた數百すうひやくの狒々ひひは、各大小無數おのおのたいせうむすうの玉たまと變へんじ、風かせの隨々まにまに中空ちうくうに舞まひ
上あがり其姿そのすがたを隱かくしける。忽たちまちにして怪あやしき音響おんきやうはピタリと止とまり風かせは俄にはかに靜しづまりて
岩坑いはあなの邊あたりには得えも言いはれぬ芳香ほうかう薰くんじ、微妙びめうの音樂おんがく聞きえて尾をの上へを渡わたる松風まつかせの音おと、
殊更ことさらに涼すずしき感かんを一同いちどうの胸むねに與あたへたり。
是これより五人ごにんは心魂しんこん頓とみに清きよまり、夜よを日ひについで奥おくへ奥おくへと進すすみ行ゆき、終つひにスワ
の湖みづうみの邊ほとりなる龍神りうじんの宮みやの祠ほこらに無事ぶじ到着たうちやくし、例れいの如ごとく祝詞のりとを奏上そうじやうし、息いきを休やすめ、其
夜よは此祠このほこらの前まへに明あかす事こととはなりぬ。

(大正一一・七・八 舊閏五・一四 北村隆光録)

第三篇 龍の宮居

第九章 信仰の實〔七五五〕

あななひけつ 三五教の太柱 變性男子の系統を
ゆいつ 唯一の頼みと經緯に 我儘氣儘を振舞ひし
てんぐ 天狗の鼻の高姫が 部下と仕へし清公の
さもりのかみ 左守神と現はれて 鰻上りに上り詰め

戀こひの瀬川せがはの宇豆姫うづひめを 妻つまとなさむと企たくみ居ゐし

カラクリがらりと相外あいはづれ 地恩ちおんの城しろの頂上ちやうじやうより

大地だいちに急轉きふてん直下ちよくかせし 名譽めいよを元もとに返かへさむと

執着しふちやくしん心のほとぼりに 胸むねを焦こがして清公きよこうが

チヤンキーモンキー二人ふたりづ連れ 夕力ゆかりの港みなとを立出たちいでて

屋根たな無し船ふねに身みを任せ 心こころに荒波あらなみ立たて乍ながら

暗やみに紛まぎれて和田わだの原はら 誠明まことあかし石いしのヒル港みなと

誠まこと魔言まことの取違とりちがひ 日ひの出神でのかみの其昔そのむかし

現あらはれませる山奥やまおくの 酒さけの泉いづみの湧わき出でたる

其瀧壺そのたきつぼに現あらはれて 大蛇をろちの荒すさびを眺ながめてゆ

轉迷てんめい開悟かいごの花咲はなさかせ 生うまれ赤子あかこと蘇生よみがへり

ヒルの郷人さとびと二人ふたりまで 旅たびの御供みともと定さだめつつ

セーラン山ざんの山續やまつづき 深ふかき谷間たにまを打涉うちわたり

虎狼とらおほかみや鬼大蛇おにをろち 狒々ひひ猩々しやうじやうの集あつまれる

魔窟ヶ原を宣傳歌

歌ひ乍らに進み行く

石の枕に雲の屋根

露の褥も數越えて

心も光る玉野原

天空海闊限りなき

金砂銀砂を布き詰めし

諏訪の里にと着きにける

木の花姫の御化身

巨大の狒々に村肝の

心の玉を洗はれて

一行五人天地の

神の恵を覺りつつ

心も勇み身も輕う

紺青の波を湛へたる

玉依姫の永遠に

隠れ玉ひし諏訪の湖

五つの御玉の底深く

納まる龍宮の岸の邊に

心洗ひし清公が

チヤンキーモンキー始めとし　アイル、テーナの五柱

祠の前に着きにける

頃しもあれや天上に

黒雲忽ち顯現し

見る見る四方に擴大し

満天墨を流すごと

黑白も分かずなりにける

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましましてみたまさち

心の雲霧吹き拂ひこころ くもきり ふう ばら

天津御空も國土もあまつ みそら くにつち

清く涼しく天津日のきよ すず あまつ ひ

輝き玉ふ清明のかがや たま せいめい

天地に還し玉はれとてんち かへ たま

五つの口に宣る祝詞いつ のくち ののり

聲も涼しく唱ふればこゑ すず とな

あゝ訝かしや黒雲のいぶ くるくも

中より出でし一塊のなか い いくわい

火光は忽ち目の前にくわくわう たちまめ まへ

雷鳴の如き音響といかづち ごと おんきやう

共に轟然落下してとも がうぜんらくか

一度に開く木の花のいちど ひら こ はな

四方に散るよと見る間によも ち みる うち

さしも暗黒に包まれしあんこく つつ

六合忽ち朝日子のりくがふたちま あさひこ

伊照り輝く世となりぬい てる かがや よ

五人は我に立返りごにん われ たちかへ

諏訪の湖面を見渡せばす は こめん みわた

紺青の波キラキラとこんじやう なみ

魚鱗の如く日光にぎよりん ごと につくわう

輝き閃く崇高さよかがや ひらめ けだか

遙に向方の島影ゆはるか むかふ しまかげ

現はれ出でたる純白のあら い じゆんぱく

眞帆や片帆の數多くまほ かたほ かずおほ

此方に向つて進み來るこなた むか すす くる

其光景は春の野の
青野ヶ原に蝶々の

花に戯れ翩翩と
舞ひ狂ひたる如くなり

此世を造りし神直日
心も廣き大直日

唯何事も人の世は
直日に見直し聞直し

身の過ちは宣り直す
三五教の神の道

鬼も大蛇も曲津靈も
我の身魂を外にして

神の造りしうまし世に
影も形も白煙

消ゆる思ひに充たされて
天地萬有自ら

至善至美なる神の世と
變りし如き心地しつ

五人は衣服を脱ぎ捨てて
湖水の中に一時に

ザンブと計り飛び込めば
姿は忽ち水底に

消えて跡なき泡沫の
夢か現か幻か

神ならぬ身の如何にして
知る由もなき御經綸

仰ぐも高し久方の
神の心の萬分一

龍宮海の底の底

深き仕組の玉手箱

開いて述ぶる物語

龍宮館の教主殿

奥の一間に瑞月が

心天高く日を照らし

心の海に三五の

眞如の月を浮べつつ

御國を思ふ眞心を

雲【井上】に【留五郎】

神の大道を【亮】めて

世人導く神界の

鑑を照らす【眞澄】空

唯一言も漏らさじと

鉛筆尖らし【松村】が

心を籠めて記し行く

引きて歸らぬ桑の弓

桑の机にもたれつつ

無盡意菩薩を傍らに

侍らし誠を述べ立つる

愈茲に五五の巻

稍半迄書きしるす

神の出口の因縁を

開く常磐の松風に

身も魂も清々と

語り行くこそ芽出度けれ

清公ほか四人は諏訪の湖の畔の小さき祠の前に端坐し、天津祝詞を奏上し、數
歌を歌ひあげ、終つて紺青の波漂へる諏訪の湖の岸邊に立ち、際限もなき廣き湖
面を崇高の氣に打たれて眺め入つた。忽ち心機一轉して、天國よりも清く美はし
き感想に打たれ、一同は期せずして、衣類を脱ぎ、湖中に向つてザンブと許り、
何氣なく飛び込んで了つた。千尋の深き水底と思ひきや水溜りは思つたよりも淺
く、七尺乃至八尺の肉體の、淺きは臍あたり迄、深きは首のあたりまで位よりな
かつたのに、再び驚き乍ら神言を奏上しつ、波を押し分けて北へ北へと進み行
く。

摺鉢の様になつた湖底に足を迤らせ、茲に五人は一時に水底深く落ち込み、一
旦は人事不省の厄に會つた。折柄浮かび來る金銀を鑲めて造りたる神船に救ひ上
げられ、北へ北へと運ばれた。

湖中に浮かべる夫婦島の一角に救ひ上げられ、五人の肉體は其儘自然に氣の附
く迄棄て置かれたのである。酷熱の太陽は焦げつく如く、赫々と照り輝けども、

老樹鬱蒼として天を封じたる此浮島は、涼風颯々として徐に吹き來り、夏の暑さを少しも感じなかつた。此島には大小無數の金銀の蛇空地なき迄に遊び戯れて居る。五人は金銀の蛇、疊の目の如く地上を包んで居る其上に救ひ上げられ、暫くは何も知らずに、睡眠を恣にして居た。

清公は稍太き金色の蛇に、口をポカンと開けて居た其隙間より這ひ込まれ、胸苦しさに目を醒まし、「キヤツ キヤツ」と叫んだ聲に驚いて、チャンキー、モンキー、アイル、テナの四人は始めて氣が付き、附近を見れば金銀の索麵を敷いた如く、億兆無數の蛇樹上にも樹下にも、木の幹にまで一面に包んで居る。清公の口には金色の太き蛇、七八分まで口より這ひ込み、僅に七八寸許り尻尾の先を餘し、尾は前後左右にプリンプリンと活動し、尾の先にて耳の穴、鼻の穴、目などを無性矢鱈に掃除して居る。チャンキーは其尾を掴み蛇を引出し、清公を助けむと猿臂を伸ばして尾を掴んだ途端に、ビンと撥ねられて、隣の島に投げ送られた。

一方の島には金銀の蜈蚣數限りもなく、蓆を布いた如く、澤山の足をチャンと

揃へて、地上を包んで居る。樹上にも木の幹にも金銀色の蜈蚣、空地もなく巻きついて居た。見る見る二三尺の長き蜈蚣は、ゾロゾロとチャンキーの身體に這ひ上がり、空地なく身體を包んだ。されど不思議にも少しの痛みも苦みも感ぜず、唯少し許りこそばゆい感じがしだし、蜈蚣の足や舌を以て體を舐め始め出すに従れ、こそばゆさは益々其度を増し、遂には笑ひ止まず、腹を抱へて蜈蚣原に七轉八倒するに至つた。此島を女島と云ふ。一方の清公が金色の蛇を呑んだ島を男島と云ふ。

清公は俄に身體黄金色と變じ、兩眼より金剛石の如き光を放ち、口をもがもがと動かせ乍ら、何か言はむとするものの如く、七八寸口から出て居た尻尾は、何時の間にか腹中深く納まつて了つた。清公は顔色輝き、層一層莊嚴の度を加へ、身長も一尺計り高く延び、體の總體其太さを増して來た。物をも言はず清公はアイルの首筋をグツと掴み、女島に向つて猫の兒を投げる様に手もなく投げ移した。チャンキーが俯むいて笑つて居る背中の上に、フワリと馬に乗つた様に落ちて來た。蜈蚣は忽ちアイルの全身を包んだ。アイルも亦俄に際限もなく笑ひ出した。

見る間に蜈蚣は體一面に焦げつく様になつて、兩人の體は全身蜈蚣の斑紋に包まれて了つた。チャンキーは始めて口を開け、

「あゝ地恩城の蜈蚣姫の代りに蜈蚣彦が兩人揃うた。……オイ、アイルさま、斯う體が蜈蚣に變化した以上は、モウ仕方がない。一生此島の守護神となつて暮らせと云ふ神様の思召しかも知れないよ。併し乍ら、昔諾册二尊が自轉倒島へ御降りになつた時には、陰陽揃うて夫婦の契を結び、山、川、草、木をお産みになつたのだが、我々は男ばかりだから國生みもする譯には行かず、つまり態よい島流しになつたのではあるまいかなア」

アイル「サア何だか知らぬが、何とも言へぬ好い氣分ぢやないか。何れどちらかが女になるのかも知れないよ。併し此島は女島と云ふからは、二人乍ら女にならうも知れぬ。さうすれば尚々妙な事になつて了ふ。併し何時も俺は女に何故生れて來なんだかと始終小言を言つて居つたから、言靈の幸はふ國だと云ふからは、御注文通り女に變化するかも知れぬ。さうすれば所謂平和の女神となつて、お前はチャンキー、俺はアイル、アイルチャンキーの女神として後世に謠はれるやう

になるかも知れないよ」

「アイルテナーの女神と言へば昔から聞いてるがなア」

「それなら男島に残ってる奴と俺と合せばアイルテナーだ」

「俺も今日限りアイルテナーと云ふ名を返上して、アポールと云ふ名に改名しよう。」

アポールの女神は、所謂アテナーの又の御名だ」

斯く話す折しも又もや、清公に掴まれて投げ送られたテナーは、二人の前に空を切つて降つて来た。

「アイルテナー、……此奴ア不思議」

とソロソロ地金を現はし、洒落気分になつて無駄口を叩きかけた。テナーはものを言はず俯むいて、膝頭を打つたと見え顔を顰め乍ら撫でて居る。蜈蚣はそろそろテナーの全身を包んだ。テナーは向脛を打つた時の様に痛さうなこそばゆさうな、痛さと「こそば」ゆさが一つになつた様な聲で、泣きと笑ひの中間的聲を出して「キューキュー」と脇のあたりを鳴らして居る。

男島に於けるモンキーは、

「モシモシ清公大明神、お前は金龍の化神となつて了ひ、三人の奴まで皆金銀の蜈蚣の衣服を着て、平和の女神だとか何とか威張つて居るが、此モンキー一人はどうして下さるのだ。始めの間は蛇や蜈蚣を見てゾツとし、罪の重い奴が斯んな所へ来たものだから、蛇や蜈蚣に責められて苦しむのだと思ひ、アア俺丈はヤツパリ盗んで来た船を返しに往つた正直者の發頭人だから、蛇も蜈蚣も如何ともする事が出来ないのだと、稍得意氣分になつて居た。が併し乍ら、誰も彼も金銀の體になり、餘り苦痛さうにもないのを見ると、何とはなしに、自分も羨りくなり當然の肉體が却て罪の塊の様な感じが致しますワ。一體何方が善ですか。萬一四人の者、神の冥罰に觸れて斯んな態になつたのなら、我々は友人の爲に充分の謝罪を神界へ致さねばならず、又四人が神徳を蒙りて出世をしたのなら、我々も同じく出世をする様に願つて頂かねばなりません。善惡不二と云ふ事は豫て聞いて居りました。併し乍ら神が表に現はれて、善と惡とを立分けると云ふ以上は、今立て分けられた五人は、どちらが善か惡か、どうぞ聞かして下さいませ」

と一生懸命に手を合せ、清公の前に平伏して頼み入る。清公は口をへの字に結び、目計りギロギロさせ乍ら一言も答へず時々二つの鼻の穴から、フウフウと荒い息を吹き出すのみである。モンキーの傍二尺許りの四方は、何故か、金銀の蛇近寄り来らず。斯うなるとモンキーも神に嫌はれて居るのか、好かれて居るのか、少しも合點がゆかぬ。已むを得ず稍自棄氣味になつて、島中を歩行き始めた。蛇は先を争うて、モンキーに踏まれまじと慌ただしく路を開く其怪しさ。

一時許り島を彼方此方と金銀の蛇を驚かせ乍ら、或る美はしき金色燦爛たる苔の生えた岩の側に辿りつき、恰好の休息所と岩上に身を横たへ、頼杖を突き、思案に暮れて獨言を言つて居る。

モンキー「あゝサツパリ善悪不可解だ、鬼も大蛇も悪魔も、すべて自分である。自分を離れて極樂もなければ地獄もなし、又神もなければ鬼もない……と酒の瀧壺の大蛇に向つて清公が宣傳歌を歌つた時、大蛇は忽ち小さくなつて消えて了つた。さうすれば尚々合點のゆかぬは此島へ来てからの出来事だ。清公始め其他の連中は残らず、金銀の蛇や蜈蚣に全身を取巻かれ、神に救はれたのか、棄て

られたのか、チツとも譯が分らなくなつて了つた。さうして我々の身邊には蛇も蜈蚣も近寄らず疥癬患者が來た様に、皆吃驚したやうな調子で路を開けて呉れよる。考へれば考へる程、俺の精神が神の御心に叶うて居るのか、或は四人の連中の方が良いのか、どうしても合點がゆかない。我輩に神徳が有つて蛇や蜈蚣が恐れて逃げるのか、或は威勢に恐れて避けて居るのか、此奴も一つ考へ物だ。諸善龍宮に入り玉ふと云ふ以上は、此龍宮島に惡神は一柱も無い筈、假令金銀の色をして居つても、蛇に蜈蚣と云ふ奴、餘り氣分の良いものだない。併し此島の蛇も蜈蚣も惡魔の様な感じもせぬ。惡魔でなければ諸善神の化身であらう、此點が一向合點の行かぬ所だ。清公だとして餘り神様に好かれる様な至善至美の人間でもなし、又俺だとして神様が恐れて逃げなざる様な御神徳があらう筈もなし、又蛇が惡魔であるとするれば、我々の神徳に恐れて逃げる様な蛇には力も徳もないのだ。ヤツパリ龍宮は龍宮式だ。薩張五里霧中に彷徨して、見當の取れぬ仕組の實地を見せて貰うたのだらうか。あゝ如何したら此解決が附くだらう。初の間は金銀の蛇、一二尺づつ遠慮した様に先を争うて逃げて居よつたが、何時の間にか見渡す限り、

俺の周囲には、一匹の蛇も居なくなつて了つた。蛇に好かれるのも餘り氣分の良
い話ではないが、此通り敬遠主義を執られるのも、何だか面白くない様な氣分が
する。あゝ到底人間の理智では解るものでない。先づ神様に天津祝詞を奏上し、
悠くりと心を落着けて、鎮魂三昧に入つたならば、何とか此解決がつくであらう。
あゝ惟神靈幸倍坐世
と、拍手をなし、祝詞を、聲限り奏上し終つて、又もや岩上に端坐し、腕を組み
考へ込んだ。

モンキーは岩上に雙手を組み、首を垂れ、善惡の解決に心身を傾注する時しも
あれ、美妙の音楽眼下に聞ゆるに驚き、目を開いて眺むれば、金銀珠玉を以て包
まれたる、嚴はしき漆塗の船に、得も言はれぬ崇高なる女神舵を操り、清公、チ
ヤンキー、アイル、テーナの四人、赤裸の筈の男が、何とも知れぬ麗しき薄衣を
身に着け、身體は水晶の如く透明に清まり、各自に横笛、笙、「ひちりき」を吹
き、美はしき纓絡の附いた冠を頭に戴き、愉快氣に波面を進み行く光景が、パイ
ンの繁みを透かしてアリアリと現はれた。モンキーは思はず「アツ」と叫んだ。

四人は金扇を擴げ、モンキーに向つて『早く來れ』と差招き乍ら、微妙の音樂の聲諸共に、紺青の波の上を悠々として彼方の島影に姿を隠しける。

モンキーは太息を吐き乍ら、我身を振り顧れば、赤銅の様な黒赤い肌毛をボウボウと生やし、得も言はれぬ汗臭い、厭な臭氣が放出して、我と我が鼻をつく。

『あゝヤツパリ俺の方が間違つて居たのかい。こりやモ一つ考へ直さなくちやなるまいぞ』

と岩を離れて磯端に走り寄り、全身を清め、再び磯端に端坐して瞑想到に耽りゐる。涼風颯々と面を吹くさま、得も言はれぬ氣分となつて來た。向ふの島影を見れば、金沙青松繪の如く展開し、名も知れぬ羽毛の麗しき鳥、迦陵頻伽か孔雀か鶴か、確とは分らねど、長閑な聲を放ちて天國の春を歌ふものの如く感じられた。金銀珠玉を鏤めたる白帆をかけた神船は或は一つ、或は三つと、時々刻々に眼下の波面を過ぎ行く。されどモンキーの方には一瞥もくれず、素知らぬ顔して進む行く船のみである。モンキーは益々合點ゆかず、心中稍不安を感じて恨めしげに、

四人の船の姿の隠れた方面の空を眺めて佇み居る。

忽ち足許の水面より緑毛の龜、忽然として浮び出で、見る間に島へ駆け上り、

一生懸命に走り出せば、モンキーは其龜の後に従いてスタスタと走り行く。龜は

益々速力を速め遂には大木の幹に掻きつき二三間計り攀つた所で、如何した機み

か、手を放し大地に顛倒した。モンキーも龜に添うて大木に駆け登つた。龜が落

ちたのを見て、自分も亦手を放し、地上に顛落し、強たか頭を打ち「惟神靈幸倍

坐世」と云ひつつ、手の掌にて息を吹きかけ、創所を二三回撫でまはせば、痛み

は頓に止まりぬ。龜は腹を上にし、四つの足で空を掻いて藻掻いて居る。之を見

たモンキーは、又もや地上に背を付け、手足を上げて空を掻き、龜の眞似をして

居る。龜はカタリと音をさせて起き上り、亦もやノタノタと反對の方面に走り出

す。モンキーも同じくクレリと體をかはし、音がせぬので口で「カタリ」と云ひ

乍ら龜の後に引添うて、今度は四這になつて従いて行く。

龜は矢庭に湖面に向つてドボンと飛び込むを見て、モンキーも亦四這のまま、

湖水の中にドボンと飛び込み見れば、龜は頭をあげて悠々と水面を泳いで居る。

モンキーは亦龜の後に従いて首をあげた儘に泳いで行く。手足は倦くなり、最早此上十間たりとて泳げなくなつて了つた。龜はモンキーの追ひ付き来るを待つもの如く、ポカンと浮いたまま、首を伸ばして後を振りかへつて居る。モンキーは其間に龜に追付き、甲の兩側に兩手をかくれば、龜は水中深く潜り出した。死物狂ひになつて兩手を甲に掛けた儘水底に續いて行く。

フト目を開き見れば、自分の體は龜と共に、女島の磯端に上つて居た。金銀色の蜈蚣の一面に竝んで居る其上を、龜は容赦なく這ひ乍ら、島山の頂を目蒐けて進み行く。數多の蜈蚣は、今度は蛇の様に避けず、足許をウザウザさせ龜の後に、一生懸命に追うて行く。

龜は又もや大樹の枝に登つて了つた。モンキーも亦大樹の枝へ龜の後に添うて登りついた。眼下の水面を見渡せば、霞む許りに高き島山の頂上の大木の梢から水面を見た事とて非常に恐ろしい。龜は亦もや水面を目蒐けて、首をすくめ乍ら落ち込んだ。モンキーは死物狂になりて水面を目蒐け、身を躍らし、頭を下にしたまま、飛び込んで了つたと思つてハツと氣が付けば、モンキーは金色の龜の甲

に跨がり、紺碧の湖面を、悠々として泳いで居た。龜は何時しか容積を増し船の如く大きくなり、知らぬ間に金銀珠玉を鑲めた目無堅間の神船になつて居る。船は艚を漕ぐ人も無きに、自然に動き出し、四人が進んだ方面を指して迂つて行く。モンキーは始めて悟つた。

モンキー「あゝ何事も一切萬事、神に任せば良いのだ。郷に入つては郷に従へと云ふ事がある。蛇の島へ來れば蛇と一つの心になり、蜈蚣の島へ來れば蜈蚣の心になつて濟度をしてやらねばならぬ。蛇を呑んでも構はぬ、體を巻きつけられても、救ひの爲には厭ふ所でない。蜈蚣が我々の肉體を嘗めたがつて居るならば、何程厭らしくても舐めさしてやるのが神の慈悲だ。神心だ。我々は理智に長けて、神の慈悲心を輕んじて居た。最早斯うなる以上は、何事も神様のままに、お任せするが安全だ。……惟神靈幸倍坐世……と口任せの様に唱へて居たが、今迄は何事も頭腦で判断をし青人草倣ひの行ひをやつて居たのが誤りだ。あゝ神様有難う御座います。どうぞ清公其他の一行に、一時も早く面會の出來ます様、御取計らひ下さいませ。モウ此上は一切萬事、貴神にお任せ致します」

と悔悟くわいごの涙なみだをしぼり、湖面こめんに向つて合掌がっしやうし天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうして居ゐる。

何處いづくよりともなく、以前いぜんの如ごとき美妙びめうの音樂おんがく聞え來きたり、麝香じやかうの如ごとき風湖面かぜこめんを吹ふいて、其身そのみは忽たちまち薄物うすものの綾錦あやにしきに包つつまれ、天上てんじやうを行ゆく如ごとき爽快さうくわいなる氣分きぶんに酔よはされて居ゐた。

あゝ惟かむながら神靈たま幸ちは倍へ坐ま世せ。

(大正一一・七・一〇 舊閏五・一六 松村眞澄録)

第一〇章 開悟かいごの花はな〔七五六〕

心こころの色いろも清公きよこうが チヤンキー (長吉) モンキー (茂吉) 始はじめとし

アイル、テーナの五人ごにん連づれ 黄金花こがねはな咲はなく海中わたなかの

龍宮島りうぐうじまの中心地ちうしんち 玉野たまのヶ原がはらを打うち渡わたり

酷暑こくしよの光ひかり受け乍なら

涼風すずかぜ香かる諏訪すはの湖うみ

祠ほこらの前まへに端坐たんざして

天津あまつ祝詞のりとを奏上そつじやうし

浮世うきよの衣きぬを脱ぬぎ捨すてつ

生うまれ赤子あかこの眞裸まつばだか體

後あとをも先さきをも【みづ】

御靈みたま 五いつの御靈みたまは諸もろ共ともに

身みを躍をどらして飛とび込こめば

千尋ちひろの底そこより猶なほ深ふかき

罪つみの凝固ぎようこの清公きよこうを

先頭せんとうに立たてて各自めいめいは

歩あゆむに連つれて摺鉢すりばちの

深ふかき水底みそこに身みを沈しづめ

一いち度は息いきも絶きれたるが

金銀珠玉きんぎんしゆぎよくを鏤ちりばめし

目無堅間めなしかたまの神船しんせんに

棹ささし來きたる神人しんじんに

救すくひ上げられ常磐木ときはぎの

天てんを封ふうじて立たち竝ならぶ

雄島をしまの岸きしに救すくはれぬ

抑そも此島ここは龍宮りうぐうの

神かみに仕つかふる百神ももがみの

金きんと銀ぎんとの蛇じやと變へんじ

或あるは蜈蚣むかでと化なり變かはり

澆季げうき末法まつぽふの世よの中なかを

救すくひ助たすけて神かみの代かはを

建たてむが爲ために朝夕あさゆふに

三寒三熱限りなき

苦痛を嘗めて世を救ふ

諸善龍神の修業場

三五教の宣傳使

生れ赤子になり變り

心の色も清公が

喉を目蒐けて這ひ込みし

黄金の蛇は何者ぞ

玉依姫の分け御靈

玉永姫の化身にて

龍宮洲を清めむと

名も清公の體を借り

アイルテナヤチャンキーを
蜈蚣の島に投げやりて

現界幽界の境なる

苦しき修業を事依さし

水晶身魂に磨き上げ

罪も穢も輕衣

錦の船に運ばれて

龍の宮居に進み行く

雄島の岸に残されし

一人の男モンキーは

四人の姿を見送りて

善惡邪正の判断に

迷ふ折しも金銀の

浪掻き分けて浮び來る

青緑毛の大龜は

忽ちモンキーが足許に

のたりのたりと這ひ上り
山上目蒐けて這ひ出せば

茲にモンキーは遅れじと
龜の後をば追ひ乍ら

大樹の枝に駆け登り
龜と諸共高所より

忽ち地上に顛落し
大切の頭を打ちながら

神の御息を兩の手の
掌に吹きかけ疵所をば

つるりつるりと撫でつれば
疵は忽ち癒えにける

緑毛の龜は足早に
雲を霞と駆け出す

我遅れじとモンキーは
汀に進む折柄に

緑毛の龜は忽ちに
身を躍らして水中に

ザンブと許り飛び込みぬ
モンキー後より後れじと

又もや水中に飛び込めば
手足も疲れ身も弱り

息も絶えむとする所
緑毛の龜は何故か

湖面に姿を浮べつつ
手足を休めて振り返り

モンキーの来るを待ち居たる
漸く龜に縋りつき

両手に甲を抱へつつ 命辛々従いて行く

龜は直様水中を 潜りて深き海底に

一旦息を休めつつ 再び湖面に浮き上り

忽ち變じて船となる 命限りのモンキーは

初めて蘇生したること 心も勇み氣も勇み

救ひの船に身を任せ 善惡邪正の判断に

心の闇を照らしつつ 船のまにまに浪の上

朱欄碧瓦の龍宮の 高樓目蒐けて惟神

神のまにまに進み行く。

遠淺の湖岸に船は進んで来た。湖底は水晶の如く明かに、金沙銀砂の光太陽に

映じて何物にも譬方なき麗しさ。小さき青、赤、紫の魚は金魚のやうな尾を掉つ

て縦横に澆刺として遊びで居る。天の星の輝くやうに水の深さ五寸乃至一尺許り

の所になりて、金剛石のやうな光、五六尺或は一二尺を隔てて目も眩む許り強き

光を放つて居る。船は一寸許りの水の上さへも軽々しく迂りつつ、遂に金砂の磯端に着いた。

モンキーは船を飛び下り、砂原を歩みかけた。一步步運ぶ毎に足の下から驚のやうな聲が出て来る。振り返つて砂に印した足跡を見れば、大なる小判を敷いたやうに金色に光つて居る。モンキーはふと佇み、乗り來し船や湖面を見れば、青、紅、紫、白、黄、橄欖色、其他得も言はれぬ寶玉、湖上三尺許りの所を蝶の花に戯る如くに前後左右に浮動して居る麗しさ、玉と玉とは時々衝突して煙火の如き光を湖面に投げて居る。恰も寶玉の粉末を撒き散らした様な眺めである。モンキーは夢では無いかと我と我身を疑ひつつ尚も湖面を熟視して居ると、後の方より思はず兩方の肩をグツと抱へた者がある。何者ならむと吾胸の邊に目を轉ずれば、金色、黒色のダンダラ條のある虎の兩手であつた。モンキーは其手を我兩手に固く握り乍ら、何者にか引かるる如き心地し、自分の姿は何時の間にかや、紫の麗しき木の葉の數多茂れる林の中に導かれ、瑠璃光の如き岩石の根下に穿たれたる岩窟の中へ、不知不識に進み入りける。

モンキーは、如何なること有りとも、理智を捨てて唯惟神に任すべく、決心の臍を固めて居た際であるから、一切の考慮を捨て、唯吾身の自然に引かるるままに任して居るのみ。

モンキーの體は、金銀色の光輝く洞穴の中に自然にキリキリ舞ひ乍ら、何處ともなく聞ゆる音樂の聲に従つて時々舞ひ上り、或は横になり、或は逆様に手を以て歩むなど、全く一身心魂を神に任せて、何時の間にか其身體は美はしき寶玉をもつて飾られたる寶座の上に端坐して居た。坑内の遙向ふより青、赤、紫、白、黄の五つの玉の光、サーチライトの數千倍の光力をもつて、目も眩む許り此方向つて光を放射し出した。モンキーは思はず目を塞ぎ、玉の光る方を眺むれば豈圖らむや、紫の玉の中には初稚姫、赤き玉には玉能姫、青き玉には玉治別、白き玉には久助、黄色の玉にはお民の顔がありありと映つて居た。モンキーは是を見より忽ち精神宙に浮き上る如く前後も知らず其場に倒れて仕舞つた。

(大正一一・七・一〇 舊閏五・一六 加藤明子録)

第一章 風聲鶴唳（七五七）

蒼空一點の雲なく、星光疎にして中秋の月は中空に懸り、鏡の如き温顔をもて下界を照し給ふ。地恩城の棟に鏤めたる十曜の金紋は、月光に映じて目も眩きばかりなり。

地恩城の女王黄龍姫は、梅子姫、蜈蚣姫、左守のスマートボール、宇豆姫を始め右守の鶴公、貫州、武公其他を従へ、高殿に登り月見の宴を開いて居る。果物の酒は芳醇なる香を放ち、柑子、バナナ、桃其他の木の實を麗しき器に盛り、一同歡を盡して月光を仰ぐ折しも、黄龍姫は忽ち顔色蒼白ざめ、身體頻りに動揺して、心中不安の雲に包まれし如き容態となれり。

梅子姫、其他の人々の目には、中秋の月皎々と輝き、紺碧の空は愈高く、風は涼しく何とも云へぬ氣分に包まれて居る。獨り黄龍姫の眼に映じたるは、ジャンナ郷のテールス姫の夫となり、三五の道をネルソン山以西に布き、旭日昇天の勢ありと稱せらるる友彦を先頭に、數多の鬼の如き土人、怪しき黒雲に乗り、幾十

萬とも限りなく鋭利なる鎗を携へ、中空より地上を眺め、黄龍姫の頭上に向つて鋼鐵の矛を驟雨の如く降らせ、火の車を挽き連れ、青、赤、黒の鬼、虎皮の褌を締め、牛の如き角を生やし攻め來る恐ろしさに、身體忽ち震動して、高殿より終に顛落、人事不省に陥りける。

蜈蚣姫は驚きてものをも言はず、老の身も甲斐々々しく階段を降り行く。されど梅子姫、スマートボール其他の面々には、黄龍姫の姿竝に蜈蚣姫の姿は依然として高殿に月を賞するかの如く見え居たり。それ故蜈蚣姫の周章て階段を降り行きし事も、黄龍姫が高殿より墜落せし事も夢にも知らざりし。要するに黄龍姫、蜈蚣姫の本守護神は、依然として此高殿に其儘の體を現はし、嬉々として月を賞しつつありしなり。二人が身體に残れる執着心の鬼の爲めに斯くの如き幻覺を起し、又其罪惡の凝固より成れる肉體は、副守護神の容器として高殿の下なる千仞の谷間に突き落されたるなりき。

後に残つた黄龍姫の姿は、恰も鼈甲の如く身體半ば透き通りて一層の美を加へ、言葉も俄に涼しく且つ莊重を帯び來たりぬ。

梅子姫うめこひめ「黄龍姫様わつりようひめさま、不思議ふしぎな事ことがあるもので御座ございますな。今迄いままでの貴女あなたのお姿すがたと
うつて變りかは、一入派ひとしほりつぱな御顔色おんかんばせ、お身體からだの恰好かつかうまでも、何處どこともなく威嚴あげんの加くは
つた様やうに思おもひます。變かはると言いつても、斯かう迅速じんそくに向上遊かうじやうあそばすと言いふ事は、不思議ふしぎ
でなりませぬ」

黄龍姫わつりようひめ「ハイ、妾わたしは勿體もつたいなくも三五教あななひけうの神司かむづかきとなり、且地恩城かつちおんじやうの女王ぎよわうと迄まで上りつ
め、稍得意ややとくいの色いろを浮うかべ安心あんしんの氣きにうたれて、勿體もつたいなくも月の大神様おほかみさまを玩弄物おもちゃか何
かの様やうに、酒肴さけさかなを持もち出し月見つきみの宴えんだと、花見はなみか雪見ゆきみの様な畏おそれ多い事ことを何なんとも
思おもはず始めはじめしましたが、忽たちまち大空おほぞらの月光菩薩げつくわつぼざつの御威勢ごゐせいに照てらされ八テ、濟すまない事こと
をした、妾わたしは今いまこそ飛たつ鳥とりも落おとす様な威勢ゐせいで斯かうして此處ここに安樂あんらくに暮くらして居をるが、
月の鏡かがみに妾わたしの古ふるい傷きずがスツカリ寫うつつた様な心持こころもちになり、月見つきみどころか、穴あなでもあ
らば這入はいり度たいな心持こころもちになり、悔悟くわいごの念ねんに苦くるしむ時ときしも、滿天まんてんの星ほしは黒雲くろくもに包つつ
まれ月光げつくわうは影かげを隠かくし四面しめん咫尺しせき暗澹あんたんとなりしと思おもふ間まもなく、ジャンナの郷さとに三五
の道みちを傳つたふる友彦ともひこは妾わたしが昔彼むかしかれに與あたへた凌辱りやうじよくの怨うらみを復かへさむと數多あまたの鬼おにを従したがへ、天
上やうより鋼鐵まがねの矛ほこを雨あめの如ごとくに降ふらせ、火ひの車くるまを以もつて我肉體わがにくたいを迎むかへ來きたる其恐そのおそろしさ。

罪にかたまつた肉體の衣を神様の御恵に依つて剥ぎ取られ、又母上も子の愛に溺れ給ふ執着心の衣は、此谷間に落ちて白煙となり消え失せました。ア、斯くなる上は最早妾の肉體には一點の雲霧も無く、正に此中秋のお月様の如き身魂と生れ變つた様で御座います。それに就いては皆様、只今より月見の宴を廢し、神様に
お詫を致しませう」

との物語りに梅子姫は感じ入り、自ら導師となつて高殿に端坐し、月光に向つて感謝祈願の神言を奏上し、月見に用ゐたる總ての器を此高殿より眼下の谷底目蒐けて一品も残らず投げやり、今後は決して月見の宴を爲さざる事を神明に約し、悄然として地恩城の奥殿に姿を隠し、再び一同打揃ひ天津祝詞を奏上する事となりぬ。

地恩城の黄龍姫を始め、重だちたる幹部は奥殿に入り、祝詞を奏上し了つて神酒を頂き居る際、慌しく奥の間目蒐けて驅入り来る貫州、武公の兩人は、息も絶え絶えに後鉢卷グツと締め、各自茨の鞭を握つた儘、
「申し上げます。タ、タ、大變で御座います。御用意を遊ばしませ」

と息もつき敢ず泣聲になつて言上する。

スマートボール「其方は貫州、武公の兩人、大變とは何事だ。苦しうない、近く寄つて細さに物語つたが宜からうぞ」

貫州は兩手にて胸を打ち乍ら、稍反身になつて、

「我々兩人、地恩城の城門を、スマートボールの命令に依り數多の部下を監督し、

用心堅固に守る折しも遙に聞ゆる鬨の聲、何事ならむと高殿に一目散に驅登り、

月の光に照らして向ふをキツと眺むれば、十曜の紋の旗印、瓢箪形の馬標は幾十

百とも無く樹々の間に間に出没し、赤鉢巻に赤襷、數多の駒に跨りて鬨を作つて

攻め寄せ來る其勢ひの凄じさ、敵は何者ならむと斥候を放ち、よくよく見れば豈

圖らむや、曩に城外に投げ出されたる元のバラモン教の友彦、ジャンナの荒武者

共を引率れ、黄龍姫に嚴談せむと呼ばはり乍ら、猛虎の勢にて攻め來る。味方は

薄衣綾錦、數萬の敵軍は甲冑に身を固め小手脛當て、銳利の武器を携へ旗鼓堂々

と攻め寄せ來る物々しさ。吾々兩人は、味方の奴輩残らず驅り集め、寄せ來る敵

に向つて言靈戦を開始し、天の數歌歌ひ上げて兩手を組み、指頭より五色の靈光

を發射し敵の魔軍に向つて防ぎ戦へ共、彼も強者、言靈を以て應酬し、其上銳利なる武器を携へ、時々刻々に近寄り来る危さ。日頃無抵抗主義の地恩城なれども、斯くなる上は最早詮なし、武器に代へて所在小石を引掴み、押し寄せ来る敵軍に向つて雨霰と亂射すれば、敵は雪崩をうつて一二丁ばかり一旦ドツと引き上げしが、又もや鬨を作つて、暴虎憑河の勢恐ろしく、口より火焰を吹き乍ら、青、赤、黒の鬼神共先頭に立ち、雷の如き怪聲を放ちて攻来る。味方は僅に三百有餘人、死力を盡して挑み戦へども、敵は名に負ふ大軍、瞬く間に縦横無盡に雑立てられ、無念乍らも我々兩人、敵を斬り抜け漸く此場に立ち歸り候程に、この處に御座あつては御身邊危ふし、一時も早く裏門より、山傳ひにシオン山の方面指して落ち延び給へ。サア、早く早く。

と身を慄はし、左右の手を打ち振り打ち振り注進に及ぶ其怪しさ。スマートボールは合點往かず、

只今まで高殿に於て月見の宴を催し居たりし我々、敵の押寄せ来る氣配あれば何とか神界より御示しあるべき筈、扨ても合點の往かぬ事であるワイ。……もう

し黄龍姫様、梅子姫様、如何思召し給ふや、合點の往かぬ兩人が注進
と二人の顔を打ち見守り、稍不安の面持にて胸を躍らせて居る。黄龍姫は悠揚迫
らず、

「あいや、スマートボール、……貫州、武公の兩人を我前に伴ひ來れ」
との嚴命にスマートボールは兩人の手を引き、黄龍姫の膝下に導いた。二人は頭
を垂れ、猫に追はれし鼠の如く畏縮して慄ひ上つて居る。

黄龍姫「あいや、貫州、武公兩人、只今汝が注進せし事は過去の出來事なりや、
將未來の事なるか、但は現在の事か、明瞭に答辨せよ」

武公「ハイ、過去の事や未來の出來事ならば我々は決して斯様な心配は致しませ
ぬ。既に城内の者共は殆ど滅亡致し、我々兩人も斯くの如く顔に手疵を負ひし以
上は、只今の事、今や……アレアアの通り間近くなつた聲、人馬の物音、今に
友彦、鋼鐵の矛を打振ひ此場に攻め寄せ來りますれば、何卒一時も早く裏門より
逃げ延びて下さいませ」

黄龍姫「あいや、スマートボール、其方は表門に行つて實否を調査し來れ」

スマートボールは「ハイ」と答へて立ち上らむとする。貫州は其裾を掴んで、
「モシモシ左守様、お待ち下さいませ、衆寡敵せず、飛んで火に入る夏の蟲、決
して悪い事は申しませぬ。……黄龍姫様、早く早く御用意遊ばしませ」
梅子姫「今武公の言葉におひおひ近づく鬨の聲、人馬の物音と申したが、天地は
至つて静寂、何の聲も無いではありませんか」
武公「ソ、そりや何を仰有います。あの聲が分りませぬか」
と顔色變へて落ち付かぬ氣に、震ひ震ひ答へる。
スマートボールは貫州の手を振り放し、一目散に表門に現はれ見れば、月は皎々
と輝き猫の子一匹其邊に見えぬ。「ハテ不思議」と高殿に登り四方をキツと見渡
せば山はコバルト色に蒼ずんで一點の白雲もなく、山の尾の上の輪畫は一入瞭然
として、淋しき中に得も言はれぬ雅味を漲らして居る。スマートボールは悠々と
して奥殿に歸り來り、二人の前に立現はれ、矢庭に平手を以て貫州、武公の横面
を二つ三つピシヤピシヤと打てば、二人は初めてポカンとした様な面を曝し、
兩人「ヤア……これはこれは不賤千萬にも女王様の御殿に何時の間にか侵入致し、

實に申し譯なき事で御座います。何卒お許し下さいませ
と平伏する。

蜈蚣姫「ほんにほんに、妾の荒肝を取りかけよつた。お前は一體何と言ふ事を言つて來るのだ。大方夢を見て居つたのだらう」

兩人「ハイ、今考へて見ますれば、夢の連続的行爲で御座いました。あまり友彦が出て來る出て來ると心配して居つたものですから、ドエライ夢を見たので御座いませう……あゝ惟神靈幸倍坐世」

と兩手を合せ、
兩人「マアマア夢で結構で御座いました。……皆さま、お目出度う、お祝ひ申します」

黄龍姫、梅子姫、宇豆姫一度に吹き出し、

「プッフ、、、、オホ、、、」

館の外には皎々たる明月輝き、松蟲、鈴蟲、蟋蟀、螽斯の聲賑しく聞えて居る。

(大正一一・七・一〇 舊閏五・一六 北村隆光録)

第一二章 不意の客（七五八）

心の鬼に責められて

黄龍姫が其昔

年も二八の花盛り

大の男を素氣無くも

錫蘭島の山奥に

義理も情も荒男

淋しき閨の友彦を

酒に酔はせて籠拔の

憂目に會はせた古疵は

女王となりし今日までも

心の奥に蟠かまり

悩み苦み居たりしが

空澄み渡る中秋の

月の光に照らされて

棄てた男の心根を

思ひ浮べて矢も楯も

耐らぬ許り苦しみの

雲に包まれ怖ろしく

空を眺めて居る内に

天空俄にかき曇り

數多の鬼を引率れて

鋼鐵の矛の雨降らす

友彦幕下の鬼共が

影に戦き千仞の

谷間に忽ち顛落し

續いて母の蜈蚣姫

黄龍姫を救はむと

階段降り踏みはづし

同じく谷間に顛落し

罪を償ふ谷の底

ヤレ恐ろしや恐ろしや

昔の罪の廻り來て

根底の國に落ちたるか

天地の神よ友彦よ

妾の罪を赦せよと

祈る折しも秋風に

吹かれて落ち來る一葉の

紅花の吾眼にヒラヒラと

入るよと見れば夢醒めて

仰げば元の高殿に

梅子の姫や諸人と

月の光を浴び居たる

此正夢に小絲姫

愈此處に三五の

神の御前に手を合せ

月光神に心より

月見の無禮を謝し乍ら

奥殿深く進み入り

神の御前に太祝詞

宣れる折しも貫州が

息せき切つて驅來り
夢の中なる出來事を

誠しやかに宣りつれば
黄龍姫は怪しみて

スマートボールを門外に
遣はし偵察せしむるに

敵の攻め來し影もなく
月の光は皎々と

四邊隈なく照り渡る
黄龍姫を始めとし

貫州武公が胸の中
まだ晴れやらぬ黒雲に

疑心暗鬼を生み出し
吾と吾手に惱みたる

轉迷開悟の物語
横に臥しつつ瑞月が

天井の棧を數へつつ
形も圓き餡パンを

頬張り頬張り述べて行く
黄龍姫が物語

進むにつれて不思議なれ
嗚呼惟神々々

御靈幸倍坐しませよ。

地恩城の城内の廣場の木蔭に、貫州、武公の大將株を始め、門番其他一同、芝生の上に身を横たへ、或は坐りなどして雑談に耽つて居る。

門番のマール（萬藏）は貫州に向ひ、

「モシモシ、ボールさま（組長の意）此間は友彦の軍勢がやつて來たさうですが、如何になりましたかなア」

貫州「お前の【貫州】する所でない。【マール】で蜃氣樓の様な話であつたよ」

マール「貴方の黄龍姫様への御報告は、マールで夢の様だつたと言ふことですが、夢にしても大袈裟なことですか」

貫州「俺ばかりぢやない。武公でさへも同じ夢を見たのだから、【貫武】一途だよ。どうしても嘘とは思へないものだから報告に及んだのだ。併し乍ら俺達は、黄龍姫様の御身の上を案じ煩ひ奉つて居る忠臣だから、貴様の見る夢とは、稍選を異にして居るのだ」

マール「選を異にして居られるから、【戦】争の夢を御覽になり、【戦々】恟々として【戦況】を御報告なされたのですなア。……武公さま、貴方も本當に其ん

な夢を見たのですか」

武公「俺は別に夢を見たと言ふ譯ではないが、常々そんな事が在りはせぬかと、案じて居つた矢先き、貫州が周章しく話したものだから、俺も夢か現か知らぬが、ツイ捲き込まれて報告に往つたまでだ。併し輕信報告（敬神報國）の至誠の發露だから、黄龍姫様も別にお咎め遊ばさず、マア無事で事済となつたやうなものだ。マイル「そんなら是から貴方等兩人に對し、蜃氣樓ボールと云ふ尊名を奉ることにしませうかい。……のうミュージズ（妙州）」

ミュージズ「オウそれが宜からう。蜃氣樓と云ふやつは、少しく「どんより」としたやうなハツキリせぬ空に、空中樓閣が出来たり、松林が出来たり、人馬の往來する有様が映つて來るものだ。何時も春夏の頃になると、ネルソン山の上の方に蜃氣樓が現はれ、色々の立派な女神の姿が見えたり、中には鬼や大蛇の姿が現はる事がある。大方貫州さまは夢ではなくて、其蜃氣樓を眺め、ビツクリして本眞物ぢやと思つて報告しられたのだらう」

貫州「俺は自轉倒島から此處へやつて來たものだから、空中にそんな物が現はれ

ると云ふ事は、話は聞いて居るがまだ見た事はない。一遍見たいものだなア」
マール「此龍宮島には諏訪の湖と云つて、立派な金銀の砂を以て湖底を固めた様な綺麗な広い水溜りがあり、其處に龍神や澤山の女神が現れて、色々の事を遊ばして御座る姿が、時あつて天上に映じ我々國人を驚かし給ふ事が度々ありますよ。併し乍ら近年は如何したもののか、今迄の様にさう度々現はれなくなつた。大方ネルソン山を向ふに越えた秘密郷へ、鼻曲りの友彦が往つたものだから、龍神が怒つて諏訪の湖の底深くお隠れ遊ばし、色々の神業を御中止になつて、蜃氣樓が現はれないのかも知れない。本當に龍神も友彦の爲めに、「蜃氣樓一轉遊ばしたのかも知れないよ。アハ、ハ、ハ」
貫州「オイ向ふを見よ。噂をすれば影とやら、鼻先の赤い出齒の團栗眼の友彦に似た奴が綺麗な女を連れてやつて來るぢやないか」
武公「ヤア、ホンによく似た奴だ。然し彼奴はジャンナの郷で非常な勢で郷人にもてはやされ、殆どネルソン山以西は友彦の勢力範圍になり、言はば黃龍姫様に匹敵する様な地位に迄進んだと言ふ噂だから、假令此處へ來るにしても、十人や

二十人の供を連れて來るべき筈だ。鼻の曲つた奴は廣い世間には、二人や三人は無いと限らぬ。よもや友彦ではあるまいなア」

貫州「ソレでもよく見よ。友彦に間違ひない様だ。彼奴は今迄の地金を出して、ジャンナの郷人に愛想をつかさされ、居たたまらなくなり、テールス姫と手に手を取つて驅落と出掛け、地恩城へ救援軍を願ひに來たのか、但は居候に舞ひ込んで來居つたのに間違ひあるまいぞ」

武公「果して友彦だつたらどうする考へだ」

貫州「無論の事、寄つて集つて懲しめの爲め打ち「のめす」のだ。何程無抵抗主義の三五教と言つても、あんな奴を門内に入れて耐るものかい。黄龍姫様に對し、どんな事をし居るか分つたものでない。又黄龍姫様も、あんな男が假令一年でも夫であつたと、人に思はれては恥かしいと御氣を揉まれるに定つて居る。それに又嬢アを連れて來て居るから、そんな事が分らうものなら又もや悋氣の角を生やして、どんな騒動をおつぱじめるか分らないから、兔も角此門内に一歩たりとも入れてはならぬ。先年の様に放り出して仕舞ふに限る」

と話合ふ所へ夢でもなく現でも屋氣樓でもなく、本當の友彦はテールス姫とただ

二人スタスタと此場に近づき來り、

友彦「ヤア貫州さま、武公さま、久し振りで、御機嫌宜しう」

貫州「ヤア矢張り貴様は友彦だな。日頃の地金を出して、又候土人の奴に愛想を

つかされ、ノソノソと遣つて來たのだらうが、此城門は我々の勢力圈内に置かれ

てある關所だから、通す事は罷りならぬ。折角だがトツトと歸つて呉れ」

友彦「左様で御座いませうが、今日の友彦は今までの體主靈從の友彦と違ひます

から、御心配なく通過させて頂きたい」

マール「モシモシ、ボールさま、此んな奴は絶対に通す事は出來ませぬなア」

貫州「オウさうだ。金輪際通す事は出來ぬ。諦めて歸つたがよからうぞ」

友彦「其御疑ひは御尤も乍ら、我々はジャンナイ教を立替へ、大慈大悲の三五教

の教を立て、今日の所大變な勢力になりましたので、同じ一つ島に於ける神様の

御道、黄龍姫様に一切報告し、その部下に使つて貰ひ、全島を統一して頂かうと

態とに供をも連れず、女房のテールス姫と只二人遙々参りました。どうぞ黄龍姫

様に御面會叶はねば、強つてとは申しませぬ。左守様になりとも會はして頂きたう御座います」

「マイル、ヤイヤイ友彦、供を連れずにやつて來たと今言つたが、友に供が要るかい。テールス姫だとか言つて、妙なアトラスのやうな面した女房が、それ程有難いのか。鼻の赤い奴や、顔の斑に赤い奴が勿體なくも地恩城にやつて來て、左守様に御面會を願ひたいとは、そりや何を戲けた事を吐くのだ。チツト貴様、面と相談して見る」

「テールス姫、友彦さま、サーチライス地恩城、エツプツプ、エツパエツパ、パーチクパーチク、イツパーパー」

「と土人語で囀つて居る。此意味は……友彦の救世主を、地恩城の門番が、譯も分らずに我々を輕蔑して入門を拒絶して居るが、決して躊躇に及ばぬ、ドシドシ這入りませう……との意味であつた。友彦は、
「貴州、武公其他の方々、話は後で分りませう。兔も角左守様に御面會の上……」

と言ひ乍らテールス姫の手を引き、表門に向つて進み行かむとする。貫州、武公は、

貫州「コリヤ大變だ、貴様を入れてなるものか……」

と、マール、ミューズ其他の人々に目配せした。マールを始め一同は友彦の後より追ひ縋り、寄つて集つて二人を其場に突き倒し、踏む、蹴る、毆く、殆ど半死半生の目に遇はせた。友彦夫婦は少しも抵抗せず、一同が打擲する儘に身を任せ両手を合せて感謝祈願の祝詞を奏上して居た。一同は餘り友彦夫婦が従順なるに、少しく小氣味悪くなり、友彦の言葉につれ、貫州、武公始め一同は、大地に蹲踞み乍ら聲を揃へて感謝祈願の祝詞を唱へて居る。

右守の鶴公は門内の木蔭を逍遙し居る折しも、門外に當つて大勢の祝詞の聲が聞えたのを訝かり乍ら、聲を尋ねて表門を潜り、門前の密樹茂れる廣き林に立出で、一同の姿を認めて此處に現はれ來りて、友彦が大勢の中に交りて祝詞を奏上するを見て大いに驚き、無言の儘、踵を返し奥殿深く黄龍姫の前に進み此由を委曲に報告した。黄龍姫は驚くかと思ひの外、ニツコリとして、

「右守殿、友彦が御入來になつたとやら、お供の方はいづれ澤山お在りでせうな」
鶴公「ハイ、別に供らしき者は御座いませぬ。見慣れぬ女の方が只一人、大方噂に高きテールス姫でせう」

「ハテ不思議な事もあるものだ。あれ丈け勢力を得たる旭日昇天の友彦さまが、供をも連れず夫婦連お越しになつたとは、一體どうした譯だらう」

鶴公「私の察する所、友彦さまは又例の地金を現はし、土人に愛想をつかさね夫婦手に手を取つて、此處へ命から逃げ來られたものと思はれます。如何致したら宜しう御座いますか。御指圖を願ひます」

「決して決して左様な事で御入來になつたのではありますまい。妾は少し心に當る事がある。兔も角オーストラリヤに於ける三五教の太柱、敬意を拂ふ爲めに、黄龍姫の妾門外にお迎ひに参りませう」

鶴公「右守として申上げます。苟も地恩城の女王たる御身を以て、輕々しくお出で遊ばすは、御威勢にも關りませう。どうぞ此事許りは御中止を願ひたう存じます。私がお迎へ申して参りますから、奥殿にお待ち下さいます様にお願ひ申しま

す

黄龍姫は首を左右に振り、

「イエイエ、同じ天地の分霊、人間に上下の區別はない。又今、友彦様はジャンナの郷の國人を主宰する立派な御方とお成り遊ばし、妾は地恩城の女王とまで成つて居るのも、淺からぬ因縁でせう。假令一ケ年でも夫婦となつた間柄、お迎ひ申上げねばなりませんまい」

と蜈蚣姫、梅子姫の此場に在らざるを幸ひ、自らスタスタと門前に現はれ、友彦が端坐する傍に寄り添ひ、

「妾は地恩城の黄龍姫、昔の小絲姫で御座います。友彦様並びにテールス姫様、サアどうぞ妾と共に奥殿にお進み下さいませ」

友彦は此聲にフト見上げれば、昔の面影アリアリと顔の何處やらに残つて居る小絲姫なので、……友彦はハツと頭を下げ恭しく両手をつき、

友彦「これはこれは女王様、勿體ない斯様な所迄お出で下さいまして、……これなるは私が女房テールス姫と申すもの、今は熱心な三五教の信者として、友彦が

神務しんむを力ちから限り補助ほじ致いたすもので御座ございます。申まを上げたき事ことは山々やまやま御座ございますが、然しからば奥殿おくでんにて悠々ゆるゆると申まを上げませう〇

テールス姫ひめ「女王様ぢよわうさま、始はじめてお目めにかかります。何なに分宜ぶんよろしくお願ねがひ致いたします〇」
と友彦ともひこに連つれられ、黄龍姫わつりようひめのあとにつ従ついて門内もんない深ふかく姿すがたを隠かくした。右守うもりの鶴公つるこうは不承ふしよう
不性ぶしように三人さんにんのあとにつ従つひ行く。貴州くわんしゅう、武公たけこう其他その一いち同どうは、夢ゆめか現うつつか幻まほろしかと、互たがひに顔かほを
見合みあはせ呆あきれて再ふたび言こと葉ばもなく、空行そらゆく雲くもをアアフンとして眺ながめて居ゐる。

(大正一一・七・一〇 舊閏五・一六 谷村眞友録)

第四篇 神花靈實しんくわれいじつ

第一三章 握手の涙あくしゆなみだ (七五九)

天恩豊かな地恩城 春夏秋冬も夏景色

木々の木の葉は麗しく 果物豊に實りつつ

衣食の道に身をもがく 難みも要らぬ一つ島

顯恩郷を立ち出でて 錫蘭島に立て籠り

閨の友彦後にして 大海原を渡り來る

小絲の姫の行先を 鵜の目鷹の目つけ狙ひ

三十路に餘る一男の頃 島の目に渡りて彼方此方と

行方求めてバラモンの 道を開きし友彦が

時の力に助けられ 蜈蚣の姫に邂逅ひ

命の瀬戸の海中に 堅磐常磐に浮びたる

小豆が島に名も高き 國城山の岩窟に

遇ふた嬉しさ恐ろしさ 洲本の庄の酋長が

捕手の者に縛られて 何の言ひ譯淡路島

東助夫婦の情にて 犯せし罪もうたかたの

水泡みなわと消きえて釣つり小舟をぶね

清武鶴きよたけつるの三人さんにんと

馬關ばくわんの關せきの浪なみを越こえ

千引ちびきの岩いはに船ふねをあて

命危いのちあやふき折をりからに

三五教あななひけうの神司かむづかき

玉治別たまはるわけの一行いっかうに

惜をしき命いのちを救すくはれて

蜈蚣むかでの姫ひめや高たか姫ひめの

漂着へうちやくしたるアンボイナ

南洋なんやう一の龍宮りゆうぐうに

上陸じやうりくすればコ八い如何かに

小絲こいとの姫ひめの生うみの母はは

蜈蚣むかでの姫ひめに再會さいくわいし

何なんの云いひ譯わけ荒波あらなみを

乘のり切きり乘のり切きり切きり沓島くつじまや

オーストラリヤの浮島うきじまに

蜈蚣むかでの姫ひめの一行いっかうと

命いのちからがら上陸じやうりくし

小絲こいとの姫ひめの住すまひたる

地恩ちおんの城しろに來きて見みれば

情なさけを知らぬ國人くにびとに

手ても無なく叩たたき出いだされて

傍かたへの林はやしに潛ひそみつつ

黃龍わうりゆう姫ひめの宿やどの夫つま

嬉うれし嬉うれしの再會さいくわいを

悦よろこぶ間まもなく夢醒ゆめさめて

四邊あたりを見みれば岩いはの上うへ

腰こしの骨ほねさへ打うち碎くだき 身み動うごきなならぬ悲かなしさに

漸ちやうく息いきを休やすめつつ 三あな五な教ひけうの神かみ言ことを

赤ま心ごころ籠こめて宣のりつれば 神かみの恵めぐみは忽たちまちに

身みもすくすくと風かせ荒あらき 尾をの上へを傳つたひてネルソンの

峰みねの頂ちやうじやう上に辿たどり着つき 後あと振ふり返かへり眺ながむれば

一いち望ぼう千里せんりの雲くもの奥おく 地ち恩おんの城しろは何いづこ處こぞと

眼めを見みはりつつ憧あこが憬がるる 時ときしもあれや烈れつ風ふうに

吹ふき捲まくられて友とも彦ひこは 風かせにゆられて鷹たか鳶とびの

翼つばさ無なき身みは如い何かにせむ ジヤンナの郷さとに墜つ落らくし

人じん事じ不ふ省せいの折をり柄からに 此この地ちに住すめる郷さと人びとは

不ふ思し議ぎと傍そばに立たち寄よりて よくよく見みれば昔むかしより

待まち焦こがれたる救きう世せい主しゆ 曲まががりながらも赤あか鼻はなに

喜こび勇いさみ雀こ躍をどりし ジヤンナイ教けうの本ほん山ざんに

擔かつぎ歸かへりし面おも白しろさ ジヤンナイ教けうの神かみ司つかさ

テールス（照子）姫に思はれて　ここに夫婦の新枕

月日を重ね往くうちに　三五教の感化力

ジャンナの郷にゆき渡り　三五の月の御教は

朝日の昇る勢で　四方に擴がり榮え行く

友彦夫婦は意を決し　地恩の城に神徳の

花を開かす黄龍姫　御許に到り其昔

蜈蚣の姫や小絲姫　母娘の者を惱ませし

深き罪をば詫びむとて　テールス姫に來し方の

事情細かに物語り　漸く妻の諒解を

得たる嬉しさ夫婦連れ　ジャンナの郷の人々に

暫しの暇を告げながら　供をも連れず入り來る

其眞心ぞ雄々しけれ　あゝ惟神々々

神の御幸を蒙りて　前非を悔いし友彦が

母娘の前に手をつきて　心の曇を晴らしつつ

あななひけう 三五教の柱石と 仕へまつりし古き世の

きよ 清き尊き物語 神と神との御水火より

く 組み立てられし瑞御霊 神の使の瑞月が

そせい 粗製濫造の蓄音器 把手に撚をかけながら

ふせい 不整調なるレコードの 又もや廻轉始めける

あゝ 惟神々々 御靈幸倍ましまして

わうり 黄龍姫や友彦の 搦みあうたるローマンス

こひ 戀の纏れの絲口を サラリサラリと淀みなく

の 宣らせ給へよ天津神 國津御神や大八洲彦

かみ 神の命の御前に 慎み敬ひ願ぎまつる。

ともひこ 友彦夫婦は、小絲姫に誘はれ奥殿深く進み入る。友彦の來訪を聞いて胸踊らせ
むかひめ 蜈蚣姫、スマートボールや其他の一同は、珍らしさと忌はしさの混亂したる如

き面持にて、中腰になりながら出迎ふ。黄龍姫は友彦の手を固く握り、二三回揺ぶり、

「ジャンナーサール、ウツポツポ、サーチライス、友彦、テールス、テールスへー
ム、タープリンス、タープリンス、ケーリスタン、イジアン、ノールマン、シー
ルンパーユエーギエル、シユライト」
と宣る。

「ジャンナの郷に天降りました友彦の救世主よ、妻のテールス姫殿、御無事で御
神業によく仕へて下さいました。妾も貴方が今迄の態度を改め、誠の道に御活動
遊ばすを仄に聞き、愛慕の念に堪へず、何とかしてお便りを聞き度いものだ、又
神様のお許しあれば一度會見をして今迄の御無禮を謝し、互に了解を得て御神業
に参加したく思つて居りました。能くマア御遠方の處遙々お入來下さいました」
との意味であつた。（これから解り易いやう日本語を用ふ）
友彦「ハイ有難う御座います。鬼熊別様、蜈蚣姫様の御兩親に對し、若氣の至り
とは申しながら、天にも地にも一粒種の貴方様を、惡魔の爲に吾精神を魅せられ、

あのやうな不都合な事を致しました私の罪を、お咎めも下されず、唯今の御親切なる打ち解けたる御挨拶、實に痛み入りました。私は過ぎ來し方の御無禮を思ひ出す度に神の光に照らされて、五體をぐたぐたに神様から斬り虐まれるやうな苦痛を感じ、寢ても覺めても居られないので、恥を忍び直接女王様に拜顔を得、心ゆく迄お詫を申上げ、且つお恨みのありたけを酬うて貰ひ、さうして自分の罪を赦され、至粹至純な元の御魂に立ち歸り、安心して御神務に奉仕したく存じまして、女房にも事情を打ち明け、態とに供人も召し連れず、昔の友彦となつてお詫びに参りました。何卒今迄の御無禮を、神直日大直日に見直し聞き直し、お赦し下さらむ事を、偏にお願い致します」

と涙をハラハラと流し、眞心より詫び入る。黄龍姫は、

「ハイ有難う御座います。罪は却つて私に御座います。お慈悲深い神様に何事もお任せ致しまして、正しき清き御交際をお願い申上げます」

と心の底より打ち解ける其殊勝さ。友彦は一同に向ひ歌を詠んで挨拶に代へた。

沖おきに浮うかべる一ひとつ島しま 地恩ちおんの城しろに現あれませる

神威しんあかがや輝あめつちき天地しんとくの 惠めぐみも開ひらく梅子うめこひめ姫ひめ

三千さんぜんせかい世界しんとくに神德しんとくを 隈くまなく照てらす黄龍わうりゅうひめ姫ひめ

神かみの命みことを始はじめとし 母ははとまします蜈蚣むかでひめ姫ひめ

泥どろにまみれし世よの中なかを スマートボールや宇豆うづの姫ひめ

千歳ちとせことほ祝まつぐ松まつの世よの 梢すずみに巢すぐふ鶴公つるこうの

右守うもりの神かみの御前おんまへに 神かみの教をしへの友彦ともひこが

赤あかき心こころを打うち明あけて 居あななららびたまふふ三五あななひの

司つかさの前まへに敬いやまひて 言こと解とき詫わびし奉たてまつる

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも 誠まことの道みちは何時いつまで迄までも

變かはるためしもあら尊たふと 教をしへの御子みこと選えらまれて

ミロクみろくの神かみの神業しんげふに 仕つかふる吾等われらの頼たのもしさ

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事も人の世は
直日に見直し聞き直し

身の過ちは宣り直す
神の尊き言靈の

底ひも知れぬ御恵
吾人共に大前に

廣大無邊の神恩を
畏み感謝し奉る

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましまして

地恩の城は永久に
朝日の豊榮登ること

榮え榮えて果も無く
輝き渡る天津日の

御蔭蒙りネルソンの
山の彼方の國人を

一人も残さず三五の
神の恵に救ひ上げ

野蠻未開の魔の郷を
開きて進む神の徳

東と西に分れたる
ネルソン山の頂きに

立たせ給ひて黃龍の
姫は雄々しく此島の

救ひの神と現れませよ
吾は友彦テールス姫と

力を一つに合せつつ
汝が命の神業を

助けまつりて永久とこしへに

國くにはる立大神たちのおほかみの

仁慈無限じんじむげんの御心みこころに

酬むくいまつらむ村肝むらきもの

心こころ撓たゆまぬ桑くはの弓ゆみ

射貫いぬかにや止やまぬ鐵石てつせきの

胸打むねうち明あけていつ迄までも

固かたき心こころを誓ちかひ置おく

あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸倍さちはへましませよ〆

梅子姫うめこひめは總代的そうだいてきに立たち上あつて祝歌しゆくかを歌うたつた。

無限むげん絶對ぜつたい無始むし無終むしう

仰あふぐも高たかき大宇宙だいうちう

うまうまらに委曲つばらに造つくりたる

國くにはる立大神たちのおほかみは

仁慈無限じんじむげんの御心みこころを

三千世界さんぜんせかいの萬有ばんいうに

殘のこる限くまなく與あたへむと

遠とほき神代かみよの昔むかしより

心こころを千々ちぢに配くばらせつ

天津神あまつかみ達たち國津神くにつかみ

百ももの神かみ達たち千萬ちよろづの

青人草あをひとぐさや海川うみかはや

草くさの片か葉はや鳥とり獸けもの 昆こむし蟲しの末すゑにいた至る迄まで
 心こころを配くばり給たまひつづ 大おほ海うな原ばらに漂ただよへる
 泥どろの世せ界かいを清きよめむと 清きよき御み魂たまを幸さちはひて
 高たか天あま原はらのエルサレム 此こ處こを聖せい地ちと定さだめつづ
 三あな五な教ひけつの御み教をしへを 四よ方もに開ひらかせ給たまひけり
 神かみの最さい初しよの出しゅ現げんは 珍うづの都みやこのエルサレム
 人ひとの歴れ史きしの初はじまりは 埃エジ及プト國こくを元もととなし
 オリバス神かみを禮れい拜はいし 印インド度どの國くにはククリシユーーナ
 波フ斯サの國くにではミスラスの 神かみを伊い仕つかへ南なん米べいの
 高たか砂さ島じまの國くに人びとは ククエエルザコールを禮れい拜はいす
 神かみの初はじめのエルサレムは 國くに治はる立たちの大神おほかみを
 祀まつると云いへど其その元もとは 清きよき流ながれのイスラエル
 自おの轉ころ倒しま島まに現あれませる 神かみの教をしへも皆みな一ひとつ
 バラモン教けうやウラル教けう ウラナイ教けうやジヤンナイの

教をしへと云いへど人ひとの世よの 風土ふうどや人情にんじやうに畫くわくされて

其名そのなを異ことにするのみぞ 黄龍わうりゆう姫ひめも友彦ともひこも

過ぎすし昔むかしはバラモンの 神かみに仕つかへし身みなれども

其その根本こんぽんに立たち歸かへり 此この世よを造つくりし神かみ直日ちかひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 國くに治はる立たちや豊國とよくにひめ姫ひめ

神かみの命みことの靈たまの裔すゑ 埴安はにやす彦ひこや埴安はにやす姫ひめ

貴うづの命みことと現あらはれて 教をしへを四よ方もに開ひらきます

いとも尊たふとき御惠みめぐみに 如何いかで隔へだてのあるべきや

いよいよここに三あな五なの 神かみの教をしへに天あめが下した

四よ方もの國くに々くに島しま々しまを 殘のこる隈くまなく統とう一いつし

此この世よを救すくふキリスきりトとの 神しん業げふ清きよくミきロくクく神しん

十じ字ふじの架かせを背せに負おひて ノアはこぶねの方あやつ舟ふね操あやつりつ

天てん教けう地ち教けうの山やまの上へに 世よ人びとを救すくふ神かみの業わざ

其その神しん德とくの一ひと滴つづく 此こ處こに滴したり龍宮りうぐうの

名に負ふ珍のな お つう一つ島ひと しま メソポタミヤのけんおんきやう顯恩郷

聖地に比すべき地恩郷せいち ひ ちおんきやう 青垣山を繞らしてあをがきやま めぐ

珍の眞秀良場永久につう ま ほ ら ば とこしへ 治め給へる黄龍姫をさ たま わつじやうひめ

教の御子の友彦がをしへ みこ ともひこ 心の底より打ち解けてこころ そこ うちと

東と西を隔てたるひがし にし へだ ネルソン山の青垣をざん あをがき

苦もなくここに打ち拂ひく こゝに うち ばら 名詮自稱のめいせんじしよう一つ島ひと しま

一つ心に眞實をひと こゝろ じんじつ 籠めて仕ふる神の道こ つか かみ みち

三千世界に隈もなくさんぜんせかい くま 一度に開く梅子姫いちど ひら うめこひめ

心も勇み身も勇みこゝろ いさ み いさ 父大神が三五のちちおほかみ あななひ

清き御旨に叶ひつつきよ みむね かな 教の道の永久にをしへ みち とこしへ

開け行くこそ尊けれひら ゆ たふと あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましましてみたま さちはへ 天は地となり地は天とてん ち てん

變る艱難の來るともかは なやみ きた 地恩の郷に三五のちおん さと あななひ

嚴の御柱彌高にいづ みはしら いやたか 瑞の御柱永久にみづ みはしら とこしへ

顯幽揃うて立つ上は 如何で揺がむ國治立の

神の尊の御仰せ 心清めて朝夕に

仕へまつれよ諸人よ 神の恵は天地と

共永久に變らまじ あゝ惟神々々

御靈の幸を賜へかし

茲に目度く友彦は黄龍姫と再會し、麻柱の至誠を捧げ、東西相和し相助け、友彦は黄龍姫の忠實なる部下となつて大神の大道を、全島に力の限り擴充する事となつた。いよいよ一同打ち揃ひ、神前に例の如く祝詞を奏上し、宣傳歌を歌ひ終り、十二分の歡喜に満たされて一旦各自の館に歸り、友彦夫婦は貴賓として鄭重なる待遇を受け、數日城内に滞留する事となつた。

(大正一一・七・一一 舊閏五・一七 加藤明子録)

第一四章 園遊會〔七六〇〕

オーストラリアのひとつ島は、現在は殆ど夏計りなれども、此時代は僅かに春夏あきふゆの區別がついて居た。日中は年中殆ど同じ暑熱であつたが、朝夕夜間の氣候しぜんには自然に四季の區別を現はして居た。

我國で言へば殆ど晩夏の頃、城外の天を封じて立てる老樹の遠近に生茂る馬場わがくにに於て友彦夫婦の爲に大園遊會が開かれた。四面山に包まれたる地恩郷は、平地おいとして全島に於ける第一の高地であつた。谷川は南北を流れ、崎嶇たる岩石、谷々に壁の如く突つ立ち、奇勝絶景竝ぶものなき景勝の地である。

一つ島に於ける景勝の地は、第一に諏訪の湖、第二にヒルの郷のクシの瀧壺の近邊に指を屈するのである。されどヒルの溪谷は區域最も狭くして、平地は殆ど無く、地恩郷に對して、其大小廣狹の點に於て比べものにならない。土地高く風な清く、且つ面積廣く、大樹鬱蒼たる點は、全島第一と稱せられて居る。

門外の廣場の森林には所々に赤、白、黒、青、紅等の面白き形をしたる岩石、

地中より頭をもたげ、一見して大なる花の地上より咲き出でたる如く思はる。岩
石の大部分は、蓮華の花の咲き出でたる如き自然形をなし、國人は單に之を蓮華
岩と云ひ、或は蓮華の馬場とも名づけて居る。

黃龍姫以下數百人の人々は、右往左往に、思ひ思ひの遊戯をなし、歌ふ、踊る、
舞ふ、岩笛を吹く、石を拍つ、一絃琴、二絃琴、三絃琴の音嚙唳として響き、横
笛、縦笛、磬盤などの音は最も賑しく、思はず身を天國にのぼせ、妙音菩薩の來
りて樂を奏する如き感到打たれ居る。梅子姫は中央の最も高き紫色の蓮華岩に登
り、面白き歌を歌つて興を添へた。

芙蓉山と聞えたる

天教山に現れませる

木の花姫の御身魂

一度に開く梅子姫

皇大神の統御げる

皇御國のスの種を

四方に間配り大八洲

數ある中に自轉倒の

島根の國の眞秀良場や

青垣山を繞らせる

下津磐根の蓮華臺

芙蓉山の御移寫

神の教に國人の

心も開く蓮葉の

匂ひ出でたる地恩郷

蓮華の花の此處彼處

咲き亂れたる其臺

神の教を麻柱ひし

貴の御子たる八乙女の

開き初めたる梅子姫

三千世界の神人を

招き集ふる此齋場

教の稜威も高天の

原に坐します日の御神

月の御神の御惠の

御水火を受けて黄龍姫

大海原の波を分け

雲を起して久方の

天津御國に昇る如

御稜威畏き神司

母と現れます蜈蚣姫

豊葦原の中津國

メソポタミヤの顯恩郷

エデンの河と諸共に

清き譽を流したる

バラモン教の神司

鬼熊別の片柱

天地四方の神人を

誠まことの道みちに救すくはむと

大國おほくに別の御言みこともて

埃及國エジプトこくや波斯フサの國くに

印度ツキの國くにまで教線けうせんを

布しかせ給たまひし雄々ををしさよ

父大神ちちおほかみの神言みこともて

天あめの太玉ふとたま神司かむつつかさ

エデンの河かはを打うち渡わたり

顯恩城けんおんじやうに出いでまして

天津誠あまつまことの御教みをしへを

うまらに委曲つばらに宣のりつれど

天運てんうん未だ循環めぐり來こず

鬼雲彦おにくもひこの荒神あらがみは

神かみの心こころを慮はかり兼かね

雲くもを霞かすみと自轉倒おのころの

島しまに渡わたらせ給たまひつつ

率ひきゆる人ひとも大江山おほえやま

稜威いづの砦とりでを構かまへ立たて

教をしへの花はなの開ひらく様さま

【みくに】ヶ嶽がだけや鬼ヶ城おにがじやう

北きたと南みなみにバラモンの

教をしへの射場いばを造つくりつつ

同おなじ天地てんちの珍うづの子こと

生うまれ出いでたる三五あななひの

神かみの司つかさに追おはれまし

再ふたたび波斯フサの本國ほんこくへ

歸かへり給たまひし痛いたましさ

あゝさり乍ながら さり乍ながら

此世を造りし大神の
恵の露は天地の

百の神人草木まで
漏れ落ちもなく露ひて

誠の道に敵もなく
味方の差別もなき世をば

小さき意地に搦まれて
右や左や北南

種々雑多と名を變へて
荒び居るこそ悲しけれ

轉迷開悟の蓮花
愈開く常磐木の

松の神代のめぐり來て
敵と味方の區別なく

心合せし一つ島
地恩の郷に三五の

教を開く嬉しさは
高天原に手を曳いて

歡ぎ遊べる如くなり
あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして
一度叛きし友彦が

心の空に月は照り
輝き渡る今日の宵

國治立大神や
神素盞鳴大神の

此有様を詳細に
眺め玉へば如何ばかり

歡よろこぎ給たまふか白しら雲くもの

包つつむ谷たに間まぞ床ゆかしけれ

科しな戸どの彦ひこや科しな戸ど姫ひめ

御み靈たま幸さちはひましまして

地ち恩おんの郷さとや吾われ々われが

心こころを包つつむ雲くも霧きりを

一ひと日ひも早はやく吹ふき拂はらひ

天てん國こく淨じやう土どの眞しん相さうを

宇う宙ちゆう主しゆ宰さいの大神おほかみの

御み前まへに現あらはし奉まつるべし

神かみは吾われ等らと俱ともにます

親おや子こ兄けい弟てい睦むつび合あひ

此この樂らく園えんに神かみ國くにの

春はるを樂たのしむ一いち同どうの

花はなも開ひらきし蓮れん華げ臺だい

堅かき磐は常とき磐はの岩いはの上へに

千ち代よも八や千ち代よも萬よろ代づよも

榮さかえませよと願ねぎまつる

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

御み靈たま幸さちはひましませよ

と歌うたひ終をはつて、紫むらの蓮れん華げ岩いはを下くだり來きたり、芝しば生ふの上うへに息いきを休やすめ居ある。

蜈むか蚣で姫ひめは稍やや【く】の字じに曲まがつた體からだを揺ゆぶり乍ながら、兩りやう手てを擴ひろげて手て付つき面おも白しろく、

廁かばの水みづ浸みづき然ぜんとして歌うたひ踊をどり始はじめたり。

豊葦原の瑞穂國

根分けの國と傳はりし

メソポタミヤにバラモンの足場を作り天が下

世界十字に踏みならず 蜈蚣の姫の身の果は

メソポタミヤを後にして 波斯を越えて印度の國

大空驅ける磐船に 身を任せつつ自轉倒の

島に渡りて彼方此方と 教を開き黄金の

玉の所在を探らむと 思ひし事も水の泡

阿波の鳴門や淡路島 生命の瀬戸の海越えて

小豆ヶ島や南洋の 龍宮島のアンボイナ

男瀧女瀧に身を浴し 浪路も遠き太平の

洋を渡りて進み来る 船脚早く沓の島

ニュージールランドの玉森に 一度息を休めつつ

波を迂りて此島に 着くや間もなく地恩郷

神の立てたる三五の 教柱の黄龍姫

來りて見れば吾娘

小絲の姫の面影は

老の眼もうるみなく

擬ふ方なき愛娘

教の光久方の

天津御空の雲分けて

天降りましたる朝日子の

日の出神の御守り

金勝要大神が

御分靈なる眞澄姫

天と地との神々の

其懷に抱かれて

安々送る老の身の

心に懸る雲もなし

さはさり乍ら白雲の

彼方に遠き波斯の國

夫の命は黃龍姫が

少女の命の今日の様

未だ知らずにましまさむ

翼なき身は如何にせむ

空漕ぎ渡る鳥船も

皇大神の警告に

今是用ゆる術もなく

空行く雲の吾爲に

篤き心のあるならば

一日も早く夫の邊に

吾等親子の喜びを

一日も早く傳へかし

遠く四方を見渡せば 霧に隠れし地恩郷

何の目的も梨礫 鳩の使の片音信

執着心の曲鬼を 伊吹被ひに打被ひ

速川の瀬に清めむと 心に覺悟は定め乍ら

忘れ難きは恩愛の 止むる由なき吾涙

梅子の姫よ友彦よ テールス姫よ宇豆姫よ

スマートボール鶴公よ 其他竝居る教子よ

神の眞道に入り乍ら 心もつれし吾姿

眺めて笑うて下さるな 道は道なり親と子の

情は世界の始めより 今に變らぬ玉椿

千代も八千代も永久に 動かぬものと神直日

見直しまして何時迄も 吾等親子を親子とし

堅磐常磐に道の爲 盡させ給へ惟神

神の御前に久方の 天津祝詞の聲清く

仕へ奉らむ蜈蚣姫

あゝ惟神々々

神に誓ひし教子よ

教を守るピュリタンよ

と齒の抜けた口から、不整調な言靈にて歌ひ終り、蓮華岩の上に腰を打下し、ホツと息を吐いた。續いてスマートボール、宇豆姫、鶴公其他の歌は數多あれども、山鳥の尾の餘り長々しければ省略す。

黄龍姫以下幹部は、園遊會を切りあげて表門を潛り、各居室に姿を隠した。貫州、武公、マイル、ミューズ其他の連中は、後に残りて酒に酔ひ、クダを巻き、解放的氣分になつて、彼方に五人此方に三人と、木蔭に足を投げ出し、芝草を

【むしり】乍ら雑談に耽つて居る。マイルは口を纏れさせ乍ら、

「モシモシ、貫州のボールさま……蜈蚣姫さまも昔はバラモン教の立派な大將株で終局にや海洋萬里の自轉倒島まで玉を探しに往つたり、宣傳をされたり、三五教を目的の敵の様に敵對うて御座つた癖に、自分の娘が三五教の神司、地恩城の女王さまになつたと思つて、俄に心機一轉し、三五教を此上なき結構な教の様に思

つて御座るのは、チツと可笑しなものですな。梅子姫さまに、最前の様に耳の痛い歌を歌はれて、何とも思筈、自分も立つて踊り狂ひ、妙な歌を歌はしやつたが、一體全體何の態だ。俺やモウ胸糞が悪くて、三五教にお仕へするのにも厭になつて来た。……貫州さま、今日限りお暇を頂戴して、又元の土人の仲間へ還元しますから、どうぞ悪からず御承認を願ひます。と巻舌になり、フーフと酒臭い息を貫州に吹き掛け乍ら、覗き込む様にして詰寄つた。

貫州「神様の道の信者にはイロイロと徑路があるものだ。悪いと思へば直に改良するのが所謂惟神の道だよ。貴様の様な一本調子で、神様の信仰が出来るものか。要するに神の道は理智に依つて「かたづ」けようと思つても駄目だ。信入も悟入も、左旋も右傾も、消極も積極も一寸見た所では大變にかけ離れて居る様だが、實際は皆一體だ。何方から入信つた所で、落着く所は天地創造の元の神様を信仰するのだ。所謂江南の橘は江北の枳殻だ。バラモン教であらうが、三五教であらうが、誠の道に二つはない。畢竟人間の考へに依つて種々の雅號を附けたり、勝

手な障壁を拵へて威張る丈のものだよ。蜈蚣姫さまの……吾々は……態度に就いては大賛成だよ。貴様もそこまで理屈を言ふ様にならば、最早信仰の門口に這入つたのだ。宅の女房の名がお竹でも、お松でも別に變りはないぢやないか。お竹の名がお松にならうと、お松の名がお梅にならうと、人間其者はチツとも變りがないと同様に、神様は一株だから、よく考へて見て、其上に去就を決した方がよからうぞ。バラモン教と云ふも三五教と云ふも、但しジャンナイ教と云ふも、ウラル教も、教を傳ふる人間の解釋に依りて、深淺廣狹の區別が付くまでだ。兔も角深く廣く、入り易く、愉快的教を信仰して、其日其日を安心立命して行くのが、神の教を信ずる信者の本領だ。モチツト話してやりたいが、さうツブロクになつて居ては、折角の高論卓説も貴様の耳には這入るまい。先づ酔が醒めてから、悠りと説明するから、明日の事にしよう」

「マール、何だか知らぬが、チツとばかり、氣に喰はなくなつて來たのだ。そんなら明日改めて聞かして貰はうかい」

と行歩蹣跚として、目も霞、右の腕で兩眼を横にツルリと撫で、鼻をツンとかみ

乍らあつちやにヨツたり、こつちやへヨツたり、八人脚になつて門内へよるめき入る可笑しさ。一同は手を拍つて「ワツハ、ハ、ハ」と笑ひ轉げる。

紺碧の空は俄にドンヨリとして來た。ネルソン山の峰を壓して、天空高く現はれ來る異様の女神七八人、瞬く間に朱欄碧瓦の神殿現はれ、數多の人々の影、手に取る如く天空に筍の生えた如く、ポツリポツリと現はれ來る。

武公は初めて此蜃氣樓を眺め、「アツ」と驚き、黄龍姫に注進せむと、轉けつ輾びつあつちやへヨツたり、こつちやへヨツたり、八人連れの歩みをし乍ら、奥深く姿を隠し一同は天を仰いで、蜃氣樓の立派なるに打驚き、園遊會の餘興だと、興がつて居る。

武公の注進に依りて、黄龍姫、梅子姫其他の最高幹部は高殿に上り、ネルソン山の頂上より此方に向つてパノラマの如く、チクチクと位置を轉じ來る、諏訪の湖の蜃氣樓を熟視すれば、數多の女神に手を曳かれ、左守神たりし清公其外四人連れ、何事か神勅を受け居る姿を眺めて、一同は手を拍つて驚喜し、直に天に向つて天津祝詞を奏上した。蜃氣樓は益々明瞭に、且つ左右に長く展開し、湖面に

浮かぶ白帆まで判然と映つて居る。黄龍姫は蜃氣樓を見て言靈の歌を歌ひ始めた。

【ア】ふげば高し久方の

【イ】域の空に現はれし

【ウ】ツの宮居の蜃氣樓

【エ】にある様な姫神の

【オ】ホ空高く現はれて

【カ】ミの御前を伏し拜み

【キ】ヨき正しき太祝詞

【ク】モ井に高く詔りあげし

【ケ】色は殊に美はしく

【コ】バルト色の山の上を

【サ】シ登りたる清公の

【シ】口き顔容珍の衣

【ス】ワの湖影清く

【セ】マリ來れる地恩城

【ソ】ラ高々と現はれぬ

【タ】カ天原の神の國

【チ】五百萬の神人の

【ツ】キ添ひまつる崇高さよ

【テ】二手に玉を携へて

【ト】コ世の空を打眺め

【ナ】ガき影をば和田の原

【ニ】シや東や北南

【ヌ】りたる如き空の色

【ネ】底の國まで照り渡る

【ノ】 ゴミも遂げて神人が

【ハ】 ナの顔容月の眉

【ヒ】 ダリ右りの侍女は

【フ】 ジの額に雪の肌

【ヘ】 グリの山のそのの如

【ホ】 ホベも春の花の色

【マ】 ナコ涼しく眉濃く

【ミ】 ダレ髪さへ顔に垂れ

【ム】 ツび合うたる神と人

【メ】 グリ大足神の世の

【モ】 モの花咲く彌生空

【ヤ】 千代の君を壽ほぎて

【イ】 ツミも清き湖の底

【ユ】 フに言はれぬ麗しさ

【エ】 に見る如き光景は

【ヨ】 にも稀なる眺めなり

【ワ】 が言靈の清ければ

【ヰ】 づくの空も澄み渡り

【ウ】 きつ沈みつ行雲の

【エ】 らぎ榮えて永久に

【ユ】 サまる御代を守れかし

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

左守神と仕へたる

心の空も清公が

地恩の城を後にして

身を下したる夕力港

屋根無し船に揺られつつ

ヒルの港に漕ぎつけて

谷間に荒ぶ曲津靈を

言向け和しセーランの

山の麓を踏越えて

露の枕も數重ね

一望千里の玉野原

厳しき暑熱を浴び乍ら

進み進んで諏訪の海

湖邊に漸く辿りつき

天津祝詞を奏上し

身褰拂ひてスクスクと

水兒の「みづ」の魂となり

湖中に浮び漂へる

男島女島に助けられ

轉迷開悟の教の花

開いて散りて實を結び

天女の如く淨化して

黄金の船に迎へられ

朱欄碧瓦の高殿に

導かれたる有様は

今日のあたり見えにけり

あゝ惟神々々

神の恵に隔てなし

心の空に塞がれる

雲を拂へば天津日の

光は清く照り渡る

三五の月を包みたる

八重棚雲も忽ちに

科戸 <small>しなど</small> の風 <small>かぜ</small> に拂 <small>はら</small> はれて	圓 <small>ゑん</small> 滿 <small>まん</small> 清 <small>せい</small> 朗 <small>らう</small> 望 <small>もち</small> の月 <small>つき</small>
盡 <small>つ</small> きせぬ神 <small>かみ</small> の御 <small>み</small> 惠 <small>めぐみ</small> は	天 <small>あまた</small> 垂 <small>た</small> る地 <small>ち</small> 垂 <small>た</small> る海 <small>うみ</small> に垂 <small>た</small> る
人 <small>ひと</small> の身 <small>み</small> 魂 <small>たま</small> にたり充 <small>み</small> ちて	一 <small>ひと</small> 二 <small>ふた</small> 三 <small>み</small> 四 <small>よ</small> 五 <small>いつ</small> 六 <small>む</small> つ
七 <small>なな</small> 八 <small>や</small> 九 <small>この</small> つ十 <small>たり</small> の空 <small>そら</small>	百 <small>も</small> 千 <small>ち</small> 萬 <small>よろづ</small> の神 <small>かみ</small> 達 <small>たち</small> の
守 <small>まも</small> りも深 <small>ふか</small> き龍 <small>りう</small> 宮 <small>ぐう</small> 島 <small>じま</small>	妾 <small>わらは</small> もいかに此 <small>この</small> 儘 <small>まま</small> に
地 <small>ち</small> 恩 <small>おん</small> の郷 <small>さと</small> に悠 <small>い</small> 々 <small>う</small> と	空 <small>むな</small> しく月 <small>つき</small> 日 <small>ひ</small> を過 <small>すこ</small> さむや
いざこれよりは村 <small>むら</small> 肝 <small>きも</small> の	心 <small>こころ</small> を清 <small>きよ</small> め魂 <small>たま</small> 磨 <small>みが</small> き
清 <small>きよ</small> きが上 <small>うへ</small> にも清 <small>きよ</small> くして	神 <small>かみ</small> の集 <small>あつ</small> まる龍 <small>りう</small> 宮 <small>ぐう</small> の
諏 <small>す</small> 訪 <small>は</small> の湖 <small>うみ</small> へと立 <small>たち</small> 向 <small>むか</small> ひ	天 <small>てん</small> 火 <small>くわ</small> 水 <small>すゐ</small> 地 <small>ち</small> と結 <small>むす</small> びたる
珍 <small>うづ</small> の寶 <small>たから</small> を拜 <small>はい</small> 戴 <small>たい</small> し	自 <small>おの</small> 轉 <small>ころ</small> 倒 <small>ろ</small> 島 <small>じま</small> に宮 <small>みや</small> 柱 <small>はしら</small>
太 <small>ふと</small> しき建 <small>た</small> てて永 <small>とこ</small> 久 <small>しへ</small> に	鎮 <small>しづ</small> まり居 <small>ゐ</small> ます大 <small>おほ</small> 神 <small>かみ</small> の
御 <small>みま</small> 前に捧 <small>ささ</small> げまつりなば	三 <small>あな</small> 五 <small>な</small> 教 <small>ひけう</small> の礎 <small>いし</small> は
云 <small>い</small> ふも更 <small>さら</small> なり天 <small>あめ</small> が下 <small>した</small>	四 <small>よ</small> 方 <small>も</small> の國 <small>くに</small> 々 <small>ぐに</small> 永 <small>とこ</small> 久 <small>しへ</small> に
黄 <small>わう</small> 金 <small>こん</small> 世 <small>せ</small> 界 <small>かい</small> を造 <small>つく</small> りなし	貴 <small>たふと</small> き神 <small>かみ</small> の功 <small>いさ</small> 績 <small>をし</small> を

堅磐常磐に現はさむ
あななひけう 三五教の人達よ

天に輝く屋氣樓
かみや しんきろう
神の姿を目のあたり

眺めし上は如何にして
なが うへ いか
安きを貪る時ならむ

一日も早く片時も
ひとひ はや かたとき
妾と共にネルソンの

高嶺を越えて西の空
たかね こ にし そら
虎狼や鬼大蛇

醜の曲津の猛ぶ野を
しこ まがつ たけ の
神の光を身に浴びて

安々進み行かむとす
やすやす すす ゆ
早々用意召されよ』……と

促す姫の一言に
うなが ひめ ひとこと
蜈蚣の姫を始めとし

神の花咲く梅子姫
かみ はな さき うめこひめ
宇豆姫友彦伴ひて

テールス姫も諸共に
ているす ひめ もろとも
旅装を整へしづしづと

地恩の城を後にして
ちおんしろ あと
身装も軽き蓑笠の

露押し分けて進み行く
つゆお わ すす ゆ
あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

第一五章 改心の實〔七六一〕

黄龍姫、梅子姫、友彦、テールス姫、蜈蚣姫の五人は共に、地恩城を後に數百里、山路を越えて玉野原の諏訪の湖の龍宮城に進むこととなつた。後には左守、スマートボール夫婦を初め右守鶴公、貫州、武公、マイル、ミューズの幹部連をして留守師團長とし、草の蓑、竹の小笠の軽き扮装、タロの木の子をつきながら、岩石起伏せる羊腸の小徑を上りつ下りつ、谷を飛び越え谷間を傳ひ漸くにして、ジャンナの友彦が割據せし郷に着いた。

鬼の様な荒男、赤銅の様な顔に青い鯨を、顔一面に彩りし者を先頭に、老若男女が六ヶ敷い顔して黄龍姫の一行を『ウワーウワー』と鬨の聲を擧げ乍ら歓迎した。晝尚暗き森林に包まれたる此郷は、一見鬼の様な人種計りであるが、至つて

質朴で且つ正直で信仰心に富んで居た。曲つた鼻の赤い友彦を、天來の救世主と仰いで、尊敬した程の郷人は、天女の如き黄龍姫、梅子姫の玉を欺く清き姿を眺めて、天の河原よりネルソン山に鳥船に乗り天降り給ひしを、ジャンナの郷の救世主友彦夫婦が奉迎して歸りしものと固く信じ、一齊に砂糖屋の十能見た様な、大きな黒い手を擴げ、

土人「ウツポツポ　ウツポツポ、オーレンス、サーチライス、ターレンス、チーター　チーター」

と叫び乍ら歓迎の意を表した。此意味は、「神様が、天の御使か、但は吾等を救ふ光明の神か、實に立派な大救世主が、此郷に御降り遊ばした。吾々は最早絶対に悩みに遇ふこともなく、永遠無窮に天國淨土の樂みを味はうことが出来るであらう。木の實は豊に實り、鼓腹擊攘の恵みに浴することは火を睹るよりも明瞭だ。有難い、勿體ない、貴い、嬉しい。吾々郷人は力の限り心の極みを、此生神様に捧げませう」と言ふ事である。……ジャンナの郷の救世主と仰がれたる友彦は、郷人に向ひ、

「ターリスト、テールターイン、ハールエース、オーレンス、サーチライス、カール、ライド」

と叫ぶ。此聲に一同は大地に平伏し嬉し涙を流して歡喜した。友彦は又もや、

「ハール ハール」

と手を舉げて叫ぶや、大勢の土人は一行を手車に乗せ、三五の神を祭りし稍廣き館の中に、御輿を昇ぐ様な鹽梅式で何事か分らぬ事を喋り乍ら奥深く送り行く。

黃龍姫一行は友彦の館の奥深く招かれ、色々珍らしき果物を響應され、且つバナ、の味に舌鼓打ち乍ら、一二日此處に逗留し、郷人に對して黃龍姫、梅子姫よりバプテスマを施し、宣傳歌を教へた上、數十人の郷人に送られ、一行五人は漸くにして玉野ヶ原の廣場に無事安着することとなつた。

途々木の實を喰ひ、谷水を飲み、芭蕉の葉を褥となし乍ら、猛獸、大蛇の群に言靈を授け歸順悅服させつつ愈此處に金銀の砂輝く廣野ヶ原に辿りつく。一行は諏訪の湖の畔に建てたる小さき祠の前に端坐し、天津祝詞を奏上し、傍の椰子の樹の森に一夜を明かすこととなりぬ。

エスタン山の後方を覗いて現はれたる大太陽は、諏訪の湖水の魚鱗の波に映じ、金銀の蓆を敷き詰めたる如く、其麗しさ譬ふるにも物なく、一行五人は湖水に身體を清め、七日七夜此處に襖を修し神恩を感謝せり。

早や夕陽も傾いて得も言はれぬ麗しき鳥の聲、埒を求めて各密林に歸り行く。

純白の翼の大鳥は暗を縫うて低く黄昏時より現はれ來り、湖面を縦横無盡に翱翔する。其數幾千萬羽とも數へ難く、月無き夜半も明るき許りの光景なり。是は信天翁の祖先でアンボリーと言ふ大鳥なりける。

一行五人は椰子の樹下に身を潛め、天津祝詞を奏上し夜の明くるを待つ。夜明けに間近くなりたる時しも、頭上にバタバタと鳥の羽ばたき激しく聞え來たる。見れば兩翼の長さ三文許りのアンボリー、椰子の樹上にとまつて、一同の頭を被ふて居る、それが夜明けに間近くなつたので一時に立ち上つた音である。一同は鳥の飛び行く方面を目も放たず打看守れば、ほんのりと薄紅くうす白く大空を染めながら、際限もなき大原野を西北の空を指して、一羽も残らず飛去れり。

ジャンナの郷に三五の
神を祀りし友彦が

館に一行夜を明かし
一日二夜を逗留し

タイヤ、ブースを初めとし
數多の土人に皇神の

誠の道を説き諭し
鎮魂やバプテスマ

一人も残らず施して
晝なほ暗き森林の

小徑を傳ひ郷人に
賑々しくも送られて

漸くセムの谷間に
辿り來れる折柄に

黄龍姫は皇神の
珍の命の靈借りて

送り來りし郷人に
厚く言葉をかけながら

東と西に別れつつ
露の枕も數多く

重ねて此處に玉野原
金銀輝く途の上

勇み進んで諏訪の湖の
邊にやうやう安着し

祠の前に端坐して
一行五人が安穩に

訪ね來りし神恩を
感謝し終り清鮮の

湖水に身をば浸しつ

七日七夜の魂洗ひ

椰子樹の蔭に身を潜め

夜明けを待てる折柄に

樹上に聞ゆる羽ばたきの

音に驚き眺むれば

雪を欺く白翼の

パツと開いた大鳥の

空を封じて数多く

西北指して飛んで行く

一行五人は空中を

仰ぎ見つむる折もあれ

黄金の翼に乗せられて

此方に向つて飛び来る

四五の神人悠々と

湖水を目蒐けて降り来る

其光景の崇高さに

五人は思はず手を合せ

祝詞を唱へつ眺め居る

黄金の鳥に乗せられし

男女五人の神人は

波の上をばスレスレに

北に向つて進み行く

これぞ玉治別宣使

初稚姫や玉能姫

久助お民の五人連

神の御言を畏みて

貴の教を隈もなく

傳へ導く神の業　うま怜に委曲に宣り了せ
玉依姫の御使の　黄金色の靈鳥に
救はれ御空を翔りつつ　歸り來れる生神の
通力得たる姿なり　嗚呼惟神々々
神の教の尊さよ。

翼を一字に擴げた金色の靈鳥は、神の使の八咫鳥である。玉治別一行を乗せた五羽の八咫鳥は、日光に照り輝きて中空にキラリキラリと光を投げながら、地上までも金光を反射させ、諏訪の湖邊に飛び來り、紺碧の波の上を這つて際限もなき湖水を、北へ北へと進み行く。

梅子姫、黄龍姫は飛び立つばかり此姿を見て驚き且つ喜べり。一行の胸の裡は譬へがたなき崇高にして且壯快の思ひが漂うたからである。

友彦、黄龍姫様、梅子姫様、地恩城に於て園遊會の時、天空高く現はれた屋氣樓の光景、紺碧の湖水現はれ、四方を包む青山の崇高なる姿は、今此湖面を見ると

寸分の差も無い様ですな、大方清公、チヤンキー、モンキー等の、女神に導かれ結構な御用を仰せつけられて居た所も、此聖地で御座いませうかなア

黄龍姫「妾もそれに間違ひないやうな感じが致します。昔から人跡絶えしオセア

ニアの秘密郷、斯様な立派な湖があらうとは、夢にも知りませなんだ。何とかし

て神様の御力を借り、此湖水を渡つて見たいものですなア

梅子姫「蜃氣樓で拜見した時には純白な白帆が澤山に航行して居ましたが、船は

一隻も見えないぢやありませんか。大方アンボリーの飛交ふ影が船のやうに見え

たのでせうかな

友彦「サアさうかも知れませぬ。……黄龍姫様、船が無ければ渡る譯には行きま

せぬ。玉治別や初稚姫様の様に、黄金の鳥が迎ひに来て下さらば實に結構だが、

船も無ければ鳥船もなく未だ吾々は御神慮に叶ふ所迄身魂が磨けて居ないのでせ

う

黄龍姫「神様は一点の曇りなき水晶魂でなければ、肝腎の神業にはお使ひ下さい

ませぬ。折角此濱邊まで参つたものの、斯の如く三方は壁を立てた様な岩山、何

程足の達者な者でも鳥類でない以上は越す事は出来ずまい。然しながら此處まで無事に着いたのも全く神様のお恵み、此處でもう一層徹底的の心の修業を勵みませう。地恩城の女王だとか、ジャンナの郷の救世主などと言はれて得意になつて居るのが、これが第一神様の御心に叶はないのでせう。同じ天地の恵に生れた人の子、善悪美醜の區別はあつても神様の愛には些つとも依怙鬲肩はありませんまい。こりやもう一つ身魂を立て直さなくては駄目でせうよ。勿體なくも神素盞鳴大神様の御娘御、梅子姫様を蔭の御守護とし、賤しき妾の身を以て地恩城の女王と呼ばれ、神司と言はれて、勿體なくも直々の御血筋の上位に立つて居たのは、恰度頭が下になり、足が上になつて居るやうな、矛盾撞着の遣り方であつた。…ア、梅子姫様今までの御無禮を何卒お赦し下さいませ。決して貴女を押し込め私に立つて覇張らうなどと云ふやうな、賤しい心はチツトも持つて居ませなんだ。然し乍ら名譽心に驅られ、本末自他公私の別を、不知不識の間に犯して居りました。貴女と吾々は天地霄壤の懸隔がございます。尊卑の別も辨へず甚だもつて不都合の至り、今改めてお詫を仕ります。さうして地恩城の女王たる地位を神

様にお返し申し、生れ赤子の平の信者となつて御神業に奉仕し、貴女様を女王と
も教主とも仰いで、忠實にお仕へ致しますから、不知不識の御無禮御氣障、何卒
神直日大直日に見直し聞直し下さいますように、黄龍姫が眞心よりお詫仕ります
と涙を瀧の如く兩眼より滴らし、悔悟の念に堪へざるものの如く涕泣嗚咽終に其
場に泣き伏した。梅子姫は儼然として、
「黄龍姫どの、貴方は結構な御神徳を頂きました。妾は神素盞鳴大神の生みの子
と生れ、木の花姫の生宮として今日迄、貴方のお傍に身を下し、神業を輔佐して
参りました。貴方の御言葉を今日只今迄、實の所は待つて居たのでございます」
と微笑を浮かべて曰りつれば、友彦は又もや兩眼に涙を浮かべ乍ら、
「私は生れついでにの狡猾者、到る所に悪事を働き、【まぐ】れ當りに鼻の赤きを
取得にてジャンナの郷に持て馳され、救世主と呼ばれ乍ら好い氣になり、心にも
無き尊敬を受け、天來の救世主と化け濟まして居た心の汚さ、イヤもう塵埃に等
しき吾等の身魂、どうして肝腎要の御用にお使ひ下さいませう。……何卒々々梅
子姫様、貴女様より大神様に重々の罪お赦し下さいます様お取成し願ひ上げ奉り

ます。又私は決して今後は、人様以上に結構な御用をさして頂かうとは夢にも思ひは致しませぬ。如何なる事にも構ひませぬから、どうぞ神様のお綱の切れぬ様に、大神様にお詫のお取次偏に希ひ上げ奉ります」

梅子姫「貴方の心の園の蓮花、轉迷開悟の音を立て開き初めました。ア、いい所で改心して下さいました。これで梅子姫も父大神より命ぜられたる御用の一端が出来たと申すもの、私の方より貴方に對して感謝致します」

と嬉し涙を兩眼に浮かべ、述べたつれば友彦は嬉しさ身に餘り、大地にひれ伏し顔も得上げず、歡喜と悔悟の涙に咽び返つて居る。

「蜈蚣姫は梅子姫の前に手をつかへて、梅子姫様、今迄の御無禮何卒々々お許し下さいませ。私は貴女様の御存じの通り惡逆無道の限りを盡した、鬼婆の様な惡人で御座いました。地恩城に参りました娘の出世を見るにつけ、不知不識に高慢心が起り、且つ愛着の念に驅られ、肝腎の大神を第二に致し、且つ貴女様に對し、平素輕侮の目を以て向つて居りました心盲で御座います。地恩城に於て友彦が爲め園遊會を開いた折、貴女様は紫の

蓮華岩の上に立たせ給ひ、私の素性を歌つて下さつた時の私は、心の中に非常な不満を抱きました。今思へばあの時のお言葉の中には、大神様の大慈大悲の救ひの御心……なぜ其時に私は氣が附かなかつたでございませう。森羅萬象に對し一切色盲の私、不調法ばかり致しまして神様に對し、又貴き貴女様に對してお詫申上げる言葉もございませぬ。どうぞ母子の者も憫み下さいまして、今迄大神様に敵對申した深い罪を、お詫下さいますようにお願い申します』

とワツとばかりに聲をあげ泣き伏するにぞ、梅子姫は莞爾として、

「ア、蜈蚣姫様、貴女は今日只今初めて誠の神柱になられました、結構でございます。どうぞ此後とても妾と共に三五の大神様の御用に誠心誠意御盡力あらむことを希望致します。如何なる罪穢れ過も梅子姫が代りて千座の置き戸を負ひますれば御安心下さいませ』

蜈蚣姫は「有難うございます」と言うたきり、大地にかぶりつき有難涙に咽び入る。テールス姫は又もや梅子姫の前に兩手をつき、

「何分罪多き私、不知不識の御無禮お氣障が何程ございませうとも、何卒お赦し

下くださる様やう、神界しんかいへお願ねがひ下くださいませ」

と合掌がつしやうして頼たのみ入いる。

「貴女あなたは此中このなかでも最もつとも罪つみ軽かるき、身魂みたまの清きよらかな神かみの子こです。今日こんにち神界しんかいに對たいし差さし
たる不調法ぶてうはふもごさいませぬ。今後こんごも今迄いままで通り過あやまち無なき様やう、神かみの御用ごように御奉仕ごほうしあら
むことを希望きぼう致いたします」

と答こたふれば、テールス姫ひめも梅子姫うめこひめが慈愛じあいの言葉ことばに、有難涙ありがたなみだをしぼるのみであつた。

梅子姫うめこひめは湖面こめんに向むかひ合掌がつしやうしながら何事なにことか暗祈あんき黙もく禱たうする事こと暫しばし、忽たちまち何處いづこともな
く微妙びめうの音おん樂がく聞きえ、西北せいほくの空そらを封ふうじて、此方こなたに向むかつて一瀉いつしやせんり千里いさほひの勢いきほひにて飛とび來きたる
以前いぜんのアンボリー、幾百いくひやくともなく、翼つばさを竝ならべ、湖上こじやう目め蒐がけて飛とび歸かへる其麗そのうらしさ、
繪ゑにも寫うつせぬ眺ながめなり。

(大正一一・七・一一 舊閏五・一七 谷村眞友録)

梅子姫は湖面に向ひ手をさし伸べて二三回手招きするや、島影より純白の帆を
風に孕ませ、金銀珠玉を鏤めたる目無堅間の神船は、金波銀波を左右に分け乍ら
此方に向つて進み来る。船中には清公、チャンキー、モンキー、アイル、テーナ
の五人が操縦し、艫櫂の役を勤めて居る。梅子姫は清公に會釋し乍らものをも言
はずヒラリと船に飛び乗れば四人は恐る恐る續いて船中の人となつた。清公の一
隊五人も、梅子姫の一队五人も目と目を見合し軽く目禮したまま一言も發せず、
十曜の紋の十人連れ、靜に波を蹴立てて又もや吹き来る返し風に帆を孕ませ、紫
色の樹木繁茂せる浮島を數多越え乍ら、海底金剛石の如く處々に光る麗しき光景
に見惚れつつ、雲を壓して建てる朱欄碧瓦の樓門の仄近く見ゆる磯端に船は着け
られた。

清公は一同に手招きし乍ら樓門の方に向つて案内する。梅子姫を先頭に蜈蚣姫、
黃龍姫其他一同一列となつて、金光輝く平坦なる砂道を徐徐と息を凝らして進み
行く其靜けさ。樓門に進むや否や白衣の神人、門の左右に威儀を正して立ち、一
人は大幣、一人は鹽水を持ち、一行を一人々々大幣、鹽水にて清め乍ら通過せし

む。

行く事數丁、青紫の樹木、庭園に疎に樹ち、黄、紅、白、紫、紺、赤、緋色の花は芳香を薰じ艶を競うて居る。漸く黄金を以て造られたる中門の前に進めば、威儀儼然たる白髮の神人、黄金の盥を一同の前に差し出し手洗を使はしめ、手洗の儀も相濟み之よりは瑪瑙、一しゃこ等の階段を幾百ともなく登り詰め、山腹の眺望佳き聖域に着く。後振りかへり眺むれば諏訪の湖水は金銀の波漂ひ日光は湖面に映じて搖ぎ、白帆は右往左往に蝶の如く行き交ひ、大小の島々には色々の花咲き満ち、恰も天國淨土も斯くやあらむと、一同は眼を据ゑて時の移るも知らずに見惚れ居る。

暫時あつて漆の如き黒髪を背後に垂れたる妙齡の美人、皮膚濃かにして目許涼しく口許締まり、薄絹の綾を身に着け、長柄の唐團扇を杖に突き、此方に向つて悠悠と進み來る十二人の神使は、梅子姫一行の前に立ち現はれ、叮嚀に會釋し、無言の儘梅子姫には、一人は前に一人は後に、左右に二人侍りつつ、奥庭目掛けて徐々と歩を運ぶ。八人の女神は黃龍姫以下に附き添ひ、無言の儘奥庭深く進み

入る。

行く事四五丁、此處には白木造りの門が建てられて居る、中よりパツと戸を右に開き現はれ出でしは初稚姫、玉能姫、玉治別、久助、お民の五人。之亦無言のまま先に立つて、遂に一つの飾も無き瀟洒たる木の香薰れる殿内に導き入る。さうして中央の寶座に梅子姫を招ずる。梅子姫を中心に行は半月形となつて座に着く。

高座の白木の扉を左右に引き開け現はれ出でし崇高無比の女神は、五人の侍女に天火水地結の五色の玉を持たせて梅子姫の前に現はれ給ひ、前に立てる侍女の手より、自ら紫の玉を手に取り上げ、初稚姫に渡し給ふ。初稚姫は恭しく拜受し、之を寶座に控へたる梅子姫の手に獻る。梅子姫は莞爾として押し戴き給ふ時、金襴の守袋を一人の侍女來りて獻る。梅子姫は之を受取り直に玉を納め、其儘首に掛け胸の邊りに垂れさせられ、合掌して暗祈黙禱し給うた。梅子姫の姿は刻々に聖さと麗しさを増し、全身玉の如くにかがやく。次に玉依姫は侍女の持てる赤色の玉を取り、玉能姫に相渡すを玉能姫は押し戴き、蜈蚣姫の手に恭しく渡す。次

に玉依姫は侍女の持てる青色の寶玉を取り、之を玉治別に授け給ふ。玉治別は押し戴き直ちに黄龍姫に渡し次に侍女の持てる白色の玉を取り久助に渡し給へば、久助は恭しく拜戴し友彦の手に渡す、又侍女の持てる黄色の玉を玉依姫自らお民に渡し給へば、お民は押し戴きテールス姫に渡す、各一個の玉に對し金欄の袋は添へられた。さうして此玉の授受には玉依姫神を始め、一同無言の間に嚴肅に行はれける。

玉依姫は一同に目禮し奥殿に侍女を伴ひ、一言も發せず悠々として神姿を隠し給ふ。梅子姫外一同も無言の儘龍宮の侍神に送られ、第一、第二、第三の門を潜り諏訪の湖邊に着く。

此時金の翼を擴げたる八咫鳥十數羽飛び來り、梅子姫、黄龍姫、蜈蚣姫、友彦、テールス姫、玉治別、初稚姫、玉能姫、久助、お民の十柱を乗せ、天空高く輝き乍ら萬里の波濤を越えて、遂に由良の聖地に無事歸還せり。

又銀色のアンボリーは湖邊に現はれ、清公、チャンキー、モンキー、アイル、テーナの五人を各一人づつ背に乗せ、天空を驅り地恩城に送り届けたり。金色の

八咫鳥は、其儘肉體を分派し、數百千の斑鳩となり、神の御使として永遠に仕ふる事となりぬ。又地恩城に清公以下五人を屈けたるアンボリーは、地恩城の門前に降り來り、五人を三四間の中空より芝生の上に投げ下したり。

折から月の光を仰ぎ眺め居たるマール、ミューズの二人は、アンボリーの姿を見て魔神の司と見誤り、長き竿を以て力限りに打ち拂へば、五羽のアンボリーは羽翼を傷つけ、クウクウと聲を立てて啼き乍ら、四邊の森林の木下闇に紛れ姿を隠しぬ。

之よりアンボリーを信天翁と言ふ。阿呆拂ひになつたと言ふ俚諺は此因縁に基くと傳へらる。

梅子姫、黄龍姫、蜈蚣姫の自轉倒島に立ち去られし後の地恩城は、暫時清公司をして當主と仰ぎ、鶴公を左守となし、チャンキーを右守となし、又ジャンナの郷はスマートボール、宇豆姫の夫婦之を管掌する事となれり。且つ清公の發起により、地恩城内の最も風景佳き高地を選んで高殿を造り、一つ島の國魂神眞澄姫神を鎮祭し、飯依別神をして宮司となし、久木別、久々別を添へて永遠に奉仕せ

しめける。三五教あななひけうの教をしへは清公きよこう之これを主管しゅくわんし、且かつ全島ぜんたうを統一とういつして國民こくみんを永久とこしへに安泰あんたいならしめたり。あゝ惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ませ。

(大正一一・七・一一 舊閏五・一七 北村隆光録)

第五篇 千里彷徨せんりはうくわう

第一七章 森もりの囁ささやき(七七六三)

黄金こがねの玉たまを紛失ふんしつし、高姫たかひめに追放つゐはうされて、オセアニヤのひと一つ島じまに玉たまの所在ありかを探さぐらむと艱難かんなん辛苦しんくを冒をかして立向たちむかうた黒姫くろひめは、夫高をつとたか山彦やまひこと共にとも、一つ島ひとの酋長しゅうちやうかく格かくとなり、數多あまたの土人どじんを手てなづけ、一時いちじは武力ぶりよくを以もつて東半ひがしはん分の地ちに勢力せいりよくを扶植ふしよくしつつあつた。

其處へ小絲姫、五十子姫、梅子姫、今子姫、宇豆姫の容色端麗なる美人現はれ
來り、土人の崇敬殊に甚しく、高山彦、黒姫も之を排斥するの餘地なきを悟り、
抜目なき兩人は直に猫を被つて小絲姫が部下となり、遂には心より小絲姫に悦服
し、地恩城にブランジ、クロンバーの職を務め、二年三年一意専心に玉の所在
を、土人を以て搜索せしめつつあつた。されども玉らしき物は何一つ手に入らず、
殆ど絶望の思ひに沈む時、高姫其他の一行が此島に來るに會し、最早本島に用は
無し、假令オセアニヤ全島を我手に握る共、三千世界の寶たる三つの神寶には及
ぶ可らず。躊躇逡巡せば、又何人にか寶玉の所在を探られむと、高姫、黒姫、高
山彦は、日頃手撫づけ置きたるアール（愛三）、エース（榮三）の二人を引連れ、
稍廣く大なる樟製の船に身を任せ、夕力の港を祕に立出で、後白浪と漕ぎ出す。
やうやうにして太平洋の波濤を横斷り、數多の島嶼を縫うて馬關を過ぎり、瀨
戸の海に歸還し、淡路の洲本（今の岩屋邊り）に漸く船を横たへ高姫を先頭に一
行五人、洲本の酋長東助が館を指して進み行く。見れば非常に宏大なる邸宅にし
て、表門には二人の門番阿吽の仁王の様に儼然と扣へて居る。よくよく顔を眺む

れば、生田の森の空助館に於て出會した虻公、蜂公の兩人である。

高姫「オ、お前は虻公、蜂公……如何してマア泥棒がそこまで出世をしたのだい。

日の出神の御入來だから、一時も早く館の主東助殿に、日の出神御光來だと報告をしてお呉れ」

と横柄に命令する様に云ふ。

虻公「此頃は御主人はお不在で御座いますから、何人がお入來になつても、此門を通過さしてはならないと言はれて、斯う我々兩人が嚴重に固めて居るのだから、

日の出神さまであらうが、假令國治立尊様であらうが、通す事は罷りなませぬ

ワイ。主人の在宅の時は門番は誰も居ないのだが、主人が一寸神様の御用で、何々

方面へ御越し遊ばし、其不在中に戸惑ひ者……何々が四五人連でやつて來るから、

決して入れてはならぬぞ。若し我命令を破つて門内に通す様な事があつたら、其

方は直に暇を呉れる。さうすれば貴様も虻蜂取らずになつて了ふぞよ……と厳し

き御命令だ絶対に通す事はなりませぬ……なア蜂公、さうぢやないか」

蜂公「さうだ、國依別さまが生田の森からお迎へにお出でた時、鷹姫とか、鳶姫

とか、烏姫とか、黒姫とか云ふ奴がキツと此館へゴテゴテ言うて来るに違ひないから、一度でも顔見知つた虻公、蜂公を門番にして置くがよからう……と云つて、東助さまと相談の上、臨時門番を勤めて居るのだ。神様と云ふものは偉いものだ。チヤンと日の出神様の様に、前に知つて御座るのだから堪らぬワイ、アツハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ

高姫少しく聲を尖らし、

「泥棒上りの虻蜂の分際として、此結構な神柱を鷹だの、鳶だの、烏だのと、何と云ふ口汚い事を申すのだ。大方言依別の奴ハイカラから聞かされたのだらう」
虻公「そんなこたア如何でもよい。誰が言つたのか知らぬが、世界中知らぬ者はありますまい。つひこの近くに結構な玉が隠してあるのに、オーストラリアや三界まで飛んで行くと云ふ羽の強いお前共だから、鳥に譬られても仕方があるまい。グズグズして居ると國依別や東助さまが玉の所在を嗅ぎ出して、又お前さまに取られぬ様にと寶の埋換を遊ばすと見え、何でも立派な玉が聖地へ納まるから、お迎へとか、受取りとかに行かはりました。お前さまの居らぬ間に聖地には……噂

に聞くと、何でも近い内、五色の玉が納まると云ふ事、それなつと受取つて、又
お前さまに隠したら、チツトは高姫、黒姫の病氣も癒るだらうと、國依別さま
が笑ひ半分に言つてましたよ。アハ、ハ、ハ、」
黒姫「あの三つの御寶を、言依別が又埋けなほすと云ふのかい、エー工胸がスイ
とした。初稚姫の様な小チツペや、玉能姫などが末代の御用をしたと思つて……
三十萬年未來までは何と仰有つても申し上げられませぬ……なんて威張つて居つ
たのが……思へば思へば可憐らしいわいの。……それはさうと言依別の奴ハイカ
ラ、クレクレと猫の目程精神が變るのだから、今度は又國依別のヤンチャや、船
頭あがりの東助に御用をさすのらしい。コリヤうつかりとして居られますまい。
……サア蛇、蜂の御兩人、そこまで聞いて居る以上は、モツと詳しい事を御承知
だらう。お前は中々正直者だ、それでこそ御神業が勤まると云ふもの、サア私と
一緒に聖地へ歸り様子を偵察して、末代の御神業に仕へませう。其代り此高姫、
黒姫の御用を聞けば、立派な御出世が出来ます。宜しいかな、分りましたか」
と三歳兒をたらず様に、甘つたるい聲を出して抱き込まうとする。

蜂公はちこう「グツグツして居ると、國依別くによりわけが肝腎かんじんの御用ごようをしますで、早はやうお歸かへりなされ。悪い事わるいことは言いひませぬ……（小聲ここゑ）と斯かう言いうて門もんを潛くぐらさぬ様やうに、追おひまくる様やうにする俺おれの計略けいりやくだ」

と小さい聲こゑで呶つぶやくのを、高姫たかひめは耳敏みみざとくも、半分計はんぶんばかり聽きき取り、

「コリヤ門番もんばんの古狸奴ふるだぬきめが、黒姫くろひめさまはお前まへにチヨロまかされても、世界せかいの大門開おほもんびらきを致いたす日の出神でのかみの生宮いきみやは東助とうすけの門番位もんばんくらゐに誤魔化ごまくわされはせぬぞ。黙だまつて聞きいて居をれば何なにを云いふか分わかつたものぢやない。察さつする所家島ところえじま（繪島えじま）か、神島かみじま四邊あたりに隠かくし置おいたる三個さんこの寶玉ほうぎよくを、我々われわれが遠とほい所ところへ往いつたのを幸さいはひ、又ツクリと取とり出だし、初稚姫はつわかひめや玉能姫たまのひめに揚壺あげつぼを喰くはし、此館このやかたに言依別ことよりわけ、國依別くによりわけ、東助とうすけが潛ひそんで、玉相談たまさうだんをやつて居ゐる事は、日の出神でのかみの天眼通てんがんつうにチヤンと映うつつて居ゐる。どうだ、蛇あぶ、蜂はち、恐れ入おそれ入いつたか」

蛇あぶ、蜂はち一度いちどに、

「アハ、ハ、ハ、エライ日の出神でのかみさまだなア。何なにも彼かもよう御存ごぞんじだワイ」
高姫たかひめ「定きまつた事ことだ。世界見せかいみえすく水晶身魂すゐしやうみたまの日の出神様でのかみさまの仰有おつしやる事ことに間違まちがひが

あつてたまらうか。……サアサア高山彦さま、黒姫さま、アール、エース、……
虻、蜂兩人を取押へてフン縛り、我々は奥へ進み入つて、三人の面の皮を剥いて
やりませう」

高山彦「高姫さま、コリヤ……一つ考へ物ですな。多寡が知れた虻、蜂の門番、
そんな祕密が分らう筈がない。グツグツして居ると、良い翫弄物にしられるかも
知れませぬぞ」

高姫「そら何を仰有る高山さま、千騎一騎の此場合、チツト確乎なさらぬかいな。
……黒姫さまも餘程耄碌しましたね」

虻公「俺を取り押へるの、フン縛るのと、そりや何を言ふのだ、這いるなら這入
つて見よ。危ない事がして有るぞ。忽ち神の罰が當つて、虻蜂取らずの目に會つ
ても良けら、ドシドシとお通りなさい……と云ひたいが、金輪奈落此門を通しち
やならぬと云ふ嚴命を受けて居るのだから、表門は俺の責任があるから、入口は
一所ぢやない。貴様勝手に這入つたがよからうぞ。此前にやつて來たお前に似た
様な宣教師は廁の中からでも逃げ出たのだから、裏の方へそつと廻つて、廁の下

から糞まぶれになつて這入らうと這入るまいと、ソラお前の勝手だ。此門だけは、
絶対に通る事は罷りならぬのだ。ウツフ、。……三つの玉とか、五つの玉と
か、今頃には聖地は玉の光で美しい事だらうな。初稚姫さまも、玉能姫さまも、
餘り欲が深過ぎるワイ。三つの玉の御用をし乍ら、今度又龍宮の一つ島で結構な
玉を五つも手に入れて八咫鳥とかに乗つて歸つて御座るとか、御座つたとか云ふ
無聲靈話が、頻々と東助さまの館へかかつて來た。ア、さうぢや、空助さまも結
構な生田の森の館を棄てて聖地へ行かつしやる筈だ。初稚姫、玉能姫さまは、年
は若うても、流石は立派な方だ。一度ならぬ、二度ならぬ、三千世界の御神業の
花形役者だ。心一つの持様で、あんな結構な御用が出来るのだからなア。そこら
の人、爪の垢でも煎じて飲んだら薬になるだらう。ウツフ、。□
高姫「誰が何と云つても聞くものか。そんな巧い事云つて、此館に高姫を入れま
いと防禦線を張るのだらうが。そんな事を……ヘン喰ふ高姫で御座いますかい。
そんなら宜しい。裏門から這入つてやらう。さうすればお前の顔も立つたらう」
と掛合ふ所へ、東助の妻お百合は門口の喧しき聲に氣を取られ、座を立ちて一人

の侍女と共に此場に現はれ来る。

虻公「これはこれは奥様、よう来て下さいました。三五教のヤンチャ組の高姫一行がお出でになりやがつて、此門を通せと仰有りやがるのです。如何言つて謝絶つても、歸らうと仰有りやがらず、それ程這入りたければ、友彦の様に廁の穴からでも這入れと云つてゐる所で御座います。此御館は表門計りで、裏門と云へば雪隠の穴計り、そこからでも這入らうと云ふ熱心な方ですから……どうでせう、御主人はあれ文嚴しくお戒めになつて居ますけれども、そこは又臨機應變、どつと讓歩んで通してやつたら如何でせう」

お百合「これはこれは高姫様御一行で御座いますか、噂に承はつて居りましたが、ホンに立派なお方計り、ようお入来なさいました」

高姫「私は仰有る通り、高姫、高山彦、黒姫の三人で御座います。何時やらは御主人の東助どんに、家島まで送つて貰ひ、アタ意地くねの悪い、私の家來の清、鶴、武の三人を自分の船に乗せ、私を家島に島流しも同様な目に會はし、其後と云ふものはイロイロ雑多と此高姫を苦めて下さいまして、實に有難う御座います。

其お蔭で餘程私は身魂磨きをさして頂きました

お百合「どう致しまして、お禮には及びませぬ。苦勞の塊の花の咲く三五教で御

座いますから、貴方の様な肝腎のお方を改心させる御用を勤めた私の主人は、謂

はば高姫のお師匠さま格ですな。オツホ、

高姫「何と、理窟も有れば有るものだな。海賊上りの東助の女房丈の事あつて、

巧い逆理屈をお捏ね遊ばす。斯んな立派な館を建てて、酋長々々と言つて居つて

も、人品骨柄の下劣な事、破れ船頭が性に合ふとる。海賊をやつて澤山な寶を奪

ひ取り、財産家となつて、榮耀榮華の有りたけを盡し、今度は三つの御神寶にソ

ロソ口目を付け出した大泥棒の計畫中だらう。何と云つても奥へ踏み込み、言依

別、國依別を助けて失敗をさせない様に注意するのが男子の系統の高姫の役だ。

サア案内をなされ

お百合「そんなら開放致しませう。自由自在御勝手にお探し遊ばせ。此館は四方

八方蜘蛛の巣の如く、到る所に暗渠が掘つて御座いますから、うつかりお這入り

になると生命がお危なう御座いますぞ。これ程廣い屋敷でも、安心して歩行ける

所は、ホンの帯程より有りませぬ。それも生憎東助殿が繪圖面を持つて出て居られるものですから、私達は庭先だとして迂闊り歩けないので御座います。それ丈前に御注意申し上げておきます」

虻公「日の出の神の天眼通様、貴女はよく御存じだらう。サア、トツトと早くお入りなされ」

高姫は雙手を組んで思案に暮れ乍ら、一生懸命に祈願を凝らし出した。稍あつて高姫は、

「あゝ此處にはヤツパリ居りませぬワイ。……サア黒姫さま、高山彦さま、一時も早く生田の森へ参りませう。彼の方面に三箇の寶玉が現はれました。私の天眼通にチャンと映つた。早く往かないと又チヨロまかされると大變だ」

お百合「どうぞ、さう仰有らずと、御ゆつくり遊ばしませ」

高姫「ヘン京のお茶漬は措いて下されや」

とプリンプリンと肩や尻を交互ひに揺り乍ら、磯端の船に身を任せ、アール、エースの兩人に艫櫂を操らせ、一目散に再度山の峰を目標に漕いで行く。

執着心に搦れて

玉を抜かれた高姫や

黒姫二人の玉探し

太平洋の彼方まで

心焦ちて駆け出だし

どう探しても玉無しの

力も落ちて捨小舟

高山彦等と五人連れ

折角永の肝煎りも

泡と消えゆく波の上

誠明石の向岸

浪の淡路の島影に

船を漕ぎつけ東助が

館の門に走せついで

蛇と蜂との門番に

上げつ下しつ、擲掬はれ

心を焦ちて高姫は

又もや玉に執着を

益々強く起こしつ

再度山の山麓の

生田の森へと急ぎ行く。

生田の森の空助館には、
國依別、秋彦、駒彦の三人が、
臨時留守居役として扣

へて居た。

國依別「玉能姫さまも此館をお立ちになつてから、随分月日も経つたが、どうやら今度は龍宮の一つ島から結構な寶を受取つて、聖地へお歸りになると云ふ事だ。何れ初稚姫様、玉治別も一緒だらう。何時までも私も斯うしては居られないから、聖地へお迎へに行かねばならぬから、……秋彦さま、駒彦さまと兩人で此館を守つて居て下さい。直に又歸つて來ますから、……」

秋彦「ハイ承知致しました。併し乍ら萬々一、例の高姫一行が歸つて來て、國依別さまは何處へ行つたと尋ねた時には、何と云つて宜しいか、それを聞かして置いて貰ひたいですなア」

國依別「滅多に高姫は歸つて來る様な事はあるまい。併し萬一來たならば、一層の事、事實を以て話すのだな」

秋彦「そんな事話さうものなら、高姫は氣違になつて了ひますよ。三つの玉の所在は分らず、それが爲一生懸命になつて居る矢先、又もや結構な五つの玉を、同じ龍宮島から、初稚姫様や玉能姫さまが頂いて歸つたのだと言はうものなら、大變ですからなア」

駒彦「オイ秋彦、取越し苦勞はせなくても良いよ。其時は其時の事だ。……國依別さま、何事も刹那心で我々はやつてのけますから、御安心下さつて、どうぞ一時も早く聖地へお迎へに行つて下さいませ」

國依別「それぢや安心して参りませう」

と話して居る。窓を透かしてフト外を見れば、夜叉の様な顔した高姫、黒姫、高山彦外二人、此方に向つて慌しく進んで来る。

駒彦「ヤア國依別さま、秋彦、あれを見よ。呼ぶより誹れた。高姫が血相變へて歸つて來よつた。三人が斯うして居ると面倒だから、先づ此駒彦が瀨踏みを致し

ます。あなた方二人は奥へ這入つて、様子を考へて居つて下さい。私が一つ談判委員になりますから……サアサア早く、見つけられぬ内に……」

と促せば、國依別、秋彦はニタリと笑ひ乍ら、次の間に入り、火鉢を中に松葉煙草を熏べて様子を考へて居た、漸く近付いて來た高姫、表の戸を叩いて、

「モシモシ頼みます」

中より駒彦はワザと婆アの作り聲をし、

「此山中の一家を叩くは、水鶏か、狸か、狐か、高姫か…… オツトドッコイ鳶か眞黒黒姫の烏の親方か、ダ……ダ……ダ……誰だい」

外から高姫、婆聲を出して、

「誰でもない、日の出神の生宮だ。早く戸を開けぬか」

駒彦「今は日の暮だ、日の出神は朝方に出て来るものだ。蝙蝠の神なれば戸を開

けてやるが、日の出神なればママア御免コウモリだよ。オツホ、

高姫「此館には國依別と云ふ奴ハイカラが留守番をして居る筈だが、お前は一體、

何と云ふ婆アだ。根つから聞き慣れぬ聲だが、誰に頼まれて不在の家を占領して

居るのだ」

駒彦「オツホ、私かいな。私は國依別の妾だ。雀百まで牡鳥忘れぬと云う

て、棺桶へ片足を突込んで居る緞腰の婆アでも、姑の十八を言ふぢやないが、昔

は随分あちらからも此方からも袖を引かれ、引く手数多の花菖蒲、それはそれは

随分もてたものだよ。残りの色香は棄て難く、どこやら、好い匂ひがあると見え

て、色の道には苦勞をなされた國依別さまが、ゾツコンわたしに惚込んで五十も

違ふ年をし乍ら朝から晩まで大事にして下さるのだ。思へば思へば私の様な運の
好い者が何處にあらうか。男「やもめ」に蛆が湧くと云ふが、女「やもを」程結
構なものはないワイの。お前はどこの婆アだか知らぬが、餘程よい因果者と見え
て、其面は何だい。汐風に吹かれ顔の色は眞黒け、何方が黒姫だか、「アカ」姫
だかテント見當の取れぬお仕組だ。オツホ、。お氣の毒様乍ら、婆ア一人暮
し、お茶一つ上げる譯には行かぬから、トツトと歸つて下され」

高姫は戸の節穴から一寸中を覗き、

「日の暮れの事とて確實は分らぬがお前は婆アの假聲を使つて居るが男ぢやない
か。チツと怪しいと思つて居た。白状せぬかい。日の出神の眼を晦ます事は出來
やしないぞ」

駒彦ヤツパリ婆の假聲を出して、

「言靈は女で體は男だ。變性男子の根本の生粹の神國魂の御身魂だよ」

高姫「へんお前は元は馬公と云つた駒彦だらう。【馬】い事言つて私達を【駒】
らさうと思つても、日の出神は……へん、そんな事では困りませぬワイ。グツグ

ヅ申さずに、サツサと開けなされ」

駒彦「アツハ、、、とうと日の出神に發見せられました。……叩けば開く門の

口。叩いて分る俺の口。サツパリ化けが現はれたか。三千世界の大神物も薩張駄

目だ」

と無駄口を叩き乍ら、ガラリと戸を押開け、駒彦は腰を屈め、揉み手をし乍ら女

の聲を使ひ、

「これはこれは三五教にて隠れなき御威勢の高き、變性男子の系統の高姫様、黒

姫様、高山彦様の御一行、よくよくお訪ね下さいました、私は若彦の妻玉能姫と

申す者、何時も何時も結構な御教訓を賜はりました。紀州に於

て高姫様に夫婦對面の所を見付けられ、イヤモウ赤面を致しました。オツ

ホ、、、」

高姫「コレ駒彦さま、人を馬鹿にするのかい。大きな口を無理におチヨボ口にし

たり、玉能姫の假聲を使つて何の態だ。婆になつたり、娘になつたり、此頃はチ

ツとどうかしとりますな」

「ハイ、大にどうかしとります。何分三箇の玉は紛失致し、玉能姫に、折角御用を承はり乍ら、蛸の揚壺を喰はされ、此頃又五つの玉が聖地に這入つたとやら云ふ事、それで此駒彦も氣が氣でならず心配をして居ると、最前の様に黒姫とか云ふ婆アの靈が憑つたり、玉能姫の靈が憑つたり、時々刻々に聲までが變ります。

ハイハイ誠に面目次第も御座りませぬワイ。アツハ、、、」
と肩を揺る。黒姫は、

「お前さまは黒姫の靈が憑つたと仰有つたが、それは誰の事ですか。聞捨ならぬ今のお言葉……」

と鼻息を荒くする。

「駒彦の身魂は神が御用に使ふて居るから、イロイロの靈魂が憑るぞよ。駒彦が申しても駒彦が云ふのでないぞよ。口を借る計りであるぞよ。駒彦を恨めて下さるなよ。何事も神の仕組であるぞよ。駒彦は何にも知らず……ウンウン」

ドスン、バタンと飛びあがつて見せた。

黒姫「エー馬鹿にしなさるな。併し此館はお前一人かな」

駒彦こまひこ 一人ひとりと言いへば一人ひとり、大勢おほぜいと言いへばマア大勢おほぜいだら」

黒姫くろひめ 其大勢そのおほぜいは何處どこに居をるのだいら」

駒彦こまひこ 何を言いうても神様かみさまの容器いれものに造つくられた此肉體このにくたい、天津神あまつかみ、國津神くにつかみ、八百萬やほよろづの神かみが出入でいり遊あそばす駒彦こまひこの肉にくの宮みや、チヨコチヨコ日ひの出神でのかみもおいで遊あそばすなり、龍宮りうぐうの乙姫おとひめさまもチヨコチヨコ見みえますぞよ。眞まことの乙姫おとひめは此頃このころは駒彦こまひこの肉にくの宮みやに宿換やどがへを致いたしたぞよ……と仰有おつしやつて結構けつこうな玉たまを見みせて下くださいますワイ。ここにも現げんに天てん火水地結くわすゐちけつの五いつつの玉たまが、ヤツパリ……ヤツパリぢやつた。マア言いはぬが花はなですか
いなら」

高姫たかひめ得意したりがほ顔がほになり、

「それ、黒姫くろひめさま、高山彦たかやまひこさま、私わたしの天眼通てんがんつうは違ちがひますまい。キツと生田いくたの森もりに隠かくして有あるに違ちがひないと言いつただぢやありませんか。東助館とうすけやかたにグツグツして居ゐようものなら又また後あとの祭まつりになる所ところだつたが、斯かう自じ分ぶんの口くちから白状はくじやうした以上いじやうは、【てつきり】玉たまの所在あしかは此館このやかたに間違まちがひない。……サア駒彦こまひこ、モウ叶かなはぬ。綺麗きれいサツパリと其玉そのたまの所在あしかを系統ひつぽうの肉體にくたいにお明あかしなされら」

駒彦「玉の所在は龍宮島の諏訪の湖、玉依姫命さまが、モウ時節が到来したから、身魂の立派な守護神に渡したい渡したいと仰有るので、玉照姫様の御命令に依り、言依別神様から、東助さまや國依別さまに……お前受取りに往つて来んか……と云つて御命令が下つたさうです、私も御用に行きたいのだが怪體の悪い、留守番を命ぜられ、指を啣へて人の手柄を遠い所から傍觀して居るのだ。本當に羨ましい事だワイな」

高姫「そりや又本當かい。モウ既に聖地へ納まつたと云ふぢやないか」

「何分、時間空間を超越した神界の御經綸だから、過去とも未來とも現在とも、

サツパリ凡夫の我々にや分りませぬワイ。アツハ、ハ、ハ、」

高姫「どうやら奥の間に人の氣配がする。煙草を吸うて居るのか、煙管で火鉢を

ポンポン喰はして居るぢやないか。松葉臭い薰がして來出した。誰が居るのだ、

白状なされ」

「ハイ鼠が二三匹奥の間に暴れて居るのでせう」

「それでも煙が出るぢやないか」

「鼠が煙草を吸うて居るのでせうかい」

高姫はスタスタと奥の間の襖を引き開けて飛びこみ、二人の姿を見て、

「これはしたり、國依別、秋彦の兩人、卑怯千萬にも不在を使ひ、奥の間に姿を隠し、我々を邪魔者扱になさるのかーッ」

と言葉尻に力を入れ、角を立てて唵鳴りつけた。國依別は空助流にグレンと仰向けにひつくり返り、手と足を上の方にニユウと伸ばし、

「チユウ チユウ チユウ」

と鼠の鳴き聲をして見せる。秋彦は亦グレンと轉倒り、同じく手足を天井の方へニユウと伸ばし、

「クツクツ キユツ キユツ キユツ」

と脇の下に笑ひを抑へて居る。高姫は、

「何と云ふ不作法な事をなさるのだ。四足の眞似をしたりして、本守護神が現はれたのだ。ア、隠されぬものだ。身魂と云ふものは……日の出神の御威光に照らされて、此憐れな態、斯んな身魂を言依別の奴ハイカラが信用して居るのだから

……本當に悲しくなつて來た。幹部の奴は色盲計りだから、人物を視る目が無いから困つたものだ。誠のものは排斥され、斯んな者が雪隠蟲の高上りをするのだからなア」

國依別「チウ　チウ　チウ」

秋彦「クウ　クウ　クウ」

國依別「サツパリ……身魂がチウクウに迷うて居るワイの、ウツフ、。キ

ユツ　キユツ　キユツ　キユツ」

と體一面に笑ひを忍んで、波を打たせて居る。

高姫「コレコレ黒姫さま、高山彦さま、一寸來て御覽、大變な事が出來致しまし

た。天が地となり、地が天となり、サツパリ身魂の性來が現はれて、足が上にな

つて歩く人間が現はれました。どうぞ皆さま、やつて來て天津祝詞を奏上し、元

の人間になる様に拜んでやつて下さい。あゝ惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世」

と氣の毒さうな顔して、一生懸命に祈願をこめて居る。

（大正一一・七・一二　舊閏五・一八　松村眞澄録）

第一八章 玉の所在（七六四）

高姫の言葉に従ひ、黒姫、高山彦、アール、エースは一生懸命汗みどろに成つて、兩人の身魂の救はれむ事を祈願し始めた。國依別、秋彦兩人はムツクと起き上り手を組み、ドスン ドスンと座敷の眞中に床がぬける程、飛び上り擲擧ふ。高姫「皆さま御覽なさい。日の出神の御神力と言ふものは偉いものでせう。あの通り生き乍ら畜生道に陥ち込み、足をピンと上にあげて、如何する事も出来ずに鼠の靈に憑られて……チュウ チュウ、クウ クウ……と泣いて居りましたが、日の出神の反魂力に依りて此通り元の様になりました。座敷中飛び上つて居つたのも、此の日の出神の御神力に恐れての事、サア皆さま、寄つて集つて四方八方から鎮魂攻めにあはせ、國依別等を靈媒として、誠の玉の所在を白状させようぢやありませんか」

黒姫「そりや、至極結構でせう」

駒彦「もしもし、高姫さま、黒姫さま、何卒御心配下さいませ。彼奴ア、あん

な事ことをして貴方あなた等をた擲から掬かつて居ゐるのですよ。本當ほんたうにして居ゐると馬鹿ばかを見みますよ」
高姫たかひめ「お黙だまりなさい。お前まへさま等らに分わかつて堪たまりますか。此方このほうには日ひの出神でのかみと龍宮りゅうぐうの乙姫おとひめとが憑ついて居をります。擲から掬かつて居ゐるのか、本當ほんたうか、邪靈じゃれいが憑つつて居ゐるのか、そんな事ことが分わからずに如何どうして神界しんかいの御用ごようが出來できますか。お前まへさまのやうに、婆ばばになつたり娘むすめになつて誤魔化ごまくわさうとしても、日ひの出神でのかみの此高姫このたかひめが……ヘン……見みれば直すぐ化ばけが現あらはれる。お前まへさまはゴテゴテ言いふ資格しかくはないから、其邊邊そこらあたりのペンペン草ぐさでも引ひきなさい。それが性しやうに合あうて居をりますワイ、オホ、々、々」
駒彦こまひこ「高姫たかひめさま、お前まへさまの仰有おつしやるのも一應いちおう御尤ごもつともだが、よく泳およぐ者はよく溺おほると言いふ事ことがありますぜ。神懸かむがりの道みちを知らぬ者は神懸かむがりに騙だまされる事ことは無ないが、お前まへさまの樣やうに神懸かむがりに不徹底ふてつていして居ゐると、却かへつてアフンと言いふ目に遭あはされるか知しれませぬよ。此處ここは例れいのアフン鐵道てつどうの終點しうてん、ビツクリ驛えきだからなア」
高姫たかひめ「エー、八釜やかましいワイな。まア黙だまつて此生宮このいきみやの審神さにはを見みて御座ござれ。今いまに此兩このりやう人ににん口くちをきらして、お前達まへたちの一切いっさいの素性すじやうを素破すつぱ抜ぬかすから……。アア、龍宮りゅうぐうのひと一つ島しまから歸かへつて來くる途とちう中ちゆう隨分ずぶん苦勞くらうをしたが、一つ試し験けんの爲ため靈れいをかけて聞きいて

見よう^み」

と両手を組み、

大將軍様、十惡道様、地上大神様、地鎮荒神様、大黒主神様、鷹鳥神様、何

卒々々此兩人にお憑り下さいまして、玉の所在を一伍一什お示し下さいませ。天

下國家の一大事、決して高姫や黒姫の私有物に致すのでは御座いませぬ。惟神靈

幸倍坐世。一、二、三つ此玉が一時も早く出ます様に、一、二、三、四、五つの

玉が又もや現はれたと言ふ事、それが眞實ならば、今度こそは高姫、黒姫、高山

彦の三人にお渡し下さい。一、二、三、四、五つの玉が早く発見致しまするやう

六、七、八、九、十、百、千、萬、假令何處の果に隠しあるとも、大神様の

御眼力を以て御発見遊ばし、此肉體の口を借つて直接に御示し下さいませ」

とウーンウーンと靈を送る。國依別は組んだ手を頭上高くさし上げ、弓の様に反

り身になつて、

ウ、ウ、運命の綱に引かれて、龍宮の一つ島まで彷徨ひ歩く汝の心の可憐しさ、

オホ、おれは、おれは、おれは、おれは、おれは、フ、フ、再度山の大神狗である

ぞよ。高山彦や黒姫の心事を憐み、聖地の神には濟まぬなれども、玉の所在を知らして遣はず。それに就いては意地【くね】の悪い高姫が、此處に居つては絶対に言ふ事は出来ぬぞよ」

再度山の大天狗、そりやチツと量見が違ひはしませぬか。高山彦や黒姫に知らして此高姫に知らさぬと言ふのは、そりや又如何言ふ理由ぢや。それを聞かして下され」

それは…それは…それは我眷族の小天狗が、秋彦の肉體に憑つて居るから、それに聞いたが宜からうぞ。俺はもう引き取るぞよ」

引き取ると言うても此事解決をつける迄、靈縛を加へて引き取らせませぬぞ。

サア高姫に言はれぬと云ふ其理由から判然と聞かして貰ひませう」

日の出神は世界中見え透く神ぢやから、玉の所在は大天狗が知らさずともよく御存じの筈だ。申上ぐるも畏し、釋迦に説教を致す様なものだ。高姫に對し玉の所在を明かさぬのは、畢竟敬意を拂つて、日の出神の御神力を輝かさむと思ふ大天狗の眞心で御座る」

「御心遣ひは御無用に成されませ。さあチヤツと日の出神様の様な尊い神に御苦勞をかけるのも畏れ多い、お前さま、知つてるのなら小さい聲でソツと言つて下さい。黒姫や高山彦は、言はばお添物だから如何でも宜しいのだ」

と耳の端に口を持つて行き、小さい聲で囁く。國依別は故意と大きな聲で、
「それは高姫、一寸量見が違ひは致さぬか、今耳の端で……高姫さへ玉を手に入れたら宜い、高山彦や黒姫などは添物だ、如何でもいい……と囁いたであらうがな。そんな二心で黒姫、高山彦を扱つて居るのか。ヤイ、高山彦、黒姫、よう今迄高姫に馬鹿にしたられよつたな。もう神懸りは嫌になつた。俺は斯う見えて居つてもチツとも靈は懸つては居らぬぞ。國依別は肉體で申して居るぞよ。それに間違ひは無いぞよ。よく審神して下されよ」

「悪神と言ふものはよく嘘言をつくものだ。コラ大天狗、其手は喰はぬぞ。國依別の肉體が言つた等と巧く逃げ様と思つても、いつかないつかな此日の出神が睨んだ以上は逃がしはせぬ。サア綺麗サツパリと、高姫、黒姫、高山彦の三人の前で玉の所在を白状致すが宜からう」

國依別「三つの玉の所在を知らせませうか、但し五つの玉の所在からお知らせ致しませうか」

「何卒三つの玉の所在は申すも更なり、五つの玉の所在も一緒に仰有つて下さい。さうすれば再度山に立派なお宮を建て、其上大天狗の遊ぶ公園を造つて上げますから……何卒仰有つて下さい」

「そんなら是非に及ばず、知らしてやらう。三つの玉は二三日中に聖地へ八咫鳥に乗つて来るぞよ。一つの玉は玉治別、も一つは玉能姫、も一つはお玉の方、これが三つの生魂であるぞよ。又も玉照彦、玉照姫を合せて五つの御魂となるぞよ。アハ、ハ、ハ、」

「エー、合點の悪い。それは人間の名ぢやないか。本當の寶玉は何處にあるのだ、それを言ひなさい」

「實の處は此國依別も、秋彦、駒彦も聖地へ行き度いのが胸一杯なれど、折あしく其方等がやつて来たものだから行くに行かれず、迷惑致して居るぞよ。それに就いて玉の所在は此處ぞと嘘言を言ひ、高山彦の一行を或地點へ玉探しにやつて

置き、其ままコツソリと三人が聖地に行つて秘密の神業に参加する積りであつたが……ア、如何したら宜いかなア」

「それ見たか、矢張り國依別では無い。大天狗の神懸りだ。國依別が如何して自分の秘密を自分の口で言ふものか。これ大天狗、そんな嘘言云うた處で此高姫は承知させぬぞ。早く玉の所在を知らして下さい。大天狗なら何でも知つてる筈だ」

「そんなら玉の所在を詐つて騙してやらうか。間違つても決して國依別の肉體に對して不足は申さぬか」

「決して不足は申さぬ。嘘言から出た誠、誠から出た嘘言と言ふ事がある。嘘實不二表裏一體だ。何でも宜いから言つて下さい。物も研究だ。オーストラリヤ三
界まで調べに行つて來た熱心な我々一同、假令一日二日遅れても構ふものか、な
るべく本當の事を嘘言らしく言ふのだよ」

「本當の嘘言の事を本眞らしく申してやらう。神の奥には奥があり、其又奥には奥があるぞよ」

「エーそんな事は妾の言ふ事だ。奥の奥の其奥は羽織の紐ぢやないがチヤンと胸にある。サア言つて下さい」

「オ、俺は、俺は大天狗の事であるから、言依別命の爲さる事はチツとも分らぬぞよ。實の處は知らぬと申すより外は無いぞよ」

「エー、意茶つかさずに置いて下され。【あた】辛氣臭い、早く言ふのだよ。何時までも人を暇さうに焦慮らすものだない。時機切迫の今日の神界、假令一分間でも空に光陰を費やす事は出来ませぬ」

「此大天狗が知らぬと言うたら何處迄も、シ、知らぬぞよ。ウフ、」

「もしもし高姫さま、此奴ア駄目ですよ。あんまり玉々と言つて玉に魂を抜かして居るものだから、大天狗の鼻高が我々を騁るのですから、よい加減になつて置きなさいませ」

「これ黒姫さま、そりや何を仰有る。掃溜の中にも金玉が隠される事がある。斯う言ふ低い神に聞いた方が却都合が好いのだ。少し腹のある神は中々祕密は申さぬが、斯う言ふ低い神は責めて責めて責め倒すとツイ白状するものだ。お前さ

まも来てチツト鎮魂攻めを手傳つて下さい。何處までも責めて、白状させねば措きませぬぞえ」

「ア、ア、悪戯が本當になつて來た。二進も三進も方法がつかぬワイ、……もし高姫さま、何も憑つては居りませぬ。國依別が放題を申したのですから、何卒神直日大直日に見直し聞直し、一座の興だと思つて諦めて下さい」

高姫は首を振りウンと息をかけ、

「一座の「けふ」も明日もあつたものかい。何處までも調べて調べて、調べ上げねば措きませぬぞ。假令百日かかつても千日かかつても白状させねば措くものか、サア大天狗、もう好い加減に白状したら如何だい」

「ア、困つたな。實の處は早く聖地に行かねば、言依別神様にお目玉を頂戴するのだ。然し高姫と一緒に歸つては困るなり、實際は嘘言だから何處に玉が隠してあるか、そんな事が分るものか。國依別の肉體に間違ひないから、何卒疑ひを晴らして下さい」

高姫はキツとなり、

「こりや、再度山の大天狗奴、何と言つても白状させねば措くものか」

と又もや汗をたらたら流し、「ウンウン」と靈を送る。側に目を塞ぎ手を組んで坐つて居た秋彦の方は根つから、相手になつて呉れぬので、

「アア、偽神懸りも辛いものだ。誰も相手になつて呉れない。本當に玉なしだ。ア、もう廢めとこかい」

「これ、小天狗、巧い事化けやがるな。何と言つても肉體ぢや無い。サアお前はチツとでよいから何方の方面だと言ふ事は知らして呉れ。さうしたら公園を拵へお宮を建てて祀つてやる」

「公園も何も要りませぬ。あゝ足が痛くなつて來た」と立ち上らうとする。

「これ黒姫さま、高山彦さま。秋彦の兩方の手をグツと握つて下さい。小天狗の奴、何處へ肉體を連れて行くか分りませぬぞ。白状させる迄は此肉體を外にやる事は絶対になりませんぞ」

國依別「そんなら、エー、白状致します。再度山の犬天狗に間違ひはありません。」

またこのあきひこ
又此秋彦の肉體に憑つて居るのは私の眷族小天狗です。何卒しつかり手足を掴まへて立つて去なぬ様にして下さい」

「これこれ國依別さま、殺生な事を言はないで下さい。足が痛んで仕方がありません。せぬ。お前さまがするから真似したのが病付きだ。……もしもし御兩人様、どうぞ手を放して下さい。お前さまも肉體か神懸りか分らぬ事はあるまい。本當によく調べて下さい」

「何と仰有つても小天狗は小天狗だ。國依別は平常から鼻が高いから小天狗が憑るのは當然だ。お前も鼻高だから身魂相應の小天狗が憑るのだ。巧い事肉體に化けても【あき】ませぬぞよ」

國依別「アハ、ハ、ハ、ハ、曉没漢ほど困つたものは無いワイ。そんなら偽の神懸りで、大天狗が高姫に玉の所在の【スカタン】を知らして上げようかい。其代りに知らしてやつたら此處を立ち退くだらうなア」

「何處迄もお前を引張つて行つて神懸りをさせて玉を探させ、土の中でも何尺下と言ふ事を透視さすのだから、玉が出る迄放しませぬぞえ」

國依別「こいつは困つたなア。俺も自分乍ら肉體だか神懸りだか分らぬ様になつて仕舞つた」

高姫「それ見なさい。何處だかハツキリと白状しなさい、事と品とに依つたら此場で開放してやるかも知れませぬ」

國依別「別に開放して貰はなくともよい。靈縛されたのでも無し、自由自在に行き度い處に行けるのだが、一つ困るのはお前さまが跟いてくる事だ。跟いて來さへせねば國依別は國依別としての御用が勤まるのだ。二三日遅れて聖地へ歸るなら歸つて下さい。それ迄にチャンと祕密の相談をして、お前さま達にアフンとさせる仕組をさせねばならぬからなア」

「何と言つても國依別が其んな自分の不利益な事を喋るものか。再度山の大天狗に間違はあるまいがな」

と後程大きな聲で呶鳴りつける。

「そんなら三つの玉の所在を一人々々一ヶ所づつ申し上げるから、互に祕密を守つて下さい。三人が三人乍ら分らない様にするといふお約束になれば、實際の事

を大天狗が申し上げませう。實の處は言依別命様が明日の朝早く掘り出しに御出になり、又外へお隠し遊ばすのだから、玉を手に入れるのなら今の内ですよ」

高姫、首を縦に三つ四つ振り乍ら、

「あ、さうだらうさうだらう、そんなら高山彦さま、黒姫さま、妾は如意寶珠の玉の所在を聞きますから、貴方達は彼方へ行つて下さい。順番が廻つて來たら知らせますから……」

黒姫「エー、仕方が無い。そんなら順番が來る迄待つて居ませう」

と次の間に下がる。

「此家を遠く離れて森の中まで行つて下さい。さうでないとお前さまの副守護神が立聞きすると困るから……」

「ハイ ハイ」

と長い返事をし乍ら黒姫は出でて行く。

高姫「さア御注文通り誰も居りませぬ。チャツと仰有つて下さいませ」

「金剛不壞の御玉は、空助の娘、初稚姫、言依別の手より受取り給ひ、近江の國

の竹生島の社殿の下に三角石を標として匿し置かれたぞよ。その方は只今より黒姫に姿を隠して、一時も早く竹生島に向つて玉取りに行くが宜からう。愚圖々々致して居ると言依別の使者に先に掘出されて仕舞ふぞよ」

「何でも妾の靈眼に映じたのは島ぢやと思つて居た。お禮は後で申し上げる。又國依別の肉體も良い御用をしたのだから、肉體に對しても後で御禮を申すから……」

と欣々と空助館の裏口より驅出して仕舞つた。

國依別「オイ秋彦、駒彦、如何だ。俺の狂言は餘り巧くやり過ぎて、本當の大天狗にしられて仕舞つたぢやないか。アハ、ハ、ハ、」

秋彦「然し國依別さま、本當に金剛不壞の玉は竹生島に隠してあるのですか。俺は初めて聞きましたよ」

國依別「大きな聲で言ふな。疑ひ深い高姫がソツと俺達の話を立て聞きしてるか知れぬぞ……」

「オイ、駒彦、家の周圍を見て來い」

駒彦「イ、エ、高姫は雲を霞と走つて行きましたよ」

「サア、之から此大天狗が黒姫、高山彦を何とか撒かねばならぬ。今度は何處に隠したと言はうかな。エー、よしよし、其時の鹽梅ぢや、……オイ駒彦、黒姫さま唯一人來いと言うて呼んで來い」

「承知しました」

と尻引からげ、森の中に控へて居る黒姫を迎へて來た。黒姫はイソイソとして足も地に着かず此場に現はれた。

「今改めて大天狗より黒姫に黄金の玉の所在を知らしてやらう。高姫は既に寶の所在を教へられ掘出しに出立致したぞよ。サア秋彦、駒彦、其方は門外へ出て仕舞へ、祕密が洩れると大變だから……」

二人は笑ひ乍ら門口へ飛び出す。

「再度山の犬天狗が今改めて黒姫に黄金の玉の所在を知らしてやる程に、假令高山彦になりとも口外せぬと言ふ事を誓ふか、如何だ」

「ハイ、決して祕密は漏らしませぬ」

「そんなら確に聞け。近江の國は琵琶湖、竹生島の辨天の祠の下に、三角形の

石を標として三尺下に黄金の玉は隠されてあるぞよ。早く参らぬと言依別の使者が掘出して、後でアフォンとせねばならぬぞよ。一時も早く行つたが宜からう」

「それはそれは、有難い貴方のお示し、そんなら之から参ります」
と裏口より夜叉の如く尻引からげ、雲を霞と驅け出しぬ。續いて高山彦も此處に招かれて又もや國依別の居間に入り来る。

「ヤア其方は高山彦で御座つたか。今大天狗が知つた丈の事を教へて遣はず。高姫には金剛不壞の如意寶珠の玉の所在を示し、黒姫には黄金の玉の所在を知らした處、兩人は時おくれては一大事と、玉の隠し場所へ走つて行つたぞ。紫の玉の所在は瑞の御魂の佩かせ給ふ十握の劍より現はれ出でたる、三女神の鎮まり給ふ近江の國は竹生島、辨天の祠の下に、三角形の石を乗せて三尺ばかり底の方へ隠してあるぞよ。一時も早く取りに行かぬと聖地より掘出しに行くぞよ。如何ぢや、ありがたいか」

「ハイ、有難う。三人共願望成就、御禮は後から、ゆつくり……左様なら……大天狗様、之にてお別れ致します」

「汝は裏口より走つて行け。さうしてアール、エースの二人を伴ひ、刻を移さず走つて行くが宜いぞよ」

「何から何まで御注意下さいまして有難う御座います。御禮は後より……」

と言ひ捨て、長いコンパスを大股に踏張り乍ら地響き打たせて、ドスンドスンと床を鳴らして進み行く。國依別は後見送つて、

「アハ、ハ、ハ、三五の神の道にはチツとも嘘言は申されぬのだが、アア責められちや仕方がない。玉はなくても辨天様へ参拜して結構な悟を開き、玉以上の御神徳を頂くと思つて、竹生島詣りをさしてやつたのだ。知らず知らずに瑞の御魂に

頭を下げさすと言ふ俺の仕組だ、何と妙案だらう」

秋彦「其奴ア上出来だつた。然し駒彦さま、お前しつかり留守して居て呉れ。愚圖々々して居ると初稚姫様や玉能姫様が聖地へお歸り遊ばした後になつては大變だから、俺達二人は之から聖地へ参拜するから……あと宜しく頼むよ」

駒彦「ヨシ、承知した。サア早く行つたが宜からう。東助さまも、モウ今頃は聖地へ安着されてる時分だ。お前達兩人の歸るのを首を長うして待つて居られるだ

らう。サア後は俺が引受けるから、心配せずに早く足の用意に掛つて呉れ
國依別、秋彦は急ぎ旅装を整へ、館を後に聖地を指して進み行く。

(大正一一・七・一二 舊閨五・一八 北村隆光録)

第十九章 竹生島(七六五)

金剛不壞の如意寶珠 黄金の玉や紫の

珍の寶に魂を 抜かれて胸もどきどきと

浪高姫や黒姫が 高山彦と諸共に

高山低山野の末や 河の中迄村膽の

心を配り氣を配り 探して見れど影さへも

見えぬみたまの苦しさに 又も龍宮を後にして

このよあのよ
現界幽界の瀬戸の海

いのち
命を的に淡路島

すもと
洲本の郷に名も高き

とうすけやかた
東助館に立ち向ひ

あぶはち
虻蜂取らずの問答に

やつさもつさと時移し

あらそ
争ふ折しも女房の

おゆり
お百合の方にうまうまと

ゆ
揺り落されて荒浪の

うちよ
打ち寄せ来る汀より

また
又もや船を操りて

ふたたびやま
再度山のふもとなる

いくた
生田の森に着きにける

たかひめくろひめはじ
高姫黒姫始めとし

たかやまひこ
高山彦は黒ン坊の

アール、エースを随へて

をしへ
教の館に来て見れば

せきやうにし
夕陽西に傾きて

からす
烏の聲も悲しげに

ねくらもと
埽求むる宵の口

もん
門に佇み戸を叩き

おとな
モウシモウシと訪へば

なか
中より聞ゆる婆の聲

いぶ
訝かしさよと高姫は

と
戸の隙間より打ち覗き

らうば
老婆の聲の持主は

てつきりをこ
的切男と判明し

まへ
お前の聲は駒彦か

馬鹿にするのも程がある
早く開けと打ち叩く

是非に及ばず駒彦は
中よりガラリと戸を開けて

俄に作るおチヨボ口
揉手しながら腰屈め

優しき女の作り聲
高姫さまや御一同

ようまアお越し下さつた
サアサアお入りなされませ

私の體は駒彦ぢや
俄に體が變になり

慄ひ出したる折もあれ
黒姫さまの靈が來て

重い體を自由自在
婆さまの聲を出しました

續いて憑つた玉能姫
以前に變る淑やかな

惚れ惚れするよな涼し聲
我と我が手に惚ました

高姫司は横柄に
然らば御免と云ひ捨てて

高山彦や黒姫を
伴ひ一閒に座を占める

國依別や秋彦は
こりや耐らぬと奥の間へ

一時逃れに身を隠し
火鉢を前に長煙管

まつば 松葉の粉煙草吸ひながら
カンと叩いた煙管の音に

たかひめ 高姫一行耳を立て
つかつか 奥へ進み入る

たいへん 高姫一行耳を立て
もくすけつかさ 空助司の眞似をして

こりや 大變と兩人は
ちウチウ クウクウ キウキウと

てんじやう 天井の鼠の眞似をする
ここ 此處へ高姫やつて來て

かあい ほんに可愛や兩人は
れいにくとも 靈肉共に四足に

なつて 仕舞うたか神様に
お詫申して助けむと

ひの 日の出神の生宮が
りうぐう 龍宮の乙姫諸共に

ウンとばかりに靈をかけ
あまつのりと 天津祝詞を宣りつれば

くに 國依別は起き上り
すわ 坐つた儘の神懸り

ドスンドスンと飛び上り
ざしき 座敷の中にて餅を搗く

しかこう 鹿公迄が同じよに
さる 猿の人眞似飛び上り

もち 餅と團子を搗き交せて
たかひめつかさ 高姫司を相手取り

てもちぶさ 手持無沙汰な顔をして
だんごりくつ 團子理窟を捏ね廻し

嘘うそから生うまれた大天狗だいてんぐ たうとう眞實ほんとの鼻高はなだかに

しられて仕舞しまひ兩人りやうにんは 引ひくに引ひかれぬ當惑たうわくの

締木しめぎにかかつた可笑をかしさよ 駒彦こまひこ様子を窺うかがへば

眞面目まじめな顔かほで高姫たかひめや 高山彦たかやまひこや黒姫くろひめが

押問答おしもんだふのいがみ合あひ 吹ふき出だす許ばかり思おもはれて

臍茶へそちやを沸わかす苦くるしさに 外そとの景色けしきを眺ながめやり

可笑をかしさまぎらまどす窓くちの口くち セツパ詰つまつた國依別くによりわけは

たうとう天狗てんぐになり濟すまし 高姫司たかひめつかさをチヨ口くちまかし

近江あふみの國くにの竹生島ちくぶしま 瑞みづの御魂みたまの聖場せいぢやうへ

高山彦たかやまひこも黒姫くろひめも やつて仕舞しまうた御手際おてぎはに

駒彦こまひこ胸むねを撫なで下おろし 生田いくたの森もりの留守番るすばんを

仰あふせつけられゆゑました故ゆゑ 確しつり後あとを守まもります

國依別くによりわけや秋彦あきひこの 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

何卒御無事どうぞごぶじでお達者たつしやで 綾あやの高天たかまに恙つつがなく

早く安着遊ばせよ
孰れ高姫一行は

綾の聖地に歸りませう
その時こそは國依別と

高姫さまの争の
立派な花が咲くである

今から思ひやられます
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして
國依別や秋彦に

敗北を取らして下さるな
三五教の大神の

宇都の御前に駒彦が
心を正し身を正し

慎み敬ひ願ぎまつる

と別れの祝歌を歌つて兩人が聖地へ参向の首途を見送るのであつた。あゝ惟神靈
幸倍坐世。

(大正一一・七・一二 舊閏五・一八 加藤明子録)

~~~~~

靈界物語 第二五卷 海洋萬里 子の巻

終り